全日本リアリズム演劇会議機関誌

演劇会議

＜発言＞　地域演劇の在り方　―愛媛の場合―……畑　野　　稔…　1

＜レポート＞地域演劇への助成　―兵庫県・神戸市―……梶　　武　史…　2

□　全リ演（東）第３回「作家会議」の報告……栗　木　英　章…　6

□　初の海外公演から（フランス太鼓公演）……京浜協同劇団…　14

城谷　護・鈴木たか子・和田庸子・吉田理恵・根倉藤子

□　劇団通信……　23

『牛乳屋テヴィエの物語』（モスクワ・レポート８）……桜　井　郁　子…　41

□　劇　　評

「雪やこんこん」（演劇街）……仲　　武　司…　44

中部ブロック・春から夏の上演から……栗　木　英　章…　46

「エリアンの手記」（劇団大阪）……小　松　　徹…　51

観劇雑感……萩　坂　桃　彦…　54

□　戯　　曲

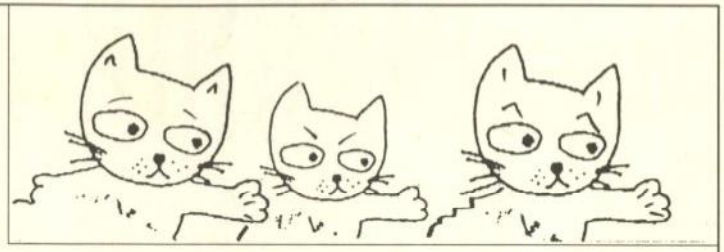
『不断煩悩得涅槃』……こばやしひろし…　61

78

１９９１年8月　　￥５００

関西芸術座 1992

腹をすかせた
のら猫が
大きな魚が
住むという
北の湖へ
旅に出た……



井上ひさし／作　ミュージカル

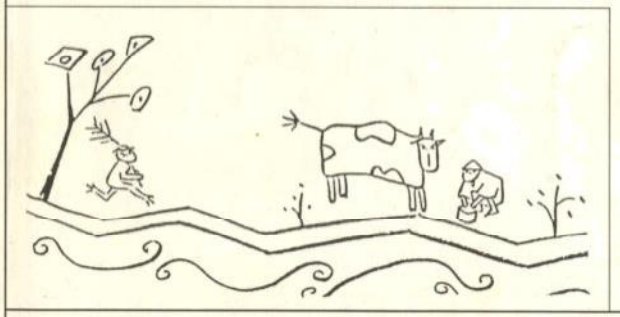
ヤーぴきのネコ

演出／上利勇三
音楽／佐野芳彦　振付／上甲裕久

1月スタート

かっ　ぱ　わび　じょう　もん
河童詫証文

作／栗原　省
演出／仲　武司



その瞬間、ぼくは
河童が
愛しいと、思った

紀州につたわる
きのくに民話……

☆好評巡演中

あなたの、あなた自身のためのレッスン
関西芸術座附属演劇研究所
研究所生募集
★オーディション――毎年３月初旬★

関西芸術座　大阪市阿倍野区文の里四丁目18番６号
TEL 06(621)2112～4　FAX 06(629)0112/〒545

□劇団テアトル・ハカタ
「好色五人女」
脚本・石山浩一郎
「おせんの巻」演出・舟越　節

「お夏の巻」
演出・北川湛子

「お七の巻」
演出・竜まさと

＜新刊紹介＞

『ものそのものが語るとき』木村次郎戯曲集

頒価２７００円（送料３００円）

◇　内　容

＜序＞　大浦暁生

＜人形劇＞　あのさま　＜影絵劇＞　爪子姫とあまのじゃく　＜人形劇＞　狸と山伏

＜人形劇＞　猿蟹合戦　＜歌舞劇＞　猿蟹合戦

＜戯　曲＞　棉畑の陽気なうさぎさん　谺（こだま）

オキクルミと悪魔　火の花　蘭学事始　絵姿女房　わらしべ王子

＜木村次郎との仕事＞　田畑　精一　丸山　亜季　中村　欽一

＜刊行の覚書＞　久保田　穰　菅野　博行

◇　発行所　群馬文学集団　〒371　前橋市北代田町２６９

☎ 0272－32－4939

~~~~~~

『新劇経営製作者の生活と意識』

—その実態調査報告書　1991年版—

◇　内　容

＜発刊にあたって＞　宮川　豊（劇団文化座）　横川　功（劇団東演）

＜調査アンケートの概要＞　長谷川正明（人形劇団プーク）

①年令・経歴　②家族　③仕事の内容　④収入　⑤地位　⑥休日・休暇

⑦産休・育児　⑧健康　⑨保険入状況　⑩老後　⑪定年制・退職金　⑫年金

⑬現状の総括

＜座談会＞　倉林誠一郎（俳優座）　長谷川正明（人形劇団プーク）

村上　民子（青年劇場）　横川　功（劇団東演）

宮川　豊（劇団文化座）　加藤　晶子（演劇集団　円）

●　＜読後コメント＞

劇団における制作者とはなにか。その本来性と現状、これからどうなるかが具体的につたわってくる。そしてじつに考えさせられた。（桃）

◇　発行所　日本新劇経営製作者協会

〒160　東京都新宿区新宿３－35－５　沢田第２ビル　５Ｆ

新劇団協議会内　０３－３３４１－８１５１

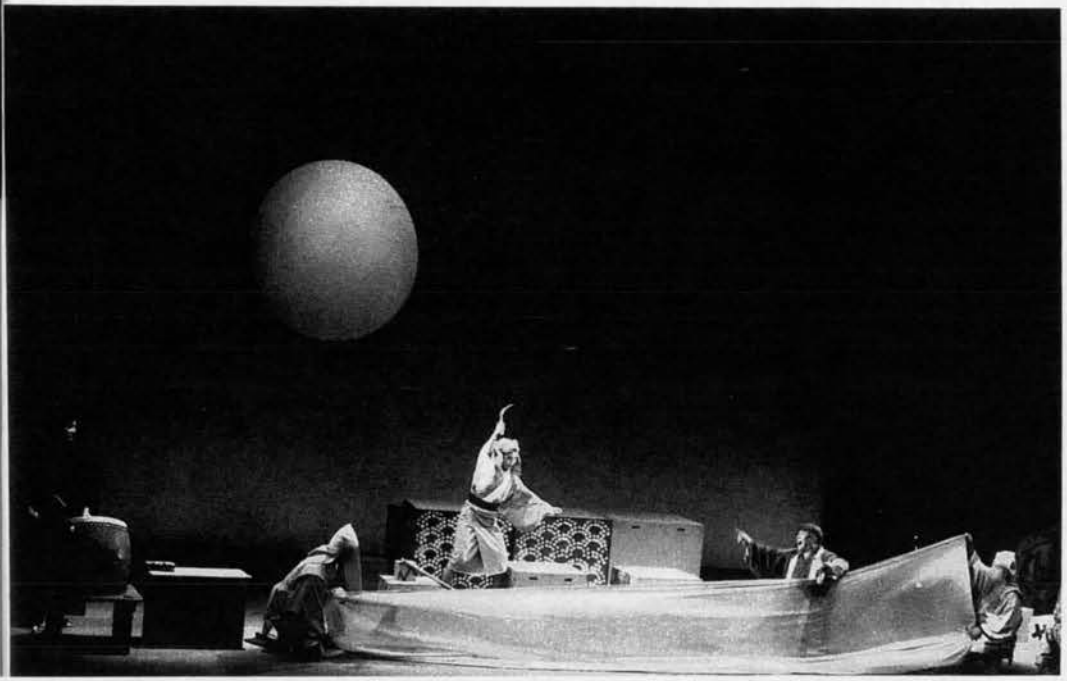
◇　定　価　１０３０円（消費税込み）
~~~~~~

□劇団未来
「赤い陣羽織」
作・木下順二　演出・西尾臣示

□関西芸術座　「河童詫証文」　作・栗原　省　演出・仲　武司

□劇団未来
「昔がたり」
作・宇津木秀甫
演出・金沢百合子

□劇団潮流　「カチカチ山」　作・太宰　治　演出・藤本栄治



□劇団名古屋演集
「泰山木の木の下で」
作・小山祐士
演出・浦はじめ

□東京芸術座　「銀河鉄道の恋人たち」　作・大橋喜一　演出・杉本孝司

□劇団潮流　「いま生きる―ある17歳の軌跡―」　作・かたおかしろう　演出・一杉　忠

□劇団だいこん座
「教員室」
作・山田太一
演出・高橋　寛

□劇団弘演
「葉桜」
作・岸田国士　演出・宮崎英世

□劇団名芸
「オズの魔法使い」
脚本・栗木英章
演出・佐野秀明

□青年劇場　「すみれさんが行く」　作・斉藤紀美子　演出・堀口始

□劇団支木　「西の国の人気男」　作・J・Mシング　演出・伊藤一郎

□劇団大阪
「エリアンの手記」
作・山崎　哲
演出・堀江ひろゆき

□演劇集団和歌山
「操縦不能」
ーアネイブル・トウ・コントロールー
作・演出　楠本幸男

□演劇集団和歌山
〈和歌山大空襲記念企画〉
「一番星だれが見つけた」
作・演出　楠本幸男

▲ 京浜協同劇団　「日本の太鼓」　藤井康雄演出　安達元彦音楽監督

□劇団海鳴り　「オズの魔法つかい」　脚本・演出　我孫子正好

□劇団埼芸　「神通川」　作・本田英郎　演出・川村武夫

◀「日本の太鼓」フランス親善公演に
拍手を送るエブリ市の人たち
（エブリ市青年文化会館で）

◆東会議・第三回「作家会議」にあつまった二十一名のなかまたち。一九九一年五月十一・十二日。場所は信州蓼科高原、名古屋大学研究宿泊所。記念写真などは遠来のめずらしい顔をこそ—（たとえば支木の柾谷伸夫氏）前列にすえるべきであったと、これを見て思った。六頁の栗木英章氏の報告をじっくり読んで、おもいあたる顔を探すのもなぐさみかもしれない。（萩坂）

〈余白をかりて〉

どういうわけか本号は巻頭向け写真が殺到した。同じ演目に何枚も送られてきたりだが，やむなくそのうちの１枚をえらぶことになる。同じ劇団でも演目の別のものは掲載するようにしている。もちろん，そうもいかぬこともある。

どうやら，「演劇会議」も読む雑誌から見る雑誌に変りつつあるようである。そのうち，通信より写真だけおくられてくるようになるかもしれない。写真の返却を乞われることもしばしばである。割付けで鋏をいれることもあるので，なるべく返却不要のものをとねがったりしている。

〈発　言〉

地域演劇の在り方　—愛媛の場合から—

畑野　稔
（劇団こじか座）

愛媛県下一円の劇団・演劇サークル、十一を集めて、愛媛演劇集団協議会（略称、愛劇協）を結成し、その発足総会を挙げたのは、六月十七日である。総会は喜多郡内子町の内子座で開かれた。内子座は、香川県琴平市の金丸座（俗称・こんぴら金丸座）に次ぐ四国で二番目に古い、復元された芝居小屋である。昔から芝居を始め、浪曲の類に至るまで、庶民の生活に密着した芸能が長くくり広げられてきた場所でもある。最近になって内子町の古い町並みが全国的に注目を浴び、それと共に内子座の活用について町当局もいろいろ模索を始めていた。県下で生まれた集団をこれまでのように消滅するにまかせるのではなく、何とか継続させて、創造の軌道に乗せ、県内の創造活動全体の活性化につなげたいと考えていた我々の動きと、内子町の意図が一致して、総会・内子座開催が実現した訳である。

内子町は〝ふるさと創生費〟一億円と別途基金一億円を合算したものの利息で、内子座活用の運動の運営を考え、いわばハードウェアに重点を置いた考えに立って、ソフトウェアについて我々の力を求め、我々もまた、内子座は常に視野に入れて考えを進めてきた。

町側が町起こしを模索してたどり着き、我々は創造の活性化を地域に求めて、来るべきところへ落ち着いた場所がこの一致点であったということである。

総会以前の準備会の段階で、内子町と合意したのは、〝年一回内子座演劇祭を愛劇協と内子町共催で催し、ゆくゆくは、瀬戸内演劇祭、もしくは西日本演劇祭に発展させる。当面は県内の集団を対象にこの祭典を行い、仕込み費一切を内子町が負担する〟というものであった。

愛劇協に組織された集団の中には、ミュージカル専門の劇団、小劇場志向のものなど、創造理念も方法も異ったものが多彩に集まっている。だがこれらの中の若者も老年も、（準備会から総会で、初めて内子座に接した者が多かったが）均しく内子座に惚れこんでしまったのである。それは民衆芸術の息吹きの染みついた枡席や大向うを見て芝居の血が騒ぎ始めたと言えるのかも知れない。

本来〝地域〟は、そこに在る文化をかけがえのないものとして、継承発展させていく営為の場とされているが、内子座に対して改めてそのような思いを半ば本能的にかき立てたといえばうがち過ぎだろうか。もちろん仕込費一切町負担の魅力も大きい。しかし同じく助成金支給の昨年行われた国民文化祭の後を承けた県主催県内演劇祭出演よりも、この内子座演劇祭出演希望がはるかに多いのも事実である。

我々は、このことから、愛媛における地域演劇としての方向は、次の二点を足場にすべきであると考えた。その一つは、地域に惚れる感性、別の一つは、身近な自治体との結合を通して運動の方向を切り拓く情熱、である。民衆芸術再現に血を騒がせる愛媛の今の流れが、さらに発展するであろうことを私は信じて疑わない。

〈レポート〉

地域演劇への助成
―兵庫県・神戸市―

梶　武史

芸術文化振興基金が設置されて三年が経過しました。この基金については不透明な点が多く残っているものの、「演劇会議」七十六号で土方与平氏が指摘されているように、近年、地方自治体レベルでの芸術文化に対する助成の状況は、これまで動きの少なかった演劇分野にも重要な前進の機運がみられるようになっています。

昨年の三重県における演劇フェスティバルでの成功は、全り演運動に新たな可能性を開きました。また大阪の新劇団合同公演「三文オペラ」に国と自治体からの助成があり、それぞれの地域で芸術文化活動助成への関心が高まっています。またハード面でも従来のようにホール建設にとどまるのでなく、福岡市では長年の運動が実って公共の稽古場センターが開設されるという朗報もあります。こうした状況ですから各地域でも、より積極的に自治体へアプローチしていくことが大切です。

全り演としても、国レベルで運動をすすめるとともに、各地域での情報や運動の体験を交換するなど、自治体の文化行政への関心を強める必要があります。

そこで、誌上を借りて、まずは兵庫県・神戸市の演劇分野への助成の実情を報告することにしました。（国の芸術振興基金については、ここでは省略します）

兵庫県芸術文化振興基金

兵庫県では、国民文化祭の地元開催を契機にして、国民文化祭の兵庫版ともいえる県民文化祭「ふれあいの祭典」をスタートさせるとともに、翌一九九〇年四月（平成二年度）に兵庫県文化振興基金を創設しました。基金は二十億円、その運用益一億円が年間予算です。

事業内容は、①芸術文化団体の助成　②新進芸術家活動奨励　③県民芸術劇場　④芸術文化団体海外公演等助成　⑤新進芸術家海外留学等助成　などで、このうち私たちに深い関わりがある①と③について紹介します。

芸術文化団体の助成

兵庫県芸術文化団体活動補助金交付要綱には、次のように記されています。

（主旨）

第一条　この要綱は、県民の芸術文化活動の振興を図るため、芸術文化活動を目的として組織された団体（以下「団体」という）が行う芸術文化事業に対して、補助金を交付することに関し、必要な事項を定めるものとする。

（補助対象団体）

第二条　補助の対象となる団体は、県内に活動拠点を置く次の各号に掲げるいずれかの団体で、かつ、営利活動を目的とせず、政治活動、宗教活動を行わないものとする。

（1）県域を対象に流派等を超えて組織された団体で、知事が県民の芸術文化の振興に寄与していると認める団体

（2）県内の広域的な地域を対象に芸術文化の分野や流派等を超えて組織された団体で知事が県民の芸術文化の振興に寄与していると認める団体

（3）その他特に知事が県民の芸術文化の振興に寄与していると認める団体

（補助対象事業）

第三条　補助の対象となる芸術文化事業は次の各号に掲げる要件を満たす事業とする。ただし、営利活動、政治活動、宗教活動に関わるものを除くものとする。

（1）美術、音楽、演劇、文芸等芸術文化に関する公演、コンクール、展示、出版の事業で、県民の芸術文化の振興に寄与すると認められるもの

（2）広く一般県民を対象とする芸術文化事業で、広域的な展開が見込まれるもの。

（補助金の額）

第四条　補助金の額は、補助対象経費の二分の一以内とし、一団体五十万円を限度とする。

第五条以下には、補助金の申請手続きなどこまごまと規定されていますが、補助の要件をまとめると次のとおりです。

①　劇団単位でなく、例えば劇団協議会のような団体が対象

②　事業に対する助成

③　補助対象経費の二分の一以内で、一団体五十万円以内。

④　申請に基づき、実績報告により助成

昨年度は、兵庫県劇団協議会主催の「神劇まわり舞台」（後述）が五十万円の助成を受け、今年も同事業で申請する予定ですが、助成される見通しです。

自治体の窓口は、兵庫県の場合、生活文化部文化課です。

県民芸術劇場

これも芸術文化振興基金の事業で、主として県下の芸術団体が出演する舞台を県民に鑑賞する機会を提供することを目的とし、今年は七月から来年三月までの期間に、各市町で計四十一事業が開催されます。このうち演劇は十事業で、三集団が参加します。

事業計画は、出演を希望する団体があらかじめ演目と必要経費を記した資料を県に提出し、県は市町と協議して開催を決定します。経費は原則として県と開催地の自治体が折半で、全額助成されます。

平成四年度の事業計画は、今年七月中旬までに、出演を希望する団体が県に資料を提出することからスタートします。（学校公演に対する補助金については省略）

自治体の窓口は、兵庫県の場合、生活文化部文化課です。

ふれあいの祭典（兵庫県文化祭）

国民文化祭の県民版で、毎年秋に県下の各自治体で分野別に開催されます。今年、演劇分野は東条町の新設ホールで開催され、地元劇団、高校演劇、それに神戸から一劇団の計三団体の出演が決まりました。

予算の執行は県に設置された「ふれあいの祭典実行委員会」ですが、経費のかなりの部分を開催地の自治体が負担するようです。

参加団体に助成される額は、国民文化祭のように交通費と宿泊費の半額助成というミミッチイ額ではなく、とくに神戸から参加する劇団には実費全額になる見通しです。

くすのきステージ

兵庫県文化協会の主催事業で、助成金はゼロですが、ホール使用料が無料になります。

演劇、音楽、舞踊を対象に、県民小劇場（公共ホール五百人収容）を年間に十数週間無料で開放します。演劇の場合、例えば週末の三

日間を、年間三、四回程度で、ホール付属の機材使用料、基本人件費も無料です。

分野別の開催日は自由ですが、ホールの一般予約開始は一年前なので、それ以前に申請しておかないとホールを確保できません。

神劇まわり舞台

神戸市民文化振興財団が主催する事業で、助成金はゼロ、ホールの使用料が無料です。参加団体に共通するチラシ等の宣伝印刷物等の費用は文化振興財団が負担します。

「神劇」は誤植でなく「神戸の演劇」の意味で、神戸を拠点に活動する劇団を対象に、毎年十一月から十二月にかけて連続四週間、ラビングホール（神戸の中心繁華街にある家電量販店経営百二十人収容）を無料で開放します。一集団の公演日数は、金、土、日曜日がベースで、仕込みの木曜日もホール使用は可能です。昨年は四集団が利用しました。

開催期間が四週間で、四劇団の参加に限定されるため、他のホールまたは自前の稽古場で公演する劇団にも、臨時措置として一劇団あたり五万円が助成されます。

公共ホールの自主事業

神戸文化ホール（公共ホール）では毎年春に、地域の芸術振興を目的として自主的に企画、演劇部門では「神戸のえんげき」というタイトルで、文化ホール（八百人収容または四百人収容）を無料開放しています。

ホールに付属する機材はもちろん、道具、照明、音響等に関わる人件費も無料です。出演団体には前売り券のノルマが付帯していますが、さほど大きな負担ではありません。

自治体等との折衝

自治体等との折衝は、兵庫県劇団協議会（現在コンスタントに活動している十集団が加盟）をとおして行っています。これは特定団体の独走や行政との癒着を防ぎ、利用者が協議しながら行政と折衝するという民主主義の原則を貫くためです。そのため協議会は未加盟集団にも常に門戸を開いています。

また自治体の助成が一劇団に対してでなく「流派や分野を超えて組織された団体」を対象としているためでもあります。こうした自治体の態度は、今日のように連帯し難い時代に、広範囲に民主的な連帯を促進するという効果をもたらしています。

行政との折衝をとおして痛感したのは数の力です。例えば劇団数、上演回数、観客数、数、数です。つまり彼らにとって重要なのは助成の「効率」でした。繰り返し繰り返しの折衝をとおして、地域の芸術文化を数量的に追求することの愚にようやく気づきはじめたようですが、やはり数は自治体を動かす大きな力であることは否めません。

文化行政の進展のテンポに比べて私たちの主体的力量の弱さが目立ちます。助成の面で一定の成果が挙がっているものの、状況に十分に対応しているとはいえず、住民主導への道のりはまだまだ遠いようです。

けれどもわずかに、兵庫県劇団協議会の存在を無視して演劇分野の行政をすすめることを困難にさせていることは確かです。

その他の自治体

兵庫県で見落とせないのは、尼崎市青少年創造劇場（ピッコロシアター）の演劇学校をはじめとする多彩な自主事業、伊丹市の劇場都市宣言などであり、県下各自治体でもそれぞれに文化行政の変化や前進がありますが、紙数の関係で省略します。

市民運動として

神戸では、革新市政実現を契機に「神戸をほんまの文化都市にする会」を結成、神戸における文化のあり方や文化施設について、自治体に提言していこうと試みています。

運動としてはまだ試行錯誤の段階ですが、稽古場や倉庫など諸団体の緊急の要求実現を図るとともに、都市問題の専門家と協力しながら、長期構想として、産業構造の変化で遊休施設になりつつある港湾施設、神戸港の三本の突堤を、演劇、美術、音楽の総合的な文化芸術ゾーンとして再生を図る雄大なプランを提言し、注目を浴びています。

西会議・総会・演劇講座

竹内敏晴氏を招いて

― 松山道後温泉で開催 ―

今年の総会・演劇講座は久しぶりに四国で開催します。地元になる松山は道後温泉と隣り合わせ、演劇講座『演技』に汗を流し、温泉につかりながらリアリズムをめぐる白熱の論議も乙なものです。

今年の演劇講座『演技』で、講師は竹内敏晴氏です。竹内氏は一九八〇年八月、比叡山での東西合同演劇ゼミナールで感銘ふかい講演をいただいて以来です。どんなお話がきけるでしょうか、とても楽しみです。

地元愛媛県では、つい最近、愛媛演劇集団協議会を結成し、今回の催しの事務局を引き受ける劇団こじか座の皆さんは張り切って受入れ準備中です。

8月23日（金）～24日（土）　総会
24日（土）～25日（日）　演劇講座

内容問合せは
神戸市中央区元町二―九―一一―六一二
劇団四紀会内　梶　武史
〇七八―三九二―二四二二
（昼　九一一―一五一三）

東会議は拡大運営委員会

― 東北新幹線　くりこま高原で ―

東会議は九一年三月に山梨で『演出者・制作者会議』、五月に奥料で『作家会議』、八月には勝沼の「ぶどうの丘」で、関東と山静の合同ブロックゼミナールと活発な活動の連続なので、総会にかわって拡大運営委員会で、主として議案書（執筆こばやし事務局長）の集中討議することになった。場所は東北にきめて、東北・奥羽ブロックからは総会なみの出席を要請したのも一案であった。

日時　九一年八月三十一日～九月一日
会場　宮城県栗原郡栗駒町沼倉耕英東一いこいの村栗駒
〇二二八―四六―二〇一一
参加費　七五〇〇円
（きまった運営委員の参加・宿泊費は会議費で負担の予定です）
交通　東北新幹線「くりこま高原」下車
問合せ　東会議事務局（はぐるま内）へ

全り演（東会議）第三回「作家会議」の報告

栗木英章
（劇団名芸）

(1)

蓼科での「作家会議」からの帰途、中央自動車道の長野から岐阜へ至る辺りの山々は、豊かな緑を見せてくれた。各々の緑が濃淡に富んでいて、見飽きることがない。途中の強い雨でやがて車窓からかすんでしまったが、ふとそんな緑群に、作家会議へ参加したとりどりの風貌を重ね合わせて、少々ｈｉｇｈな気分になったことは確かだ。

一昨年の第二回に引き続き、本来は昨年に第三回を行う予定であったが、私もふくめて幾人かが三重の演劇フェスティバル準備等に関わったため、一年とんで今回、五月十一・十二日の開催となった。

会場は長野県茅野市にある「名古屋大学蓼科宿泊施設」で、会場確保から当日の事務局業務一切を、名大職員でもある劇団すがおの加藤武夫氏にすっかりお世話になった。（あわせて、すがおの若葉、ＦＲＥＥの坂下両氏にも協力いただき、感謝）。

出席者はほぼ倍増の21人、期待の北野茨氏（『スタンドバー』の作者、劇団未来半島所属）が病欠されたのは残念だが、寄せられた作品は16作という盛況さであった。例によって、記録のため出席者と所属集団・作品を列記すると次の通り。（敬称略）

萩坂（演劇会議）「基調報告」、岡田（埼芸）『立って歩けたら！』、中村（ＲＩＮ）『アンドロイドの子守歌』、布施（からっかぜ）『小さな草の歌』、こばやし（はぐるま）『黄土にとけゆく赤い赤い陽は』『不断煩悩得涅槃』、藤本（はぐるま）『息をひそめて灰スクール（第四稿）』、北原（むげん鬼）『乞食井月』、境野（石るつ）『蒼い空そしてブキウギ』、清水（名芸）『やけっぱちのブルース』『ムーンライト』、栗木（名芸）『夢一夜』、鈴木（名芸）『昭和最後の日』、柾木（やませ）『海を越えたかった男』、大峰（銅鑼）『されどわが町』、吉村（名古屋協力）『雨ニモ負ケズさすらい紀行』、小島（静芸）、矢野（土の会）、河野（やまなみ）高木（愛知・平演会）、加藤・若葉（すがお）坂下（Ｆｒｅｅ）、それに眼病で止むなく文書参加となった北野（未来半島）『スタンドバー（黒石劇研用）』である。

欲をいえば以上に、北海道の矢作氏他、藤村（弘演）、岡安（世仁下）、平石（アポストロフィ）林（展望）、丸子（演集）、それと先頃斉田喬戯曲賞をもらった中村（群馬中芸）、青年劇場の作家群らに加わってもらえば、ほぼ東日本の書き手を網羅したことになるが、公演と重なったり、諸々の事情で結果会場の定員枠ギリギリの前記参加となった。広い庭に咲く遅咲きの山桜などを眺めつつ、予定時刻より三十分早い（／）午後三時、いよいよ討論を開始したわけである。

(2)

寄せられた16作品を読み込んだ上で、現在のリアリズム演劇（戯曲）の現状と課題といった主旨の冒頭基調報告は、前二回に引続き「演劇会議」の萩坂編集長にお願いした。本業の都合の悪さに加えて、「こういう労は、ぼつぼつ他の人に――」と、固辞されたのを無理に承諾してもらった。苦労してエネルギーを注いでも、仲々響くような心も仕事も返ってこないもどかしさもあったろうと推察する。そんなためらいを、敢えて呑み、受けてくれたのは、初参加を約束してくれた柾谷（やませ）、北野両氏らへの期待もあったことだろう。

氏の論の基調は、第二回の話につながっていた。「……いわゆる六〇年代、テーマも明確で、未来像があったとき、黒沢、こばやし土屋…といった面々が次々と生み出した作品は、（こばやし氏を除いて）その死と共に終焉したのか、あの輝きは幻影であったのか。大橋喜一、神谷量平氏らを加えた群を、第一次リアリズム作家グループとすると、矢野、小島、和田らの第二次群は、先代に忠実すぎて、第一次を越えることもできず、臆病な状態で実りある仕事（作品）を生み出していない。それらを否定的にとらえて出発し、独自の作品と道程を歩み続けてるのが、岡安、境野らの第三次グループといえるだろう。そして、今、従来と全く関係ない形で中村、清水らが第四次として作品を書き始めている。

今回16作品も寄せられたのは、視点をかえれば、集団の不安感の反映ともいえる。

全り演を見わたせば、（個々の事情や条件の違いは様々あるが）作者のいない集団は停滞している。しかし、現在の作品群は、テーマ主義を脱却しょうともがいてはいるものの多様化という言葉で見すごせない弱さをもっている。〝地域素材主義〟という言葉があたるかどうかは別にして、自分で自分を許してしまう傾向がみられる。アイディアと創造を錯覚してはいないか。ギャグや風俗のつなぎ合わせで自己満足している。おしゃべりと台詞（セリフ）は異ることを再認識してもらいたい。対話（ダイアローグ）になっていない台詞が余りにも多い。…とあれこれ弱点を指摘して、さて、どうするか。やはり六〇年代の創作をいま一度見直す必要があるのではないか。その評価と否定面を浮き彫りにして、我々のリアリズム作品を創り出していくことが大切だろう。

最近、全り演加盟劇団がよく井上ひさし作品を上演している。それはそれでいいのだが表面の面白さをなぞっているにとどまっているところもある。しかし、井上氏は水面下で想像を絶する葛藤をしている。『闇に咲く花』でも、戦争で消された野球選手たちの存在を全て調べ尽くして、反戦の視座をきちんと貫き、訴えている。氏の姿勢に学んで我々は、佳き作品を多く生み出したいものだ。

と、まずは締めくくられた。この論の正確な願いは、「演劇会議」の先号（77）巻頭〈発言〉に直接まとめられているので、参考にされたい。

(3)

さて、萩坂老の基調報告に続いて、全り演の加盟劇団（支木とか黒石劇研）と近くに存在して、共同作業のような形もふくめて、作品を次々と書いている北野氏から、その作業のメリットや苦悩を語ってもらうこと、及び老舗の静芸を退団して、自らＲＩＮという集団を主宰して、若手のリーダーとして活躍している中村氏から、〝歴史ある劇団を離れ、

自作を上演する劇団活動について〝話してもらった。といっても、前述した通り北野氏発病欠席のため、文書発言をしてもらったわけだが、その要旨は次の通り。

「…作品を充実させていく、ということで契機になったのが劇団支木との出会いである。第一に、自作を演出に全く関わらず客席に身を置くと、弱点が明確になって改作意欲が湧くこと。第二に、集団の実情に合わせて改稿していくことが作品の〝キレ〟を高めていくこと。第三に、自分を離れたプロに近い存在の人たちが上演してくれることで、〝夢〟の実現に近づいていく喜びが生まれる。そして、「どんなものが書けたら満足か」と自問すれば、『どん底』『セールスマンの死』『きらめく星座』が挙げられる。その時代と切り結ぶ、一人の人間がその時代の中で生きていく意味を問う、という観点は外せない。物語が作れない時代のような気もするが、安易に「時代物や昔話、歴史物や地域物」など「安定したもの」に逃げたくはない。それよりも、悩みながらでも、同時代の人々と同時代について何かを分かち合う、共感し合う方向に力を向けたい。最後に、「てんぷくトリオ」が大好きで、間とテンポと風刺が作る笑い、これはたまらない魅力だと思う。感動は「良かった、感動した」という言葉でしかかえってこないが、笑いは一目瞭然。厳しいが自作に必ず笑いを入れている……」。

この報告から、たまたま今回寄せられた『スタンドバー』が、黒石劇研上演用のもので、あの北海道フェスティバルの衝撃的デビュー（支木による上演）から、客席に身を置いて文字通り改稿を続けた成果がうかがえ、嬉しい中味でもあった。ついでながら、『スタンドバー』を上演したいという話をよく聞くが、この第四稿の入手希望者は、直接作者へか、事務局の栗木まで連絡してほしい（ほかの作品も同様であるが）。また「てんぷくトリオ」はテレビで続いた井上ひさしコント集で、創作への大きな示唆を含んでいることを、愛読者の一人として重ねて紹介させていただく。

中村報告は、若い集団ゆえの奮闘記でもあり、どこの集団でも感じさせられている若者の移り気な、というか変わり身の早さに共感の笑いと苦渋がただよった。しかし、そういう若者をつかみ得ていないリアリズム劇団の状況は、達慮がちに彼のいう「間口の狭さ」と無縁でない気もする。静芸を離れても、全

(4)

さて、以上の報告を受け、引続き個々の作品分析と討論に入っていったわけだが、いつものような踏み込んだ批評を避けた萩坂氏に、再度一作ずつ寸評をしてもらった後、全体の話し合いを始めた。

一つの視点としては、昨年四月三〇日付の朝日新聞・社説「ドラマは再生するか」を置いた。これは、俳優座が創作戯曲を公募して結局集まった五十編から当選作も佳作も出なかった状況を踏まえての発言である。全文紹介はできないが、その一部は「……起承転結といった正統的な作劇法が少なくなり、代わって、冒頭から笑わせ、驚かせ、ドタバタ意表を突くことに終始する作品がふえた。…たしかに、劇的なことが少なくなった日本ではある。貧困や抑圧を取り上げたくても、なんとなく現実感に乏しい。絶対的貧困は悲劇になるが、相対的貧困では軽喜劇にするくらいしかないかもしれない。……といっても、欧

米では、いまも傑作が数々生まれている…目標の見えにくい時代であればこそ、よく観察され、消化され、そして若々しく再創造された世界を見たいと思う。人生に感動を与え、いっそうの自由を求める作品を待ちたい。そろそろ、ドラマ作家は示すべきなのだ。この世の中には、テレビゲームよりも刺激的な喜びがあることを」。と締めくくられている。

いつもは仲々スムースに運ばない話し合いであるが、今回は萩坂の辛口評に対して、どちらかといえば、いい点をすくいあげて甘口（？）の評価をソフトに語ってくれる矢野の間に、みんなの率直な感想が次々に出て、密度濃い討論ができた。一作ずつの冒頭に、感想をワープロでまとめてきた、初参加の鈴木（名芸）の発表が、雰囲気をなごませてくれた功績も大である。

一つひとつについての意見も紹介したいところだが、本誌の読者にとっては本を読んでないため意味も通じ難いだろうし、紙幅に限りもあるので、トータルにみて問題点をあげると、六月末発行「全リ演東会議ニュース」にも記載されているが、次のようなことである。

㈠ 作者の視点が明確になっていない。

㈡ 素材に安易に飛びついている。

㈢ 自己の中に逃げ込み、体験から抜け出ていない。

㈣ 仲間の中にのみ安住して創っている。

㈤ 観客を信頼していない。言い過ぎ、しゃべりすぎ。

㈥ 技術的に弱い。

これらのまとめと関わって、印象に残ったことの幾つかに触れてみたい。

(5)

●しゃべり過ぎと技術について

清水の作品など、その成長は評価されつつ冗舌なセリフについて指摘が多くされた。初稿として目一杯書き込むことは必要な道程なのだろうが、推敲を重ね、一人ひとりの人物像から不可避的に出てくる言葉に練り直す努力が必要といえる。〝少ない言葉で最大の効果、短かい言葉の中に多くのものを含む〟という「レス・イズ・モア（ＬＥＳＳ　ＩＳ　ＭＯＲＥ）」、あるいは「充分に表現するためには、決して表現しすぎないこと。しかし、それでいて完全に表現すること。ただし、ごくわずかの言葉で」（モーツアルト）等々、現在の私たちに通ずる警句は生きているといえよう。

●作者の視座について

しゃべりすぎとも関わって、藤本作品につき、「作者がいいたいことを全部の登場人物に平均的に語らせている。その中に書き手自身の苦悩が感じられない」等と意見が出て、自ら教育現場に身を置く藤本の、ほぼ実際に見聞した事実ということに対し、大峰、小島たちが指摘する「現場にいると、かえって枝葉にとらわれて、あるいはおぼれて、見えなくなることがある。現実あった—という事に甘えず、別の視点が必要ではないか」とは、同じく労働現場に居る一人として重い中味を持つ。

少し話はとぶが、テアトロ４月号の劇評欄で、瀬戸宏氏が青年劇場『安楽兵舎ＶＳＯＰ』について次のように述べている。……

老人たちがストリップ鑑賞で、男性の老人が女性を排してこっそり見る描写に対して、現実は、「ギャハハ、ワシの若えときのがいいチチしてたに」だとし、〝老人の性はかくあるはずだ〟という概念から出発しているのではないか、と。作品評価の正否はひとまずおくとして、最後の概念から出発する—とい

う点については、「リアリズム演劇」を自称する私たちが作品でも、演技でも陥りやすいところである。

同根のこととして、拙作『夢一夜』でも、あるいは『蒼い空…』でも、戦後を描くことで現代を照射できず、結局書き手の郷愁にとどまっているのではないか、と自省する。『されどわが街』の、わかりやすさとさわやかさも、前作『燃える雪』ほど対象に肉薄していないと感じて、同質にくくるのは少々乱暴すぎるかもしれないが、私たちの作品や舞台が、どこかで知っているお客との慣れ合いに安住していないか、現実、現実と唱えつつ知らず知らずのうちに、〝芝居部落〟的なところでの評価にとどまり、自らの生き方を厳しく見据える原点が風化していっていないか。今、もう一度立ち止まって内に問いかける必要があると思う。

(6)

『海を…』を書き、上演した柾谷と劇団やませは、地域に根ざす仕事をねばり強く続けている貴重な実践といえるだろう。〝私説三峰館寛兆〟とサブタイトルをつけたこの作品は、江戸時代中後期の地元豪商七崎屋の長男で俳人寛兆と、関わった人物を描きつつ、激動の時代を馳け抜けた先達への讃歌・鎮魂歌といえる。海に臨んで生まれ育った氏のロマンは感じられるものの、『海村』の完成度には達していないように思う。中途半端でない根ざし方をする氏と「やませ」から生み出される作品は、地域からのこえが全国へ普通化する発信例として、是非旺盛に書き続け、作家会議へも反映してもらいたいと願う。

他に、名作『郡上一揆（郡上の立百姓）』を、今の時点で寝百姓の立場から描いたこばやしの新作『不断煩悩…』（一人芝居）、柾谷とどこか通じる形で、伊那に根づいて活動を続けている北原の、同じく一人芝居『乞食…』も同一狙上で論じたいが後日に譲りたい。

技術の先取り（人間に限りなく近いロボット）から逆に人間社会の近未来へ警報を発しようとした中村の『アンドロイド…』、誠実な生き方をテーマにした岡田の『立って…』、布施の『小さな…』等々、そして全り演外から参加してくれた吉村のキメ細く描かれた、『雨ニモ…』や、同じく外から歴史学専門の立場でユニークな作品評を展開してくれた高木らのことも、とりあえず事実の紹介のみにとどめさせていただく。失礼な点や引用の不備はお許しいただきたい。

現実は猛スピードで駆け抜けていく。その現象を追っかけているだけのところから、時代を先取りする作品は生まれないだろう。さて、どうするか、終了前にそこへ論を進めつつ、時間切れとなった。大峰の「人間を信頼すること、時代に挑むこと」をキーワードにして、今回の継続課題は発行予定の作家会議機関紙などで深めていきたい。都合で出席できなかった人、あるいは、これから書こうとしている仲間の、多くの参加や発言、そして新作誕生を期待すること大である。

(7)

司会を兼ねていて、ほとんどメモがないところでの記録なので不充分なまとめとなった。そこを三氏の感想に以下補ってもらう。

その一　前史も含め参加し続けた小島真木

●今回の作家会議については、会のマンネリ化や中堅の書き手の不参加等の理由で、会が成立しないのではないかという危惧が取沙汰されていたし、私は東り演の創作劇の流れが途切れて、その先きに若い書き手の作品が

勝手気ままに存在しているかのように見えた前回の作家会議の印象が尾をひいて、少々気重で参加をためらう気持が先にたった。

これも自分に一番近いところでの運動のなしくずしの空洞化と思ったりしたが、何分にもここ数年何も書いていないので、流れを絶やしている者として、刃の切っ先は、まず自分に向けなければならない。そんな小さな葛藤のあと、やっと参加を決めた作家会議だった。

しかし、そのことは杞憂に終って、一番印象に残ったことは、東り演の作家達の拠点としての作家集団がやっと存在しはじめたという実感だった。栗木事務局長の許に、新しい体制で作家会議が発足して今回で三回目。第一回は発足という盛り上がりに助けられて、次回への期待をこめて終ったが、第二回目は私自身が若い人たちとの接ぎようのない演劇観の違いに悩んでいた時期だったので、特に辛く感じてしまったのだと思うが、若い書き手の旺盛な創作意欲に圧倒されたけれども、果してリアリズムの作品として繋がっていくのかという危惧を感じて、冒頭に書いたような気重さが残ってしまっていたのだが…。

しかし今回の作家会議では、若い書き手達がまだ饒舌ではあるが、リアリズムの範ちゅうに含まれる作品を書き、前回の作家会議での批判を受けとめて数段成長した作品を提示してくれた。構成もととのい、説明的なモノローグで筋を運ぶのでなく、葛藤で筋を運んでいく等々、戯曲を書くために必要な基本的技術を身につけ始めていると思えた。

近頃口にしたことのなかった序破急、三一致の法則等の言葉がこばやしひろしから出されたりして、若い書き手に向って、リアリズムの基本に立ち返っての、きちんと芝居を書く基本の大切さを説く発言も目立った。今までは口ごもりがちだったことのように思えたが、これも時間に洗われて大切なものが視えてきた地点での、リアリズムに対する再度の腰の据え方ととるのは、早計すぎるだろうか？いずれにしろ、若い書き手と共に歩くことのできる場がそこに成立したことが有難かった。

三回目の顔合せともなれば親しみも深くなり、提出された作品も過去に出されたものと繋がって、その作者の創造の軌跡を描き出す。自然に生み出される仲間としての連帯感が少し形になってきた三回目と云えようか。

それぞれの書くという試行錯誤が、その書き手の資質に添った形で、支持されたり、批判されたり、賦分けされる場として、機能していく条件が出来てきたように思われる。

また東り演以外の演劇集団に所属する力量のある作家が、質の高い作品と共に参加されたことも、更に集団の幅を広げ質を高めることに繋がることとして、特筆すべきことに思えた。

締め括りとして、「まずは書かないことには始まらない。書きまくることが必要ではないか。他の集団のために書いてもいいじゃないか。まず作品をたくさん産み出すことだ。」と萩坂に云われて、一挙に自分の足元を見る破目に陥った。銅鑼の大峰が、「そうか、他の劇団に書くということは考えなかったなあ」と意表をつかれたというように云った。萩坂の言葉によって、東り演の作家集団としての役割を外側からあぶり出されたように思えた。レパートリーの貧困が云われている今東り演の創作劇を生み出す工房として機能しなければならない、という課題が見えてくる。そのためには、急速なレベルアップが必要とされるだろう。〝書きまくる〟ことで量が質に転化する日をのぞむことしかないだろう。

個々の地域劇団の書き手の集りというイメ

ージから、東り演の作家集団という輪部が描き出されることによって、作家集団としての存在感が更に強められるように思えた。

（尚、この感想に続けて、小島からはリアリズム史に触れる文章を寄せてもらったが、作家会議のニュース等へ譲らせてもらう）

(8)

その二　初参加で進行に貢献した鈴木正彦

●せっかく婆科まで行ったというのにほとんど缶詰めで、終日作品の論議ばかり。でもプロ級の作者も僕のような駆出しも、一緒になって少しでもいいものを書こうと話し合い充実した内容だったと思う。

僕は初参加で緊張していたが、全作品を事前に読み感想をワープロで打って討論に加わった。おそらくそれは、名立たる戯曲コンクールで実力を評価された人や実績を積んだ人にとっては、言い掛かりや難癖の類であり、失礼この上ない感想文に違いなかったと思う。

しかしそれを読み上げたところ、予想以上に真摯に耳を傾けてくれたので驚いた。おまけに会議終了後、「よかったら、そのワープロ感想文もらえないだろうか」と、何人かの方が手を差し出すのだから、僕は理由もわからず嬉しさで胸が一杯になってしまった。自作の戯曲は案の定、「芝居になっていない。自分勝手なおしゃべりを並べただけ」と言われたし、なまじ感想文を持参したばかりに、「君は自分のことはわからんのに、他人のことはよく分析しとるなあ」とダブルパンチを喰う始末。ああ！

優れた作品の分析を通じた場面設定や台詞運びなどの実技指導があれば、より勉強になると思うが、限られた時間を考えれば参加者から提出された作品の合評が中心になるのはやむを得ないところだろう。技量の高低は別にして、参加者の全てが自作を少しでも完成度の高いものにしようとする執念や、作品を書く上で栄養になることならばどんなことでも吸収しょうとする貪欲さを持ち会議に参加していた。その渦の中に身を置き一緒に考えることは、どれだけ励まされ、鍛えられることか知れないと思う。

全国のリアリズム演劇に関わる方々の中には、脚本捜しで悩んでいる方や、苦労して作品を書いても回りの人の無関心に出会い愚痴をこぼしてみえる方があるかもしれない。そんな方には、この作家会議に参加されることをお勧めする。あんまり大きな声で宣伝して埋もれた才能が開花するようなことがあると僕のようなものは弾き飛ばされかねないので、本当は内緒にしておきたいのだが、耳の痛いことでも落ち着いて聞く謙虚さとへこたれない根性、それから寄せられた作品を読み切る礼儀正しさがあれば参加資格は十分にある。（できるだけ努力するということでもいいらしい——念のため）。

誰にでも、その人にしか書けないテーマや作品世界が一つや二つは必ずあるはずだ。時間がないとか忙しいとか、目先の困難に逃げないで、次回の作家会議目指して、書いて書いて書きまくろう。いろんな戯曲を読んで読んで読みまくろう。そして、同じ志を持った人達と語り合い励まし合おう。その中でしか活路は開けないのだと思う。…そんなことをワープロに向かってブツブツ言っている僕であります。

(9)

その三　外部参加で、劇団名古屋のため新作執筆中の吉村登。

●熱心で厳しい（キツイ）批評、討論がなされていて、好感が持てました。総論や印象批評より、具体的な部分指摘の方が参考になりました。

●オリジナル創作劇の大切さを認識しました。また、地方の事件、物語りを扱った「手づくり地元の芝居」というのに、充実するものを感じました。

●基調報告では、「六〇年前後のリアリズム全盛期の仕事再評価」のすすめが参考になりました。

●今後の要望としては、「何をどう書くか」の「何を」の部分を充実させたい。思想というか、テーマ（主題）というか…。また次回も参加したく、それまでにいい作品を書きたいと思っています。

(10)

ぼつぼつ締めくくらねばならない。明日から子供劇場の役者をひかえ、せっぱつまっているので、雑駁な表現は許していただくとして、「海燕」六月号に二つの戯曲が掲載されている。木下順二作『巨匠』、矢代静一作『桃花春』で、細かい紹介は割愛するとして「ナチスによって生き残るか銃殺されるか二つの極の間で引き裂かれようとする危機的な状況」におかれたときの老俳優の悲劇を描いた前作で、登場人物の「演出家」はラストに次のように問いかける。「表面平穏な今日の中に住むわたしたちは、そういう〝危機的な状況〟とは一体何なのか、一体どこにあるのか、それが分らなくなってしまっています。その結果として〝逃避ではない積極的な自己主張〟をどうやったらわたしたちはできるのか、問題は漠としてしまっています。けれども、にもかかわらず、今日のこういう世界の中にどうやってそれを見いだし、何をどう決定し、どう行為するか、そのすべてはわたしたち自身にゆだねられているわけです」と。

実は、私的なことで恐縮だが、作家会議後数日して、私の働く工場のプレス職場で身のすくむような事故が発生した。一応の安全装置はあったものの、生産のおくれを取り戻そうとトラブル対応に敢えて危険な手を打った末の事故であった。顔見知りの労働者は「すみません！」と訣言のように繰り返し、病院へかつぎ込まれた。働く仲間として、無力さを感じつつ、せめて、ひとまず、私は翌日の社内Ｑｃサークルで社長表彰対象の最終審査会をリタイアした。（思えば、対象になることさえ、堕落ともいえるが新しい職場へ放り込まれ、やむなくつき合った結果のことではあるが…）全員参加の主旨から外れ、当然のこととして落選となったが、管理者以外の対象仲間は、「まぁ、かえってせいせいしたよ」と、一切恨み言はいわなかった。

ひきかえに駆けつけたケイコ場で、立ち向かう役がいかほどの意味をもつものか、つきつめて考えると、甚だ心もとないが、しかしその日走り抜ける街路の、紫陽花の彩りや、くちなしの花の香りを、ふと新鮮に感じたことは確かである。

作品も、演技も、しょせんはその人の品性以上でも以下にもなく、そのものであるといわれる。

背筋をしゃんと伸ばして対象を見つめることといっても日々の生活ではだらしなくうなだれることが多いのだが——少なくともそうあろうと努力し続けるところから、創作もあらゆる創造も出発するであろうことを、あらためて感じ入りつつ…いささかまとまりを欠くまとめとさせていただく。

（七月五日　記）

初の海外公演から

京浜協同劇団

感動の連続だった フランス公演

城谷譲

企画は「シルクロード・フェスティバル」ということで、〝絹の道〟に関係のあるインド中国、ソ連、モンゴル、アフガニスタンなど九か国からほとんどプロ集団が招待されている国際的な音楽舞踊祭だったのです。

それだけにパリでの公演は緊張しっぱなしでした。だから、館長の賞賛の言葉がにわかには信じられなかったのです。

それから、エブリというパリ近郊の都市では、夏休みに入る青年たちのための「エブリ・バカンス・フェスティバル」という市主催の行事で、ロゼス公園という所で二千人が集まっての屋外公演でした。終ってから、副市長がわれわれのテント小屋にやって来て「日本は〝鬼の国〟だと思っていたが、あなたたちの舞台を見てとても〝人間〟を感じた。私は〝鬼の国〟が好きになった」と握手を求めてきたのです。これを聞いてそばにいた中沢研郎団長も思わず緊張した顔がほぐれました。

「われわれは二十年来、さまざまな企画をたててやってきた。日本からも毎年一～二回やって来るが、こんなに喜ばれたのは初めてだ」。それを聞いたとき、自分の耳を疑って通訳のアンドレ・レノレさんにもう一度聞き直したくらいです。というのは、本番前の舞台稽古で会館側のアート・ディレクターなどから「パリの観客は目が肥えている。あまり素人っぽいことはやめてほしい」として、レパートリィ紹介の〝めくり〟をやめろとか、歌うときの目線がそろってないとかいろいろ指摘されていたからです。なにしろ、今年の

――「日本の太鼓」のフランスでの反響はどうでしたか。

初めての海外公演でしたので大変不安だったのですが、予想以上に好評で各地で歓迎されました。

パリでは文化省の施設である世界文化会館という所でやったんですが、終演後そこの館長が急遽レセプションをひらいてくれ、一番高級なワインやシャンペンをごちそうしてくれました。そして、その席でこう言いました。

フランスに入国して私たちが最初に驚いたのは、パリの街に「日本はフランスをいかに侵略したか」という見出しの週刊誌のでっかいポスターがあちこちに貼られていたことでした。たしかにパリの街には、日本の大企業の看板が目立ちました。企業の進出や土地の買いあさりなどで日本の経済侵略が目に余るほどだったのでしょう。私はあらためて日本が外国でどんなことをやっているのか考えずにはいられませんでした。

――公演したのは都会だけだったのですか。

いいえ。都会はパリとエブリの二つで、あとの二つはパリから数百キロ離れたブルターニュ地方の農村部です。この地方はパリとはちがって、広大な自然と共に人々が生きているという感じのする所でした。

ペロス・ギレクという、海の美しい人口七千人の市では、子供たちが目を輝やかせて見てくれ、終ったあとも握手攻めに会いました。引卒してきた小学校の先生が「子供たちがこんなに反応するのを見たことがありません」と言って何度も「メルシイ（ありがとう）」

公演の合い間をぬって総勢36名の記念撮影（パリのノートルダム寺院前で）

をくり返していました。また、三年前に日本のプロの太鼓集団「鼓童」の公演を見たというある声楽家は楽屋へ訪ねて来て、「鼓童もよかったが、あなたたちのはファンタジックでとてもよかった」と親しげに語りかけてきました。

プレスタン・レ・グレーブという市は、私たちのフランス公演の橋渡しをしてくれたアンドレ・レノレ神父の故郷です。市とはいっても人口わずか三千人の農村で、広大な草原にポツン、ポツンと民家がある所でした。どこから集まって来るのか、開演の夜八時半には公民館にいっぱいの五百人の人々が来てくれたのです。小さな舞台はついていたのですが、私たちは舞台を使わず、観客と同じフロアーでやることにしました。ここでは、本当に観客とひとつになってやれた感じがしました。終ってから市長が私たちに名誉市民賞にあたるメダルをくれ、親善と平和について熱っぽく語りました。あとで聞いたことですがこの市は革新市政だということでした。市民のボランティアが手づくりの料理を用意してくれ、歌ったり踊ったりして交歓しました。

――三十六名という大勢で、しかも十一日間の旅は大変だったと思いますがトラブルはなかったのですか。

大きなトラブルはなかったといえます。しかし、パリへ着くやいなや病人が出たり、次の日にルーブル美術館の見学を中止したり、雨や風のため屋外での公演を屋内に変更したり、太鼓などの運搬でハプニングが起きたり、対策会議が深夜に及んだり、いろんなアクシ

デントがありました。しかし、みんなよくがんばって大きな事故はなかったので助かりました。

何といってもフランスの民衆と直接触れ合えて交歓できたのは忘れられません。言葉は通じなくても何か通じるものがあるんです。フランス滞在中、ずっとバスの運転手をつとめてくれたマルセルという三十四才の青年は別れのとき涙を流して「私はいろんな団体のドライバーをつとめてきたが、こんなに気持が通じ合えたことはなかった」と語っていました。また、エブリ市でホームステイを受けてくれた家庭の温かさは劇団員が生涯忘れることのできないものとして残るでしょう。

ペロス・ギレク市では現地のアマチュアバンドが歓迎の演奏をしてくれた。

――そんな貴重な体験ができた劇団員はこのフランス公演を通じて何か大きなものをつかんだのではないでしょうか。

一番先にあげたいのは若い劇団員たちの活躍と感動です。フランス親善公演の事務局を選出するとき、私は思い切って若い人たちにお願いしました。不安がないわけではありませんでした。しかし、昨年の「麦の穂のように」公演で大きな役割を果たしてくれた笹岡敏紀さん（非劇団員）が事務局に入ってくれたのでとても心強かったからでもありました。若い劇団員たちは、演出班の努力もあって、創造的にも大いに奮闘しました。その若い力をぐっと支えたのがキャリアの永い劇団員たちでした。みんな、だれが主役かわからないほど燃えたと思います。

それだけにフランスで経験したことや感動はこれからの劇団活動にとても刺激になると思います。それは、すぐに効く化学肥料ではないかもしれませんが、堆肥のようにジワジワッと効いてくるでしょう。

パリでペール・ラシューズ墓地を訪れ、ナチの収容所で殺された犠牲者の碑やパリ・コンミューンの労働者の碑を見たときのショックは忘れることができないでしょう。

――ところで、このフランス公演が実現するまではいろいろな障害もあったと思いますが……

一番先にぶち当たったのは、「なんでフランス公演をやらなければならないのか」という団員のためらいや反対の意見でした。

このフランス公演のきっかけは、地元川崎にあるカトリック浅田教会に二十年間つとめていた、フランス人のアンドレ・レノレ司祭（神父）さんが、われわれの舞台や太鼓を見て「ぜひフランスに紹介したい」ということからでした。そして、アンドレ氏が「テクニックに偏らない劇団のまるごとを見せたい」というすすめの言葉がわれわれを決意させました。

第二の問題は作品の内容でした。太鼓は二十年近く打ってきたとはいえ、その数はたかが知れたもので、合わせてもせいぜい一時間位のものでしかなかったのです。二時間ものにするには新しいレパートリーも必要だったし、太鼓だけではお客さんも疲れてしまうので人間の声による歌も必要だったのです。大阪の劇団未来に教わったのが太鼓の始まりでしたが、新しいレパがどうしても欲しくなり新しく地元神奈川の「世附の獅子舞」や千葉県銚子の「銚子はね太鼓」も仕込むことにしたのでした。そして、安達元彦さんに「わが劇団にふさわしい歌」をお願いしたのです。安達さんは地元神奈川に伝わる「半原地固め唄」（福島雄次郎採譜）を編曲してくれ、これを全員で五部合唱で歌いました。そして、アイヌや沖縄の伝承歌や日本各地に伝わるわらべ唄を女声合唱用に編曲、指導してくれたのです。

こうして、全体として約二時間ものに構成しました。フランスでも日本でも公演したものと同じプログラムで上演したのですが、構成としてもかなりよかったと思います。

――資金の面や外国との交渉などでも苦労があったのではありませんか。

交渉の面でも苦労はしましたが、フランスではアンドレ神父さんがいろいろ努力して下さったし、日本では同じく浅田教会のエドワード神父さんが協力して下さったので大変助かりました。

それよりも苦労したのは資金集めです。フランス側の招待とはいっても、フランス側で負担してくれたのは滞在費の一部であって、往復の航空運賃や仕込費、太鼓などの運搬費などはすべて私たちの負担でした。総額一千三百万円かかったのですが、このうちフランス側が百数十万円、川崎市が百万円、神奈川県が二十万円の助成をしてくれただけで、国は文化庁も外務省関係も助成なしでした。だからあとの一千万円は自分たちでつくらなければならず、劇団と参加者個人の負担となりました。しかし、田島紳さん、萩坂桃彦さんなどがよびかけ人になって資金カンパを訴えて下さったりしたおかげで二百万円の目標を上回る三百十数万円のカンパが集まり、これでなんとか赤字を出さずにすみました。

それにしても、アマチュア集団が国際的な文化交流をしようとしてもそれがいかに困難か、「金持ちニッポン」といわれる国や自治体の助成がいかに貧しいかをいやというほど思い知らされました。

――フランスでは文化に手厚い助成があるということですが……

今回の旅ではその調査をやる時間がありませんでしたが、青年劇場の土方与平さんのレポートやお話を聞いていただけに実感として分かったような気がします。日本では国内の演劇は三千～五千円位、外国のものは七千～一万円位出さないと見られませんが、フランスでは国内のものが一千～二千円、外国のものが三～四千円位で見れましたから、日本の半分か三分の一位の料金で見られるのです。

しかも、観客は仕事が終わってから一度家に帰り、ゆっくりと食事をしてから家族で映画や演劇を楽しみに出かけるというのですから、日本とはまるでちがうと思いました。もっとも、夜の十時になってようやく暗くなり始めるため、開演は八時か八時半ごろで終演が十時か十一時ごろですから、この点でも日本とは大きくちがっています。

それにしてもフランスではとても安い料金

で見られるし、美術館や博物館も本当にいっぱいあって、街並みも古いものが大事に残されているなど、もうベースが日本とはまるでちがうという感じです。

驚いたのはルーブル美術館の入場料ですが、われわれが訪れたときはちょうど日曜日だったんです。ふつうは三百フラン（七百五十円）なのに日曜日だから半額になるのです。つまり、日曜日は入場者が多いのでゆっくり見れないからそれだけ安くするというのです。日本ではなにかにつけ、混むときが高くなってしまう。発想がまるっきりちがう。そこにも文化のちがいをかいま見る思いがしました。

――ところで、フランスには三十六名も参加したそうですが、劇団員以外のスタッフの協力もあったんですか。

そうです。劇団員は二十八名でしたが、外部のスタッフが八名同行してくれました。音楽監督の安達元彦氏、音楽助手の二村柊子さん、鈴木たか子さん、岡田京子さん、そして写真の長坂邦広氏、ビデオの賀川礼一氏、事務局の笹岡敏紀氏、救護班の笹岡五百子さんです。この人たちはこれまでもいろいろ劇団に協力してくれている人たちであり、今回も欠かせない役割をもって参加してくれました。この人たちと一緒に行けたことが公演と旅を豊かなものにしたといえます。

――最後になりますが、劇団は創立三十周年ということでこの三年間いろんな冒険をしたのではないでしょうか。それがこれからの劇団にとってどんな意味をもつと思いますか。

この三年間、私たちは創立三十周年記念ということで、たしかにいろんなでっかい仕事をやってきました。

シェイクスピアの「真夏の夜の夢」に始まって、三宅島のたたかいを描いた「西風に起つ」、木村快さんの作品「出航'89」、松谷みよ子原作の「オバケちゃん」、二百数十名の参加による「麦の穂のように」、川崎の三劇団合同公演「龍の子太郎」、そして今回の「日本の太鼓」などです。

この三年半に七本の作品を上演してきたのですが、観客も総計三万五千人にのぼり、飛躍的に伸びました。最近ではほとんどの新聞が公演のたびに大きく報道してくれるようになりましたし、テレビやラジオでもよく放送されるようになって、外に向けては大きく広がったといえると思います。

しかし、劇団内の課題は山積しているのです。全リ演の仲間たちからは「京浜はいま絶好調だね。どうしたらそんなにうまくいくの？」と尋ねられることがあります。絶好調どころではないのです。

そもそも三十周年の行事を開始するとき、

プレスタン市公民館での「銚子はね太鼓」

私たちは劇団総会で「われわれはこのままでよいのか」と悲愴なまでのタイトルをかかげて議論を交わしたのです。もし、順調に行っていたらこんなタイトルをつける必要はなかったのです。観客はふえない、劇団員はふえない、創作劇は産み出せない、キャリアの永い者と若手とのギャップ……など、さまざまな問題を抱えていたのです。だから打って出るしかない――いってみれば制作上の突っ走りが優先したのでした。

しかし、今、私たちは創造面でもじっくりと腰を据えてやりたい衝動にかられています。ひとりひとりが「自分は何をやりたいのか」を鮮明にすることを求められているのです。古い人も新しい人も、それぞれの要求や欲求があります。それをどうやって充たしていくか。ひとりひとりが弾んでいけるためにはどうしたらよいのか。この三年半の〝突っ走り〟は、いまあらためて私たちに厳しい選択を求めているのです。

新しい発見に満ちたフランス公演

鈴木　たか子

パリに着いた私たちを迎えてくれたアンドレさんは、母国で人まわりも大きく見え、精悍さに満ちていた。アンドレさんが心を尽して案内してくれるパリの街はやはり大した所であり、私たちは外国文化のただ中で、昂ぶっていった。このような、外国にあってこその体験は、遠望的には、とても貴重なことだと思う。それも、その時、それまでの自分との間で生ずるぎくしゃくをあれこれ話しあって、お互いに感じあい考えあうことは、とてもおもしろく、新しい発見に満ちていた。

しかしそのことに熱中していくことは、太鼓公演を成功させるという旅本来の目的を、脅かすことでもあった。パリ公演を明後日にひかえた深夜、劇団運営メンバーは、明朝予定しているルーブル美術館見物をどうするか長時間討議していた。翌朝、全員に告げられた「ルーブル中止、午前休養、午後稽古」という決定、そう考えざるを得なかったいきさつへの説明を聞いて、私は妙に感動してしまった。劇団員ではない私は、押しかけ出演者兼ちょっぴり音楽スタッフという身分で参加させてもらっていたが、この時、劇団の、創造への強い粘り腰の姿勢を見る思いがした。

このように、それから続く旅のでき事のすべては、太鼓公演を核に外へと広がっていったし、外から太鼓公演へと吸い込まれていった。これは決して束縛ではなく、私たちをとても自由にしてくれることだった。私たちは思いきり自由にフランスの人々の間で演じられたし、歩めたし、思いきり自由にフランスをみることができたと思う。

この旅が、劇団の今までの確かな延長線上にあったことを、私の十五年になる劇団とのつきあいの中から強く思った。劇団が、徹底して「この地」にこだわり具体的に活動し続けていることが、地球サイズで通用することを実感し、私はこの旅に同行させてもらえたことを心から感謝しているのです。（'91・7・9）

「あなたたちは私の生きる力になった」

和田庸子

まだ記憶が生々しくて、たった二枚の原稿用紙を埋めるために次々とうかんでくる出会った人々の顔、光や空気や風景が、今この瞬間も私の心を駆けめぐっている。

パリでの最初の五日間、私は正真正銘のおのぼりさんの楽しさを味わった。ノートルダム、ペールラシェーズ墓地、セーヌ川下り、オルセー美術館等、公演と稽古の合間の時間を貪るように垣間見たフランスの歴史と伝統のすごさにポカンと口をあけ、感動の極地で陶酔していたかと思えば、しょっちゅう故障する三人乗りの手動式エレベーターと、錠のかからないトイレ、シャワーのたびにベッドルームにまで浸水する不安に怯えた『愛すべきパリの安宿』（安達さんの名言！）の可笑しさ、そこで働く男、女たち（フランス人とは限らない）に漂うあたりまえの生活感。そしてまさかとは思ったが、かの「ブローニュの森」で太鼓の稽古をしたとき、集まって来た大勢の見知らぬ人たちとの交歓。この辺りから、私たちの「東方のジプシー」（佐藤張さんの弁）らしき公演旅行がはじまったのかもしれない。

パリ公演での力強いアンコールのリフレイン。ドーバー海峡を臨む地の果ての町ペロス・ギレクの子どもたちは一心に舞台を見終えたあと割れるような拍手をコールしてくれた。エブリ市ではある子連れの婦人が二日続けて見に来てくれ、「あなた方の笑顔は私の生きる力となった、あなた方は美しい。」と何度もくり返し、身につけていたネックレスをはずして私の手に握らせた。子どもたちはどこでも、公演を共有した親しみをこめて、私たちに握手とキスを求めた。私はこの大勢の異国の子どもたちや観客との文字どおりのふれあいの中で、本当に平和な世界をつくることこそ、私たちの最大の仕事であることを改めて思い起こさずにはいられなかった。

渡仏に伴うさまざまな困難をすべて他人まかせにしてしまった私だが、この収穫の大きさをそれらの人々につぶさに伝えたい思いでいっぱいである。

拍手を送る子供たち（ペロス・ギレク市）

諦めていた旅に参加できて

吉田理恵

母の入院、手術でフランス行きを一時諦めた時、私はフランスに行くことの意味を考えた。「いつでも行けるよ」とまわりの人が慰めてくれた時、「そうだよね」と軽く答えた。でも違うのだ。芝居の集団がフランスに行って太鼓を打つ、とんでもない事だ。そのとんでもない事を、何処から見ても日本人で頑固者ばかり、生活感いっぱいのこの人達（劇団員）と一緒にやってみたかったのだ。

最初の公演、パリ。さすがに緊張したが、舞台進行など細かいところまで打ち合わせされていたため、なんとかやれた。

ところが、パリ以降の三都市では、公演時間はさまざま、行ってみないとどんな舞台か分からない。天気によっては屋外、屋内変ることもあり、エブリ市では公演途中から雨が降り、急遽会館の中に入るという事もあった。演目も舞台袖で順番を確認しながら、時には舞台の上で隣の人に聞きながらやっていた。

でもそのドタバタが緊張してる暇なし！という感じでなかなか面白かった。観に来てくれた人達も、パリではいかにも観劇という感じであったが、プレスタンやエブリでは、祭りに人が集まって来たという雰囲気で、あたたかく、子供達はよく笑ったり驚いたり、大人も本当に楽しんでくれているのが表情でわかった。急にこの人達がいとおしくてたまらなくなった。いつもは客席の一点を見ながら歌っていた私も、集まった人達一人一人の顔を見ながら精一杯歌った。

アンドレ神父が最後の日「私はフランス人の日本人に対するイメージを変えたかった。そしてそれができたと思う、ありがとう。」と言った。それはまったく私達にも言えることだと思う。太鼓を通して私達は沢山の人と出会い、そして友達になった。心にしみるぐらいあたたかい旅だった。また行きたい！できれば今度はのんびり旅がしたいですね。

出逢い

根倉藤子

パリは歴史の旧い街。教会や寺院の華麗な彫刻、その像の数はパリ市民より多いとか、クラシックな家々の窓辺には思い思い美しい花を咲かせ、道往く人々を楽しませてくれます。パリは、私たちにとって今回のフランス公演の言わば初陣の地、是が非でも成功させたいというのが制作の課題でした。私たちがチラシを手わたしすると必ず「メルシー」と

いうことばがかえってくるこの街が私はいっぺんに好きになりました。

このパリで、私たちは思いがけず「職人気質」ともいえるスタッフと出会い、一緒に舞台を創ることになります。世界文化会館（シルクロード・フェスティバル）でのことです。

打合せ、仕込、ゲネプロと続くなか、会館のスタッフは、それは熱心に稽古を観ては、双方の通訳を買って出てくれたアンドレ神父を通じ、さまざまな注文（ダメ出し）をしてきます。それは演出の範疇ではなかろうかと思われることも多く、ちょっと鼻白んだ感じも無いではなかった私たちも、舞台を創る者同志、彼らの真意が段々に伝わって来ます。

こうして、舞台ソデでは、日本語、仏語、英語に身ぶり手ぶりをまじえた、舞監内田と外人スタッフの連携プレーにより舞台が進行していくのでした。照明、音響の人たちも一所懸命頑張り、「権兵衛大鼓」で月が出たときには思わず拍手を送ったものです。

互いにぶつけあって創られた本番は予想を越えるステキなものとなりました。子供たちは目を輝かせ、アンコールアンコールと観客は惜しみない拍手を送ってくれ、公演の成功を共に喜びあえたのは本当に嬉しいことでした。二晩のパリ公演のあと、ブロターニュ地方、エブリ等でまたまたステキな人たちと出会うことになります。

今回の旅で骨身惜しまず、必ずしも一糸乱れずとはいかなかった私たちにいつも慈愛深いまなざしで奮闘して下さったアンドレ神父さん、車中をなごやかにしてくれた運転手のわれらが松ちゃん（マルセル）、私たちを心から歓迎して下さった観客・市民の皆さまに心からお礼の挨拶をおくり、筆をおきたいと思います。

「日本の太鼓」プログラム

第一幕

じんじん
わらべ唄
上見れば（秋田）
堅雪かんこ（青森）
秩父屋台囃子（埼玉）

八丈島太鼓（東京）より
銚子はね太鼓（千葉）
口上
アイヌ伝承歌（女声）
ニカタクイクイ
フッタレチュイ
エハカムイ
沖揚げ音頭（北海道）（男声）
半原地固め唄（神奈川）より
わらべ唄（神奈川ほか）
一匁のイー助さん
一羽のからすが
世附獅子舞（神奈川）
沖縄の唄
月ぬ美しゃ（クイ）

第二幕

権兵衛太鼓（福井）
子守唄／わらべ唄（全国）
寝ろじゃ寝ろじゃ
坊やはよい子だ
ひらいたひらいた
ずいずいずっころばし
豊年太鼓（創作構成）
豊年太鼓（全国）
うすずみ太鼓（福井）
げんげんばらばら（岐阜）

劇団通信

演劇サークル〝麦の会〟

暑い夏がやって来ました。その暑さにも増して政府自民党は〝小選挙区制〟なる厄介なものをもち出して来て、増々危険きわまりない今日此頃です。

さて私達も、5月24・25日に麻布区民センターにて〝湯治場騒動記〟を公演しました。久方振りの創作劇で、会員一同心配しましたが、御陰様にて、好評裡にて成功し、ホッと胸をなでおろしているところです。

その成功をかってという訳ではないですがこの秋にこの作品を、更にねりなおして再演をしようと話し合っています。どうなるかとも心配をしながら期待もしているところです。またこの公演に、育児に追われていた女性の会員も戻って来て参加したのが大きな収穫でした。

（133）東京都江戸川区北小岩七―三―二〇
吉岡利根雄
〇三―三六五九―八七〇四）

演劇集団和歌山

五月三〇日―六月二日まで、楠本幸男・作並演出『操縦不能―アネイブル・トゥ・コントロール』公演を終えました。制作面では若干の赤字を残しましたが、作品は高い評価をいただきました。

今、劇団は休む間もなく、七・九和歌山大空襲を記念して催される企画に、楠本幸男・作、演出『一番星だれが見つけた』で参加、稽古のまっ最中です。

十一月下旬には劇団員の馬場田貴文・作、演出『トゥ・ユー　あなたへ』（仮題）を上演する予定です。演劇集団和歌山は今年は創作劇ばかりで勝負します！

（641）和歌山市和歌浦南一―一―一四
〇七三四―四五―四五三七）

劇団すがお

暑い夏がやって来ます。この夏にむけて、〝市民参加〟の演劇づくりをやってます。

「この子たちの夏―一九四五・ヒロシマ・ナガサキそして桑名」、地人会協力による朗読劇に△桑名▽の空襲部分をつけ加えて上演します。8月9日（金）　6・30　桑名市民会館　演出・伍藤かずよし。

出演は、新聞等による公募した婦人、スタッフは劇団すがおです。実行委員会には、子ども劇場、生協平和の会、元小学校長、戦争を語り継ぐ会等々が加わっています。

練習は五月から、毎週、土・日の午後約3時間とっております。緊張感がみなぎった中にも笑いもあり、楽しく練習が進んでいます。

ステージに、折鶴20万羽飾りたいという演出の要求で、広く市民や関係団体にも呼びかけ、必死で製作しています。

◇劇団代表の加藤と上野市民劇場の杉森氏のふたりが、6月22日～7月3日の10日間の、ハンガリー、ルーマニア、ノルウエーの3ケ国の旅行に旅立ちました。富山市の文芸座がハンガリーのデブレッツェン市との交流10周年の記念公演に参加するのと、ノルウェーのハリデンで開かれる世界アマチュア演劇大会に出演のための公演旅行に招かれての参加です。県知事と桑名市長、上野市長の親書を携えての珍道中です。そのあと、帰国後、7月13日～14日と韓国へ行き、韓国公演の打合わせです。今年度中に、劇団すがおと上野市民劇場の韓国公演が実現するかどうか、楽しみにしております。

◇秋の公演　「題未定」

劇団ＦＲＥＥとの共同企画で、児童劇を予

の世界をかりて自然破壊と生きることの尊さを訴える、石山浩一郎・作、鶴岡高・演出によりミュージカル形式で上演。『森はカーニバル』。8月16日～20日。ももちパレス。

◇九月十四日より十一月十一日迄、北九州市主催、「グリーン・ルネッサンス」に参加。ミュージカル「森のオモチャ館」公演。三十二ステージ。

◇十一月一日より五日迄、北条秀司・作、野尻敏彦・演出『明治の雪―樋口一葉抄―』をガスホールにて公演。

（812　福岡市博多区下川端町九―一五
溝口ビル3F
○九二―二七一―五〇九〇）

劇団潮流

本年創立三十一年目を迎え、心も新たに、勢力的に創造活動を展開しております。

今年二月に作りました「いま生きる」は、六月一日より全国巡回公演に入り、すでに一万名の高校生に熱い感想を頂いています。

朝日新聞紙上でも「事実のもつ重み」という見出しで、高校生、中学生に是非すすめたい作品と評価されています。

「カチカチ山」も七年目のロングランに入り、その面白さに磨きがかかってきました。

また、四月には研修生が水上勉氏の「ブンナよ、木からおりてこい」を、三人語りのユニークな公演をし、六月十五、十六日は、水上勉氏の若州一滴文庫において、くるま椅子劇場に参加しました。

七月からは吉永仁郎書きおろし作品『明神下の賑やかな家―滝沢馬琴家の人々―』の稽古に入り、九月十一、十二、十三日、大阪テイジンホールで上演します。

この作品は大岡欽治が吉永氏と共に一年間研究を重ねた労作ですが、目前にして、五月二〇日、脳梗塞で倒れました。一時は生命も危ぶまれたのですが、医者も驚くばかりの強靱な生命力で回復し、只今はリハビリに入っている状態です。劇団員一同、大岡欽治の意志を継いで、是非ともこの作品を成功させるべく頑張っております。

微弱ながらも平和な社会をつくる為の、すぐれた文化を創造していくべく、これからもよろしくお願いします。（金子順子）

（557　大阪市西成区松一丁目六―一七
○六―六五八―二三一五）

関西芸術座

六月、七月は稽古場は大賑い。なにしろ、三本の芝居の稽古がかさなり、10時から5時

定しています。劇団FREEの公演の終了を待って、作品決定、稽古にはいります。

（511　桑名市森忠一〇五八
○五九四―三一―四二一〇）

テアトル・ハカタ

三人の演出家と三人の女優が綴る一人芝居の三部作、西鶴の「好色五人女」より、「おせん、お七、お夏」の物語。脚本・石山浩一郎。

舟越節・演出による「おせんの巻」は、夫婦池のこさん婆の語りを通して、勝ち気の浪速娘が、樽屋に見初められ、結婚して悲しい結末へと走る不倫の予兆を表現。

竜まさと・演出による「お七の巻」は言葉を含めた肉体表現や、ミズァンセーヌを駆使しての一人芝居を通して、十六歳の少女のひたむきな愛を表現。

北川湛子・演出による「お夏の巻」は、能は過去への愛、つまり枯淡の世界、西鶴は現世への愛、生身の煩悩。過去から現在、そして過去へと自在に移る舞台美を表現。

キャビルホールに於て、五月二十四日より二十六日まで、特別公演を含めて八ステージを盛況裡に終了。

◇恒例の「夏休みファミリー劇場」は、昆虫までの時間調整に大わらわです。

その一、「河童詫証文」（栗原省・作、仲武司・演出）。七月より、中・高校・全国こども・おやこ劇場高学年例会で、移動公演開始。

その二、「一銭五厘の旗」（かたおかしろう・作、道井直次・演出）。8月15～31日。京阪神労演例会。

その三、「十一ぴきのネコ」（井上ひさし・作、上利勇三・演出）。9月11日、八尾プリズムホールで試演会。92年一月より、中・高校・全国こども・おやこ劇場高学年例会で巡演予定。

「一銭五厘の旗」は酒井寛（朝日新聞社刊）の同名書物が出典。かって『暮しの手帳』の編集長であった花森安治の半生を描いている。

劇団の、京阪神労演例会出演は、実に二十二年ぶりである。なお、この舞台には劇団京芸の藤沢薫さんが客演します。

（545　大阪市阿倍野区文の里4―18―6
○六―六二一―二一一二）

劇団新芸

前号で萩坂さんの仕事の中で誤字等の書き直しが一番労の多い事と伺い、私も一層注意しなければと反省しています。

新芸としての活動は又々一時休みですが、北海道演劇集団後志ブロックとして、7月13日（土）小樽市公会堂で〝演劇学校〟を予定しています。講師は劇団さっぽろの飯田信之氏外一名。

「大鼓たたき」を5時間の授業の中で創り上げてゆこうとする試みです。参加予定は、各劇団員の他、小樽、後志の高校の演劇部員や青年団の演劇サークル等に呼びかけています。

新芸は休んでいますが、鹿角代表のみあちこちに使われております。一番大変なのは、「小樽に文化ホール建設を願う市民の会」の事務局長として、7月に行なわれる総会への取組みです。それが終ると、岩内町のエンカマフェスティバルで、シアターⅡの渋谷健一氏の推理劇「義経伝説」に出演予定です。これには劇団湖の加藤氏、竹田氏やシアターⅡの真田夫妻も出演されるそうです。

（宮津泰子）

（047―02　小樽市銭函3―23―162鹿角方
○一三四―六二一―三二五四）

劇団上野市民劇場

三月のけい古場公演以降、しばらくエネルギー充足期にはいっています。現在三つの劇を同時進行で練習中です。一つは九月上旬に韓国公演予定の、ふじたあさや作「おこんじょうるり」。二つ目は新しい移動公演のための小公演、多田徹・作「花がたな」。三つ目は十二月八日に、上野市民劇場創立四十周年特別公演として行われる。岡島善樹・作「あがつくにの物語」です。これは十一月完成予定の上野市文化会館のこけらおとしでもあります。次号の「演劇会議」では、これらのbig公演の報告をbigにしたいと、団員一同頑張っています。

（結城りん）

（518　上野市丸之内共同ビル3F
○五九五―二三―五二五二）

青年劇場

「小選挙区制」反対声明、タイミング良く出してもらい感謝しております。早速パネルにして、「翼をください」「遺産らぷそでい」の地方巡演公演初日からロビーに掲示し、署名を訴えています。団内でも在京、公演班それぞれ緊急学習会をもち、戦後三度目の暴挙に対し、大きな反対運動を展開しようと話し合いました。

又、消費税についてもあくまで廃止まで反対行動を続けていくことにしています。

さて五月公演「すみれさんが行く」（斎藤紀美子作・堀口始演出）は、東京定例公演の青少年劇場公演として取り組み、この種の公演としてはかつてない観客数を記録しました。又「テレビ作家の舞台進出として…数少ない成功例の一つ」（毎日新聞）をはじめ、作者のさわやかで大衆性豊かな創作が評価されました。秋からは学校公演となります。

さて次は九月公演。「青春の砦」「手紙」と戦争体験の次世代への語り次ぎをライフワークとしている瓜生正美の書き下ろし「椰子の実の歌がきこえる」（千田夏光作品集より）を、今回初めて、中野千春が演出します。時は現代。九州のとある漁師町で舟宿を営む老夫婦とその戦友、戦争体験の聞きとり調査に取り組む高校生もからめ、今なお戦争の傷跡に苦しむ人々を描きます。

（9／5～17・朝日生命ホール・前進座劇場・本多劇場）15ステージ。

今年に入って「高校生のための演劇講習会」を三回、そして「教師のための演劇講座」も新たに企画され、青少年劇場運動の充実がはかられています。リアリズムの創造方法を次世代へ伝える大切な仕事として今後も系統化していく方向です。

尚現在「シシとササの伝説」「翼をください」「遺産らぷそでぃ」の三班が外部出演者・スタッフの協力も得て地方公演中です。

これから夏にかけて種々の催し、集会・大会が続き、九月公演へと突入。小選挙区制阻止も含め、ともにがんばりましょう。

（葛西和雄）

160　東京都新宿区新宿二―九―二〇
○三―三三五二―六九二二）

劇団しゆう

劇団創立丸三年の翌日、四月十三日から二日間、3ステージを無事終えることが出来ました。自分達の手で会場づくりを行ったりしたので、公演終了後はクタクタでしたが、劇団員は充実感を味っているようでした。

さて、'89、'90、と豊中市人権平和フォーラムで「モモ」を二年に亘って上演しましたが（いずれも市民公募）'91は、マルシャークの〝森は生きている〟に決定。この8月に三たび市民公募し、脚本演出を又川が担当。十一月23・24に上演の運びです。一方、劇団の方は、それまで持たないという意見が強く、九月末か十月初旬目指して、再び松尾の演出で別役実の〝にしむくさむらい〟を上演予定、創立以来、走りに走った又川にも、最近やや疲れが目立って来ているが、その分若い劇団員が張り切っていて、これならなんとかなりそうという、「しゆう」の昨今であります。

（M記）

560　豊中市服部西町四―十三―一
豊中市立　青年の家いぶき内
○六―八六六―三〇三〇）

または

563　池田市豊島北二―四―六
共栄ビル2F　又川邦義方
○七二七―六二―五六七五）

劇団銅鑼

今年、劇団創立以来初めての合宿総会（千葉にて2泊3日）をやります。財政的に非常に厳しい中で、何故こんな大胆（?!）な事をしてしまうのか。

それは、来年の創立二十周年を迎えるにあたって新たな気持で次年度のスタートをし、お互いの理解を深め合おう、という目的なのです。旅公演ではしょっちゅう共に行動していても団員全員が朝から朝迄過すという事はめったにないのです。総会はもちろん生活をかけた会議だから重要なのは当り前だけれど遊んだり、飲んだり、楽しい時間を過すのもとても貴重なことだという訳です。

九月からは、二十周年準備に普及、三作品の稽古と旅公演と、目のまわるスケジュールが待っている訳だから、やっぱりこの経験は貴重だ／と皆思っています。

ちなみに、記念公演第一弾は来年五月にアポストロフィの平石耕一氏脚本による「約束の国への長い旅」（仮題）、第二弾は九月に小山内美江子氏書き下ろしの作品の上演です。二十周年以降の劇団銅鑼にご注目下さい!!

（田辺記）

175　東京都板橋区成増五―一―二
○三―五九九七―九四六一）

劇団息吹

こんにちわ。暑さも増してきましたが皆様には益々、ご活躍のことと存じます。さて、私達の秋に上演する「闇に咲く花」の稽古もいよいよ佳境に入って来ました。なんといっても今度の作品では、二人の若者が重要な役どころです。外見も中身もフレッシュな新人を主役に配し、息吹の新たな可能性を期待しています。又、同じ自演連仲間の劇団わだちからも、二人、協力出演してもらっています。

今回の作品の中で主役の若者が言うセリフがあります。「…ついこの間おこったことを忘れちゃだめだ。忘れたふりをしちゃなおいけない。過去の失敗を記憶していない人間の未来は暗いよ……」今も地球のどこかで殺しあいが行われています。人間というのは、忘れたふりをするのが好きなのでしょう。今の日本も危ないものです。戦争というテーマが永遠であるということは悲しいことです。是非たくさんの方に観ていただく為にも頑張ります。

さて、それにつけても、一つの芝居を創って皆さんに観ていただくのに、なんとたくさんの制作費がかかることか。その中でも一番大きいのは会館費です。私達は今まで三ケ所ほど場所をかえ上演していましたが、今回は二ケ所にしぼり、皆さんに足を運んでいただくことになりました。地域で安くて使いやすい公共の施設がほしいと切に思います。益々厳しくなっていく職場の状況の中で、稽古時間は遅くなり疲れもたまり、しかし、芝居を創っていくその瞬間が、一番人間らしい時といえるのかもしれません。やはり私達にはこの道しかないようです。

〈公演日程〉

「闇に咲く花」井上ひさし作、大坊晴彦演出

九月十九日㈭、二十日㈮、六時三十分
八尾プリズム小ホール

十月三日㈭、四日㈮、六時三十分
近鉄小劇場

（578　東大阪市中野二二四―一四
○七二九―六四―四四四一）

劇団だいこん座

◇春の公演は五月十八日に鶴岡市中央公民館ホールにて、山田太一作「教員室」を上演しました。近来にない稽古不足、客演者六名というきびしい条件でしたが、何とか公演できました。稽古不足のわりには評判がよかったのは、本もよかったが、少しづつ芝居のつくり方がわかってきたからでしょう。

◇秋の公演は高橋寛・作「ムコとりとヨメとりがいっしょになれば〝91〟」（2幕）を公演する予定です。これは十一年前に上演したものを現在に合うよう改訂したものです。

長男、長女の結婚問題は現代少子化（一・五三ショック）現象のなかで一層、深刻になっていると思われます。これを地元の方言でユーモアをまじえて描ければと考えています。

今は、春と秋の公演を行うことのみ考えて行動しています。

（997　鶴岡市青柳町四二―三二
○二三五―二四―一六八八）

劇団あしぶえ

山陰にも暑い夏がやってきました。全り演の皆さん、お元気ですか？

去年あしぶえ五〇人劇場で、四六ステージを終えた『セロ弾きのゴーシュ』。一月に出雲市の成人式で、特別公演をしました。続いて、六月二三日に、広島の青少年センターで公演。キャパ六三〇の席が満席となり、二〇〇人もの立ち見となる大盛況でした。宮沢賢治のすべてを知る人から、『セロ弾きのゴーシュ』のセの字も知らない人まで、また大人から、幼稚園・小学校の子供まで、幅広い方に楽しんでいただけたようです。広島公演は四回目。あしぶえも一歩一歩大きくなったような気がします。

ゴーシュの公演は、あと一回。島根県内の掛合町で県主催の福祉ふれあいフェスティバルに参加して、本当に千穐楽です。計四九ステージ。自分たちのことながら、よく頑張ったと思ってます。ただ出来れば、五〇ステージというきりの良い数字で終わりたいのですが…。さあ、これからは次作品めがけて頑張ります。次作品は『おこんの初恋』（北條秀司・作）。十一月十日より来年五月まで三〇ステージの予定です。歌と日舞を交えて、園山土筆が初めて「初恋もの」に取り組みます。〔本当にいい作品は、大人が観ても子供が観ても楽しいし、きっと感動できるはず〕と思いながら努力していきたいと思います。五〇人劇場に、ぜひお越し下さい。

（690　島根県松江市砂子町二〇九―三
　　〇八五二―二七―三〇五〇）

前号に代表・園山土筆の新住所をお知らせしましたが、誤りがありましたので、ここで訂正をしお詫び申し上げます。（狩野裕香）

（710　倉敷市中庄三五八二―六―
　　一―二―三
　　〇八六四―六二―四一三〇）

演劇集団土くれ

全り演の仲間の皆さん今日は。

皆さん元気に活躍のことと思います。さて私たち演劇集団「土くれ」は現在、初めての地方公演の稽古に入っています。ヒョンなことから話が持ち上がり、あれよ、あれよと話が現実のものとなり、8月11・12日の石川県加賀公演が決まりました。（集団の事務局長の母校のPTAからの依頼公演です。）

作品は井上ひさし作「闇に咲く花」で、これは今年2月1・2日池袋で公演した作品です。しかし、中心役者である公麿を初め、女性三人の役者が交代したため、前回公演並みいやそれ以上の作品に仕上げることができるか、不安と焦りの毎日です。でも決まった以上わが集団特徴の一つであるガンバリズムを発揮し乗りこなすしかないと、団員一同汗と涙を流しています。次回は、この結果を報告できると思います。

秋公演の作品が決定したので、お知らせしておきます。前回に引き続き井上ひさしの作品で「人間合格」です。

（105　東京都港区西新橋二―四―一
　　森山ビル4F　福田事務所内
　　〇三―三五〇八―〇一〇四）

劇団はぐるま

まもなく本番の幕が開きます。一年ぶりの公演です。「夏休み親と子の劇場」を改称し「なつやすみファミリー劇場」として〝十一ぴきのネコ〟を上演するのです。

昨年の〝孫悟空〟以来、劇団内でゴタゴタが続き、何回か全体集会を開いて話し合って来た結果、改めて入団届けと団員名簿を提出することで再出発することになりました。再入団しなかった人も何人かいましたが、これを機に常時活動班と非常時活動班に分け、こまかい班割りも見直しました。

これで総てが解決した訳ではありません。表面上をいくらとりつくろっても、大切なのはそれぞれの心なのですから。

で、再出発第一弾が〝十一ぴきのネコ〟なのです。八年前に一般公演として上演し、五年前にも再演しているのですが、子供向けは初めてです。今回、メンバーも一新し、大幅に若返っての再再演となります。おかげさまで6月10日の申し込み開始以来順調な滑り出しで、一週間たたないうちに満席となるステージもあり、7月10日現在、チケット売り上げは七三九八枚（6ステージ）となっています。改めて岐阜の子供たち、大人たちに期待されていたんだ、と嬉しくなります。

こうなってくると、あとはその期待にどう答えていくか、です。新人が半分以上を占める今回の舞台、仮初日を終ってまだまだ問題山積みですが、ここでコケたら後がないのですから、一五〇〇円で二〇〇〇円以上の舞台を見せようと全員頑張っています。

（内田　薫）

（506　岐阜市西野町一―十一
　　〇五八二―六五―一八五二）

劇団コーロ

始まったばかりの夏／の暑さに早くも参っております。―それにしても長崎の雲仙岳被災者の人達はこれから暑い夏、大変だなー本当に心からお見舞申し上げます。

劇団コーロの活動報告は

〝21世紀の子どもの未来を話し合う
　'91　夏　佐渡〟

第二回こどものための舞台芸術大祭典が、8月17（土）～21（水）まで、佐渡全島で行われます。

私達も「天満のとらやん」を8月17日畑野町・畑野小学校で10時より、19日相川町・金泉小学校で13時よりと2ケ町で、「芸の村」教室として「劇づくり」に畑野町、相川町と2ケ町を担当します。公演は勿論、家族も含めて全員車を連らねて参加します。

佐渡で育てられた民族芸能やまだ大切に残されている自然に触れ、大いに楽しみながら子どもたちの、そして芸術文化の豊かな未来について語り合い、伝え合い、感動をともにする〝'91・さど〟の夏に期待は高まっております。みなさんもいらっしゃいませんか？

◇公演予定　今年は2本の新作です。

●「私が私と出会う時」
　―中国帰国者たちの教室―
太知恵子著『雨ふりお月さん』による―
　脚本・演出　ふじたあさや
　9月6日　6時45分
　9月7日　2時30分　6時45分
　於　リサイタルホール
'92 1月10日　6時45分　近鉄小劇場
　（予定）
　入場料　一般前売2500円　当日3000円
　学生前売2000円　当日2500円

●「おばけ旅　なん者　ひなた丸」
　原作・斎藤洋　脚本・久野春光　演出
　幸　晃彦　小学校巡演作品10月より。

◇佐渡も含めて夏に集中した活動です。暑さに負けず、がんばりましょう。

（四橋）

（546　大阪市東住吉区今川八―五―九
　　〇六―七〇五―二八〇五）

劇団埼芸

本日（七月十三日）、第六〇回公演「この子たちの夏」を終了しました。

劇団は四月十三・十四日、蕨市民会館で、「神通川」を上演しましたが…、地方選挙の真最中であり観客動員ができず、劇団創立以来の危機じゃないかと、劇団員一同深く反省し、批判し、自分自身の一人ひとりが自覚し

つかしいですね。

七月二十一日は、合評会と来年のレパートリーの総会となり、総合的に協議をし、未来の方向が見えてくるでしょう。

次回公演の予定は次の通りです。

◇第六十一回公演

「彦市ばなし」「二十二夜待ち」

木下順二・作　由布木一平・演出

10月19・20日　小鹿野文化センター（予定）

11月2日　上尾福祉会館

12月1日　川口南平文化会館

12月12日　大宮ソニックシティホール

（M・記）

（330　大宮市染谷一一七一―四

〇四八―六八四―三〇八二）

劇団四紀会

暑い夏がやってきました。かねてからすすめられていた、クーラー購入計画は、今年は見送りとなりました。クーラーのある生活に慣れてしまっている私達としては、けい古場にむかうのがつらくなる時ですが、けいこで思いきり汗を流したあとのビールは、ほんとうにうまいですねえ！

来年はみんなで資金を出しあってなんとかクーラーも買えそうですので、うまいビールは存分に味わっておきましょう。

今は、最後の試演会〝鴨猟〟と、移動公演〝きしゃのやえもん〟のけい古中です。

短いけいこ期間で作品を仕上げていくことは、かなり体力的にも、精神的にも負担がかかります。短期間の中で、あせりを感じながらもけい古にはげんでいるものの、やはりもっと時間がとれないものかと感じます。

今年は、演劇教室卒業生七名のうち一名が劇団に残ってくれました。小学生の子供が2人いる働くママさんです。新しい風が吹きそうです。

それでは公演予定を―。

◇試演会№8　『鴨猟』　ヴァンピーロフ作

岸本敏朗演出　8月9・10・11日

◇秋の公演（神劇まわり舞台）

『雪やこんこん』　井上ひさし作　三村省三演出　12月6・7・8日（決定）

12月13・14・15日（未定）

◇移動公演『きしゃのやえもん』　未定

（650　神戸市中央区元町通二―九―一

元町プラザ六一二

〇七八―三九二―二四二一）

ました。制作的な問題や観客とのむすびつきが少なくなっている気がします。

さてその後、七月十三日、2ステージ、大宮ソニックシティ小ホールでの「この子たちの夏」となります。

「神通川」公演の二の舞を踏まないように劇団員一丸となってやりぬこうと決議し、行動を始めました。

各人が自分の身辺の客にしか普及していない、組織の中へはいろうということとなり、各人が訴えにはいりました。今回の公演は劇団初めての座席指定にしました。（劇場側の規則により、一切の立見客は許可しない）私達の演劇行動には非常にやりにくい事でした。

今回は、「'91平和のための埼玉の戦争展」の実行委員会を中心に、上演実行委員会を組織し、地域へ、労働組合へ、地域活動団体の中へと入って行きました。

その結果チケットは、本番三日前に、昼の券は90%、夜の券は100%、売上報告はありました。そこで問題です。幕が上りますと、一～二割の観客が来ない、切符は売れているのに……という状況です。

幕が下りたばっかりなので、明日から集計、分析をはじめますが、なかなかきびしく、むことからはじまった。

この企画が〝国家機密法に反対する懇談会〟の手も加わって、横浜では地元市民劇団だけで、東京・杉並では劇団民芸と劇団展望が、豊橋で地元の劇団と市民の混成メンバーで、相模原では女子大生だけでの朗読パフォーマンスにと展開していった。

そのころから、その地でまさにくらしている人たちの声が検閲カットされた場面を読む集まりに。そうなるとたった一言の台詞のために舞台にいるとはいえ、いや、だからこその稽古が必要となり、その出演仕掛人の一人として、劇団展望が加わることになっちゃったのです。

▼この夏は旭川に。出演オーディションに応じて集まったのは主婦・薬剤師・米屋・看護婦・定年退職した校長さんから自衛隊員、それこそ65才から高校生の16才。みな〝なにかわたしに出来ることがあれば〟と思っていた。（ただし、自分を変えないですむならの保留つきで…）

▼けいこのはじまりは、〝これはお芝居ではありません。迫力いっぱいで感性をしめつける熱演は厳禁。役にのめりこまない肉声、くらしの上に足で立っている声、しづかなゆったりとした身ごなしで読もう〟と。

▼このパフォーマンスは、8月に埼玉・飯能で一一〇〇人のホールを使っての試みにつながっているのだが、オーディションにきた地元演劇サークルの若者が早速ものすごーくリキの入ったしかめっ面で読みはじめた。すかさず〝ねえ、それを全部なくしたところからはじめましょうか〟。…自分にもむかっている言葉だった。

▼旭川からの飛行機が東京に近づいてどんよりごみっぽい中につっこんだとき、考えた。素人の初舞台が本人も気づかないで到り着いてしまったファンタスティックな〝ただ一度〟を〝何度も〟実現するためにこそ演劇の仲間は不断の努力（ご存知、日本国憲法第12条・国民の権利と義務の一節にもある日本語）をしなければ……なんだなあ。

そして、満席からの拍手ではじめて生まれる自信ではなく、10人の出演者が4人の観客を信頼して舞台にいる自信が……なんだなあ。

▼この朗読の試みはもちろん市民としての演劇人こそ歓迎しています。（林陽子）

（166　東京都杉並区阿佐谷南三―三―三一

〇三―三三九三―二七三九）

演劇集団あり

演劇集団石るつ

集団員が二人減り、ますます小さくなった「石るつ」です。

これだけになると、失うものこれ以上無しといった、涼しい気持になれるのも不思議です。今年は、諸事情により春公演をやめ、九月に予定。

夏休み返上の稽古も又、かつて無いこととして楽しんでやろうじゃないか。

『獄舎の月』　原作・赤石宏　脚本・笠置リエ　演出・境野修次

一九九一年九月十三日（金）　七時

十四日（土）　二時・七時

深川江戸資料館小劇場

（135　東京都江東区森下五―十一―八

荒川ビル　吉川複写工業内境野

〇三―五六〇〇―〇二七〇）

劇団展望

〈劇団通信に代えて〉

▼はじめは、展望小劇場を会場に四年前からカラクチ映画評論家・白井佳夫さんがはじめた阿佐谷映画村の第一回にとりあげた昭和18年の阪妻主演「無法松の一生」を上映し、戦中戦後に二度にわたって検閲削除された場面のシナリオ朗読に劇団メンバーが出演した

山陰地方は雨の日が続いています。雨にも暑さにも負けず、続けることがサークル演劇の生きる道でしょう。

私たち「あり」は鳥取県演劇連盟公演に、五月二十五日鳥取市文化ホールと六月二日米子市公会堂で、内部創作、添谷泰一作「真夜中のテーブル」をもって、他の三集団と共に公演しました。

例年のことながら、合同公演では自主公演以下という観客数で、互いのもたれあい、連帯と刺激の不足があり、単に一緒に並べて演るのみの限界に悩んでいます。

そして、創る側、観る側共々に、若い世代と古手の間に、演劇に対する価値感や、求めるものの差の大きさに、苦悩しています。互にこのままでは、異星人の間の対立のようになるのではなどと、思うこの頃です。

前号で、「すがお」の通信に国民文化祭出演の価値について報告もありましたが、一歩でも相方共に進歩があればと、この秋千葉の国民文化祭創作演劇部門に出演することとしました。

作品は、宮沢賢治と盛岡農高時代アサリアの同人であった、鳥取県倉吉市の詩人で俳人の河本緑石が、賢治の「銀河鉄道の夜」のカンパネルラの死と同様に、溺れる友人を救って、自の命を捨てた、不思議に重なる運命の人物を捜入した創作を、四苦八苦の稽古です。

尚、十月には米子市の市民運動で実現できた、文化ホール（六百七十二席）がいよいよオープンです。「文化ホールを実現する会」に発足から参加し、他の文化団体と共に建設場所の問題、内部の設備等の使う側から、地方文化活性化のために要望を提出し、時には行政側に理解を得られず、涙することさえありましたが、大きな市民の文化運動として、使いやすい文化ホールが完成します。色々と全国的に、専門家、関係者の方々に指導と協力をいただき感謝しています。

（683　米子市昭和町23　宮倉義文方
○八五九―三三―九三〇二）

劇団大阪

創立20周年企画№1「エリアンの手記」は八九五名という、劇団のけい古場公演での記録を大きく塗り変える観客数を集め、20周年行動の幕開けに相応しい快挙となりました。

キャストをすべて若手に振りあて、ベテラン陣がすべて裏へまわるという、研究生公演以外では考えられない初の試み、しかも、いわゆる「小劇場派」の作品への本格的な初挑戦という冒険づくしの取組だったわけですが内容的にも、某新聞評で、大阪の新劇団の、上半期のベスト作品と評されるなど、かなりの評価を受け、劇団若手陣の目をみはる成長ともあわせて劇団の大きな財産となる舞台だったと思います。

ただし、定員五六〇名の小屋に、その一・六倍もの観客をつめこんでしまったこと（一部指定席方式へ転換を考えています）や、若手陣のこのパワーを、どう劇団の確かな力として組み入れていくか等々が課題として残りました。

現在、秋の本公演、20周年記念企画№2「砂の上のダンス」のけいこに入っています。

春の若手の大奮闘に刺激されたベテラン陣が、どういう舞台を創っていくか、正念場に立たされた、中堅、古手劇団員の活躍に御期待下さい。

当面のスケジュール。

◇第36回本公演20周念企画№2　大阪新劇フェスティバル参加作品
「砂の上のダンス」　作・山田太一　演出
斎藤誠
一九九一年十月十七日～十九日　4St
近鉄小劇場

（以上文責　左）

（542　大阪市中央区谷町七―一―三九―103
○六―七六八―九九五七）

劇団京芸

○四年間全国で上演を続けた「ホルストメール」は、十二万人の観客とまみえ、一六〇回上演の最後を飾って打ち上げ公演をやることになりました。どうかごらん下さい。

八月八日　昼三時・夜七時　文化芸術会館

○「鳥たちの夜」（水上勉原作・ふじたあさや脚色演出）大阪公演。

十一月十九日　メルパルクホール
昼　二時　夜　六時半

○「そうべえごくらくへゆく」（田島征彦原作・駒来慎脚色・つげくわえ演出）の全国おやこ劇場の公演がいよいよ七月からはじまりました。みなさんのご当地へまいります折にはぜひご覧下さい。

久しぶりに二本のオリジナル作品を生みだせたものの劇団は故障者の続出で、まさに不時着寸前の片肺飛行を続けていましたが、新メンバーの加入もあってようやく正常飛行に入ったところです。

（612　京都市伏見区納所北城堀31―18
○七五―六三一―二六〇九）

劇団さっぽろ

札幌でもおどろくほど多くの若い劇団やグループが雨後の竹の子のように誕生しつづけそのほとんどが小劇場スタイルの芝居を上演しています。こんなにも演劇人口があったのかと、一種の感慨にふけっているところですが、彼らの多くは既成の劇団には入らないしましてや我々のような、地域の弱小プロ劇団にはコミットすらありません。最近では入団希望すらない状態です。全国どこでも似たような状況だと思いますが、次世代が育たないどころか、居ないのです。危機的状況です。

さて、現在巡演中の「夜明けのロックンロール」（作・松岡義和、演出・飯田信之）は7月17日で千秋楽を迎えます。引きつづいて夏休みは「のんびり転校生」（台本・矢作京介、演出・飯田信之）の稽古に入り、8月下旬から公演の予定です。未だキャスト、スタッフが足りません。

改装なった稽古場で、新事務所は、みんなが公演に出かけているとガランとしてさみしいものです。稽古場企画やイベント、貸し出しなどいつも賑やかでいたいものです。なんとか秋には2～3本の企画を実現したいと考えています。

札幌にも『キャッツ』がやってきました。地元の銀行グループや企業の支援を受け、大宣伝とともに、この春から札幌駅近くの広場に大テントを設置し、連日満員のようです。大手スーパー演劇の全国チェーン化の完成です。

（063　札幌市西区宮ノ沢3条4―14―8
○一一―六六六―〇八一二）

劇団海鳴り

今年は春の芸術祭「ザ・ジョイント」が10周年を迎えました。毎年、ジャンルの違う文化団体が集まり、低料金で文化を市民の方々に楽しんでもらおうと開催していますが、各々の発表を同じ日に上演しているものでした。

実は、何年も前から〝合同で一つの演目をやりたい〟という声があがっており、毎回検討はしていましたが、脚本はあるが楽譜がなかったり、その逆だったりで企画倒れというか、実現できずにいました。

けれども今年は10周年。一つの節目でもあり、ぜひ合同で公演したい！と実行委員会は燃えに燃えました。音楽3団体・バレエ・芝居の三位一体の演目は仲々決まらず、〝ペールギュント〟〝白鳥の湖〟などいろいろ候補があがり、ついに〝オズの魔法使い〟に決定。

楽譜はあるか、脚本はあるかと探しまわり、たくさんの方のご協力をいただきました。

結果的には劇団海鳴りのオリジナル脚色、劇中歌は音楽団体の作曲、とオリジナル色の強い作品となりました。

しかし音楽は別として、脚色は殆ど初体験、関西弁あり、東北弁あり、ダジャレ、ミニチュア、ズッコケの、なんでもありの芝居となってしまいました。

いったいどうなることかと思ってましたが上演日（6月16日）は、前評判が前評判を呼び、その前評判が道演集は連れてくるし、中学生、小学生、果ては乳幼児まで来てくれてな、な、なんと、一四〇〇名の動員となりました。

実は道演集の観劇ゼミナール開催地が当紋別だったので、道演集の方々が来てくれたという訳でした。それにしても一四〇〇名。階段で見る人はいるは、立ち見は出るはで大変な状況でした。一四〇〇名といえば、海鳴りの秋の定期公演の記録をアッというまにぬり換える数字です。集団の力はすごいですね。記録的な動員数で超満員の前で演じられるのはとても嬉しい。

ああ有難い、有難い。ジョイントの仲間を大切にして、これからも続けたいなと思う。海鳴りの面々でした、とさ。（文責・安川）

（094　紋別市潮見町2―3―40
我孫子正好方
〇一五八二―三一―三三八）

劇団弘演

只今は、11月の第28回公演へ向けて、稽古中です。

●レフ・ウスチーノフ作・佐藤恭子訳・秋本博子演出『最後の貧乏人』

●上演予定　11月6～7日午後6時30分

●会場　弘前文化センター

あらすじは、ある金持ちたちの町が、「金持ちの町コンテスト」で優勝して、賞品の純金の花束を手に入れようとしますが、どうしてもじゃまなのが、町外れの森の住民「最後の貧乏人」。彼を追出すために、あの手この手の作戦を練ります。さて町の住人金持ちたちは、見事優勝できるでしょうか。森を愛し動物たちと暮す「最後の貧乏人」の運命は？

歌あり踊りあり、コンピューターあり、公害やスモッグあり、噂もいれば恐さもいる、もちろん恋もあり、悲劇とみるか、喜劇とみるか……それは見ないとわからない。

この作品は十数年前に「テアトロ」に載ったもので、最近まで「京芸」さんで「金の花束」として上演されています。また作者、レフ・ウスチーノフは、ソビエトの人気児童劇作家。日本にも旅行した事があり、この作品にもいかされているとのこと。

'87年以来、スペースデネガなどの小さい劇場でしか公演してこなかった劇団ですが、来年、再来年で三十周年を迎えるために、是非文化センターでやろうという事になりました。

（武中　正）

（036　弘前市品川町一　ブラジル内
〇一七二―三五―四六七〇）

劇団名芸

名芸は去る7月6・7日に天白子ども劇場を終えたところで、現在上半期の総会を行っています。ほんとはそこで秋のレパを決定し報告したかったのですが、本原稿締切り時点では決まらず、残念ながら活動報告のみにします。

子ども劇場は知名度の高い『オズの魔法使い』（脚本／栗木英章・演出／佐野秀明）だったせいもあり、予定した四ステージ共超満席で、百人以上のお客さんに帰ってもらう始末、急遽追加したステージもよく入って、結局千人近い人たちに観てもらいました。少ない（？）若手と、多い（？）中年が、四ツに組んでがんばったこともあり好評を得、十月には地元成人学級主催の特別ステージも決まり、嬉しい悲鳴をあげています。もちろん恒例の南子ども劇場も9月14・15と、南図書館ホールで行うわけで、当分オズフィーバーが続きそうです。しかし、慣れ親しんだ南図書館ホールはこれを最後に撤去され、かわりに来年四月、南文化ホールがオープンとなります。劇場機構が整うことはうれしいのですが会場費が一挙に五倍近くとなり、来年からは守ってきた低料金（五百円）をアップせざるを得なくなりました。残念です。

その他の活動としては、7月21日に地元の〝反核・平和をねがうわが町コンサート〟に民話（天白に伝わる毛替地蔵の話――作／栗木・朗読／滝沢美智）を上演します。

夏のブロックゼミナールは、運営委の劇団名古屋が中心となり企画中ですが、8月25日名芸平針小劇場で開催予定です。また秋（10月末）には、名古屋劇団協議会合同公演・市民芸術祭参加企画があり、谷辺が制作チーフとして準備に加わっています。

梅雨があければ猛暑、バテないよう心と体を維持して、いい仕事をしたいものです。

（468　名古屋市天白区平針一―一八〇八
〇五二―八〇三―二九二三月・水・金夜
お急ぎの郵便や小包みは左記へよろしく
457　名古屋市南区汐田町十一ノ八栗木方
〇五二―八二一―三六九一）

劇団湖

皆さん、今日は。劇団湖も来年創立三十年を迎えます。今取組んでいるのは、11月16日、17日、三笠市民会館で上演するJ・Mシング作、高坂純・脚本、飯田信之・演出（劇団さっぽろ）の、〝歌入り芝居、アイルランドのほら吹き男〟です。五月に青森の支木さんが上演した「西の国の人気者」の三笠版です。青森へは〝湖〟からも観劇参加しました。

今年も昨年に引き続き、道演集仲間の客演交流、観劇交流が活潑です。

1月22日・富良野塾の「今日悲別で」三笠市民会館　2月22・23日・札幌圏合同の「石川一座・夜啼くかもめ江差恋唄」（渋谷健一作・山根義昭演出）札幌市教育文化会館
2月23・24日・江別〝川〟「ガンバの冒険」（春日基・作・演出）江別市民会館。これには〝湖〟から四名客演。3月30日・青年座「亜矢子」岩見沢市民会館。　4月7日・小樽〝新芸〟と岩内〝波〟の合同「人を喰った話」小樽市民会館　4月27日・札幌圏合同「石川一座――」を地元、江差文化会館。〝湖〟からも二名客演。

4月21日・劇団さっぽろのケイコ場と事務所の増改築落成祝公演で「タイコ叩きの夢」を飯田信之演出で〝湖〟から三名客演。5月18日・劇団新人会「山彦ものがたり」岩見沢市民会館。　6月16日・紋別〝海鳴り〟「オズの魔法使い」紋別市民会館で観劇ゼミ。

6月23日。三笠市初夏の文化まつりで「人を喰った話」を劇団湖の新人主演で上演。

7月1日・わらび座・三笠市民会館。　7月4日・ギリヤーク尼ケ崎大道芸を江別市ドラマシアター〝ども〟にて。　同じ会場で7月6日・愚安亭遊佐の一人芝居、新作「恋唄」を。　7月7日・善人会議「ジプシー」岩見沢市民会館。　7月10日・劇団さっぽろ「夜明けのロックンロール」道新ホール。

7月27日、岩内町で、野外劇「義経黄金伝説」（渋谷健一作、坂井弘治演出）を上演しますが、出演は小樽〝新芸〟、札幌〝ジアター・Ⅱ〟、三笠〝湖〟の道内劇団のほか、わらび座まで加わっての混成チームです。

以上ずい分詳しく書きましたが、このように観劇・客演の交流の深まることは、大へん

よろこばしく、楽しいことです。

劇団さっぽろの演出家飯田信之氏の〝力〟は多大なものがあることを附記します。十一月の〝湖〟の公演には飯田氏夫人長谷川京子さんの客演も決っています。

9月7日　紋別市で、道演集の演劇学校がひらかれます。　（加藤佳子）

（068－21　三笠市本郷町五七八－九加藤方
〇一二六七－二－三〇四四）

名古屋演劇集団

今年初めに大量の退団者を出し、心配しながらの「泰山木の木の下で」の公演、大成功とはいえませんでしたが、現有勢力でよく頑張ったという結果で、ひとまずホッとしているところです。創造面の成果については、劇団名芸の栗木氏が批評を書いてくれることになっておりますので、そちらをお読み下さい。

さて、次回公演の討議中、降ってわいたように「名古屋市芸術劇場'91」に名古屋劇団協議会の合同公演が決まりました。演出は、「冒険舎」の木崎裕二氏に決ったものの、レパ選定がおくれています。

劇団の本公演は、現在の劇団事情を考え、女性中心の作品をということで、井上ひさし作「頭痛肩こり樋口一葉」を北原雅子が初演出することになりました。公演日は、レパ選定のおくれで会場のおさえが出来ておらず、来年一月に延期しました。会場は北原演出が変った所でやりたいということで、今会場さがしをしています。

当面は名劇協合同公演へ出来る限りの力をそそぎ参加して行こうとしているところです。

（沢田靖一）

（451　名古屋市西区庄内通四－一六－二
〇五二－五二四－五九七五）

劇団未来

前回、「劇団未来は今年九月で創立してから丸三十年になる」と書きましたが、「三十年目に入る」の誤りでした。訂正します。

さて、春の第三六回公演（第十五回大阪春の演劇まつり参加）、「赤い陣羽織」（木下順二・作、西尾臣示・演出）と「むかしがたり」（宇津木秀甫・作、金沢百合子・演出）は、五月三十、三十一日、六月一日に四ステージ、劇団ワークスタジオにて上演した後、六月五、六日には新装なった森之宮・プラネットホールでも二ステージ公演しました。今回のキャストは、創立メンバーから今年入団した若者までキャリアも年齢も幅広く、また一昨年の「三年寝太郎」に次ぐ民話への挑戦で多少のとまどいもありましたが、各々がせいいっぱいがんばりました。なお、観客数は四百三十八人で、アンケートの結果は比較的好評でした。

秋の第三七回公演（第十九回大阪新劇フェスティバル参加）は日頃から多面にわたって劇団に対し、ご支援、ご協力をいただいている、波田久夫さんを演出にむかえ、「獅子」（三好十郎・作）を、十一月五日～十七日、二十二日～二十四日の六日間、合計十六ステージ、ワークスタジオにて公演いたします。

なお、劇団は来年三月に三十周年記念公演（第一弾）を行うため、今年の第十四期演劇教室は九月までの半年間で、九月十四、十五日に卒業公演「麦踏み」（北条秀司・作、寺下保・演出）を予定しています。（孝治）

（536　大阪市城東区成育一－四－二五
〇六－九三九－五七七七）

劇団やませ

夏が来るかしら？毎日、オホーツク高気圧から吹く『やませ』の所為でジメジメした天気が続いています。

稽古場を使ってのアトリエ公演が明後日に迫り、疲れた体にムチ打っての（三十才以上？）稽古場通いが続いています。

演目は、田畑実作・吉川謙一演出の『カルメンになりたい』。今回は若い女優さん二人（と言っても、実質はその二人しか実働女優はいないのですが……）に活躍してもらおうということで企画したものです。

若さあふれる稽古に、中年団員は圧倒されっぱなし！

秋の公演の題名が変わりました。『我が、内なるラピュータ～前原寅吉の夢』。例のごとく、柾谷の筆は遅れています。果たして、七月中に第一稿があがるかどうか。アトリエ公演が終わったら、全団員で尻叩きに走ろうと話し合っております。　（松浦）

（031　八戸市鮫町下松苗場14－183　柾谷方
〇一七八－三三－一九一三）

劇団群馬中芸

夏が真近かに迫まり、私達の未来スタジオの周囲の松林の中からは、夕暮時になると、ひぐらしのあの物悲しい澄んだ鳴声が聞こえてきます。

依然として全り演の皆様には御無沙汰が続いてしまっていること心苦しく思っています。8月の〝関東・山静ブロック夏のゼミ〟には誰か一人でも参加しようと考えてきましたが、新作の稽古集中期のため、とうとう参加できないことになってしまいました。少人数劇団の苦しい所です。随分前から忙がしい中を準備を進めてきてくだされた事務局や各劇団の方々には本当に申し訳なく思っております。

さて、私達の公演活動状況ですが、この5月、このあかぎ未来スタジオに居を構えてから初めて、ゴールデンウィークに日替りで公演作品を変えた〝こどもの劇場〟公演を行ないましたが、ゴールデンウィークは家族で遊びに出掛けてしまって、劇場に足を運ぶ人は少ないのではないかという予想に反して、連日の満員で、幼児から大人まで沢山の方に楽しんでいただけました。今後の未来スタジオでの公演の持ち方を考えていく上で、新たな経験材料になるものでした。

学校巡演では、これまでも報告してきましたように「バナンペ・ペナンペ昔話」（'90年度斎田喬戯曲賞受賞作品）、「ウサギあにいとクマ旦那」、「うたよみざる」、「おこんじょうるり」の作品を公演してきました。

夏休みに入り、学校巡演はひと休みになりますが、この間に小学校対象作品の稽古に入ります。

作品は、木村次郎作、中村欽一構成・潤色による『まわせ　まわせ　ゆいまわし』です。演出はふじたあさやさんで、木村次郎さんの昔話「瓜子姫とあまんじゃく」、「猿蟹合戦」の二作品を構成した作品です。

ゆいとは共同作業、人と人との結びつきのことで、昔話の原初的エネルギーを捉え直したいと考えています。

9月には未来スタジオで公演の予定です。その折には是非お出掛けください。

（秋山としひと）

（371－01　群馬県勢多郡富士見村赤城山
大河原六二六－四九八
〇二七二－八八－二七〇〇）

京浜協同劇団

特別公演「日本の太鼓」（藤井康雄演出、安達元彦音楽監督）の地元公演とフランス親善公演を成功のうちに終えることができました。全り演の皆様から激励やカンパをいただいたことにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

フランスでは四つの都市で、当初の予定五回を上回る七回の上演を行い、合計四千五百人の人々に見ていただきました。

(1)パリ市　ブローニの森で公開稽古をしたあと、九か国から出演する「シルクロード・フェスティバル」に出演。6月24・25日の夜。

世界文化会館でほぼ満員の七百名。

(2)ペロス・ギレク市　現地のアマチュア楽団と交歓。6月27日昼、同市の会館で上演。観客は満員の四百名。

(3)プレスタン・レ・グレーブ市　6月27日夜、公民館で。人口三千人の村で観客五百名。

(4)エブリ市　6月28日夜、子供たちのフェスティバル（青年文化会館）に出演。観客は満員の三百名。

6月29日昼、地域のお祭りに出演。団地の広場で三百五十名。

同日夜、ロゼス公園の架設舞台で行われた「エブリ・バカンス・フェスティバル」に出演。観客二千名。

六月二十一日に出発、七月一日帰国、劇団外スタッフ若干名を含む総勢三十六名で十一日間の旅でした。各地で大変喜ばれ、私たちもまた感動のしどうしでした。（詳しくは別項をごらん下さい）

一方、国内での地元公演も、ポスターなどができてわずか一か月間のとりくみでしたが、幸文化センターで六月八、九日に行った〝旅立ち公演〟で千五百名、帰国後の七月十三日の〝報告公演〟で千二百名、合計二千七百名の人たちに見ていただきました。

☆八月三、四日に山梨県のぶどうが丘でひらかれる関東・山静ブロック合同のゼミナールでも「日本の太鼓」の一部を披露する予定です。若手も燃え、みんなはりきっています。

☆劇団制作委員長城谷護の自費出版「弾んで弾んで――制作の心」（頒価五百円）も全リ演の皆様に御注文いただきありがとうございました。残りはあと三十部となりました。

（山口あきお）

（211　川崎市幸区古市場二―一〇九

○四四―五一一―四九五一）

劇団名古屋

〝打上げ〟を終り、一人で真夜中の「デニーズ」へ入る。ばかでかいリュックと、研究所生から劇団員一人一人に贈られた真紅のバラを一本、といったいでたちで、案内された椅子に坐りこむ。張りつめていたタガがはずれ、身体も心も、四方に飛び散ってしまいそう。高揚も、虚脱も、疲労も、安堵も、今は話す相手がいない。寂しい登山家の顔つきでコーヒーをすする。リュックの中味は、ホットカーラーやらメイク用品、汗くさい衣裳、小道具の諸々と台本一冊。登頂してきた山は、ニール・サイモンの「思い出のブライトン・ビーチ」。……というわけで、名演小劇場にて、七月十二、十三、十四日（計五回）、名古屋演劇フェスティバル参加公演の幕を閉じた直後です。三月に若手中心の「リサの瞳の中に」を打上げ、すぐこちらの稽古に入り、途中六月に演出の久保田と私が、土屋清さんの「河」（舟木淳さんを中心にした〝河を上演する会〟プロデュース公演）に参加し、十七年振りの舞台を創り、おかげさまで好評でした。

そんなわけで、正味の稽古時間がたっぷりというわけにいかぬブライトン・ビーチ公演でしたが、読んだとたん皆がやってみたい！と思える本に出会えるのは実にまれなことでこれは、そんな戯曲でありました。

一年前の「早春スケッチブック」に続く、普通の人々の人生、カッコイイことはひとつも言わない市井の人々の、私たちと地続きにある喜び、悩み、根元のところに持っている優しさやら、人間としての誇り、平和への願い――、私たちは、私たちの身の丈で、いきいきと演ずることができました。シンと胸に滲みてくるすてきな戯曲でした。

四月に思いもかけず五人の入団者があり、昨年九月に研究所を卒業し、入団した四人、そして今期研究所生が十人と、にぎやかな稽

古場で、七人の登場人物だけのこの芝居を元気に創った次第です。新人たちのエネルギーはあるものの、そこに細かな目配りをし、指導していく中堅層が薄いといった問題点を残しながらでありますが……。

九月に研究所卒業公演。十一月に待望の創作劇、東会議の作家会議にも出席した吉村登さんの「ブラジルの花嫁」（仮題）の公演予定。今、二稿目にとりかかっているところです。七十七号巻頭の、萩坂さんの〈発言〉にあった井上ひさし作品を、こう流行りになる前の時期ではあったが、私たちも三本上演し、どれも好評で観客の数も増やし、そして今回のニール・サイモンと、すてきな戯曲に助けられ――。そんな中で久しぶりに生み出す創作劇、私たちの力が試される時でありましょう。来年は、もう三十五周年なんですヨ。

〝打上げ〟を終り、一人で飲んでいるコーヒー。テーブルの上にはすりきれた台本。三ケ月余、聖書のように持ち歩き、ひまさえあれば頁を繰って道を探してきた台本。本番を終ったあとの台本は役者にとって、複雑で淋しい光を放った、宝ものであります。

（ごとうてるよ）

（456　名古屋市熱田区新尾頭二―二―十九

○五二―六八二―六〇一四）

劇団夜明け

今年、三五周年を迎えた「夜明け」ですが今年二月に「きらめく星座」を上演し、この六月、七月には親と子の劇場「龍の子太郎」（松谷みよ子原作、鈴木弘文脚色）3幕を上演し、この十一月には稽古場公演を行う予定になっており、現在、レパ選に入ったところです。

二月の「きらめく星座」で地元の高校3年生が出演し、親と子の劇場でも、地元の高校の3年生が参加して、太郎役を熱演してくれ劇団としても、大変心強く思っています。

さて、「龍の子太郎」ですが、今年三五周年を迎えた劇団の取り組みとして、初めて脚色を行いました。かなり原作に近い形になりましたが、観客の子供たちに受け入れたのではという感じが、ホールをあとにする子供たちの表情をみて、持てました。

「次にはぜひ、地元に伝わる話を劇化してほしい」という声も聞かれるなかで、ひとつの足がかりになったのでは、と思っています。

（508　中津川市北野丸山

○五七三―六五―四九三七）

黒石演劇研究会

御無沙汰しております。劇団通信を一回休んでしまい、淋しい思いで、七七号を読みました。これからは、皆勤でと心に誓う小生です。

さて近況ですが、6月16日、第四七回公演『スタンドバー・'91』（作・北野茨、演出・角田正美）を2ステージ、観客四〇〇名で無事、幕を降ろしました。

今回は角田正美の初演出ということで、彼の思い入れもあり、札幌の〝フェスティバル〟で「全国区」として認められた北野茨氏が新たに手を加えられた台本を使わせて戴きました。又、照明もチーフは初めてという山口雅子と、〝初づくし〟のフレッシュなスタッフ陣で臨みました。スタッフの意生込みに助けられて、役者も健闘し客席を笑いで包むことが出来ました。

今年下半期の予定は、9月14日に文化座公演『異説津軽あいや節』（作・岡安伸治）の黒石公演があり、黒石劇研も実行委員として取組んでいます。この作品は、岡安さんが毎年のように黒石を取材し、温めていた素材を文化座の鈴木光枝、佐々木愛を得て書き下ろしたもので、県内は黒石公演のみということになります。

併行して、秋は第四八回公演を10月27日、文化会館大ホールで上演予定です。作品は劇団サイドでは決定したところですが、上演許可はこの原稿を書いている時点では申請しておりませんので、発表は次回という事にします。

中々暑くならない今夏、出来秋が心配されますが、熱いハートだけは持ち続けて頑張りたいと思っております。（担当・杉山）

（036―03　黒石市乙徳兵衛町51　加賀谷方　〇一七二―五二―四〇九七）

△編集部より・「スタンドバー」は東会議の「作家会議」にも提出され、札幌での初演とは見違えるほどに改稿されており、その秘密を直接、北野さんに聞きたかったのですが突然の病気のため、欠席されました。ほんとうに残念でした。（モモ）▽

◇　◇

△豆評▽
劇団どろ
『ドリームエクスプレス・AT』

劇団どろは意欲的で注目されている。予定していた創作劇を急に延期しての舞台だから稽古不足が懸念されたが、そんな心配は全く無用、今回もいい舞台だった。

コンピューター制御の夜間長距離バスがブレーキがきかなくなって猛スピードで東名高速道路を疾走、しかも乗客はヤクザをはじめ現代世相を代表するいわくつきの人々という設定だから、それだけで期待できる。

その戯曲（岡安伸治）に応えて、中心の山室一貫をはじめ、総勢十数人の新旧俳優はそれぞれに個性的で、アンサンブルもよく、観客の反応もいい、演出は合田幸平。

舞台は、冒頭に湾岸地帯に派遣された掃海艇のニュースを聞かせ、終幕ではドロップで日米国旗が下がるなど、軍事基地や日米関係が色濃く描かれ、いかにもこの劇団らしい。

そのためか、難を言えば全体に少々理屈っぽく、作品のもつスピードやリズムに乗り切れない。ハイジャックと間違えられる電話の応答、他の車とのスピード競争など、混乱状態を生理的にとらえていないため、笑いはあるが、爆笑にならず、終幕でのショックも乏しかったのが惜しまれる。

また、スノコから吊り下げられたロープを座席に設定したのは面白いが、ハイテク生活の快適なゆり籠から一転して人間を振り回す命綱といったロープの効果を十分に生かすにはそうした様式に見合う俳優の肉体訓練が必要だろう。

欲な注文を述べてはみたが、秋の創作劇に期待を抱かせるに十分だった。（K）

〈モスクワ・レポート　8〉

『牛乳屋テヴィエの物語』

桜井郁子

マルク・ザハーロフ演出『牛乳屋テヴィエの物語』について書きたい。ザハーロフは今モスクワで最もよい仕事をしている一人である。一九八八年演出の『賢人』や、八九年演出のこの『テヴィエ』の切符は、モスクワで最も入手し難い一つである。

『テヴィエ』と聞けば『屋根の上のヴァイオリン弾き』を思い出される向きもあろう。その通り、一九六四年ブロードウェイ発ミュージカルと同じ原作を取り上げているが、こちらは重厚なドラマである。ユダヤ人作家ショーロム・アレイヘムの小説『牛乳屋テヴィエ』シリーズを脚色したのが、売れっ子の劇作家ゴーリンで、私はゴーリンに電話をかけて切符をとって貰った。何しろ合唱隊を含めて四十余人が舞台に乗る大作で、上演回数はそう多くない。「余分な切符」を求めて開演前に押しかける客も少なくなく、観劇当日も次から次と運びこまれる補助椅子や、どこからか忍び込んだ若者達の整理で、開幕がひどく遅れた。

この芝居はミュージカルと同じ題材なのに、一見まるで異った印象を受ける。ミュージカルの主題歌「サンライズ、サンセット」は忘れ難い、私も好きなメロディーだが、あの抒情性に流されてしまったものが、ドラマの世界には生きている。

帝政ロシアの末期、ユダヤ人たちが無権利状態で暮していた頃の事。勤勉で正直で他人の痛み、悲しみを放っておけないテヴィエが、貧乏暮しの中で次々にふりかかる難儀を何とか凌いで健気に生きていく。生活の貧しさと純粋な魂の美しさ、それがユダヤ民族迫害の歴史を背景にして、今日に生きる我々を打つ芝居になった。

原作者ショーロム・アレイヘム（一八五九―一九一六）はウクライナのユダヤ家庭に生まれ、ユダヤ人初級学校とロシア人高等小学校に学び、家庭教師や各種職業に就く中で、二十歳頃から書き始めた。ヘブライ語、ロシア語、イディッシュ語で書いた短編、中編小説や戯曲の数は数百。中でも人気の『牛乳屋テヴィエ』シリーズと『メナヘム・メンデル』シリーズの諸章は一八九〇年代に書き始め二十年間続いた。それまで特定社会にしか通用しない俗語扱いだったイディッシュ語が、この作家の才能のお蔭で、偉大な文学を作る世界の言語の仲間入りをしたと言われている。第一次革命後の一九〇五年、彼は身の危険を感じてアメリカからヨーロッパへ逃れ、一九〇八年と一九一四年一時ロシアに帰国したものの、迫害の危険や病気の為国外へ出て、一九一六年ニューヨークで病死した。作品の主なテーマは故郷ウクライナやアメリカで見たユダヤ民族の生活、彼自身の言葉によると、「私にとっては貴重な、あらゆる明るい面と暗い面、あらゆる嬉しい現象と悲しい現象」を書いた。ユーモアと風刺が特徴とされている。原作にテヴィエのこんな言葉がある。

――「テヴィエよ」と神様はおっしゃいます。「チーズやバターから離れないように。

実現しそうにない金持になる夢など忘れるべし」しかし希望についてはどうでしょうかね。言うまでもなく、人生が辛ければ辛いほど、希望もふくらんでくる。貧しければ貧しいほど、陽気でなくてはなりませんやねえ。その証拠を言ってみろとおっしゃるのですか？このわしがその生きた証拠ですよ！――

（南川貞治氏訳）

早朝から日暮まで牛乳やチーズ、バターを売り歩いて家族を養うテヴィエの暮しは、汗しても汗しても楽にならず、中でも娘たちの結婚で次々に問題が起こる。これに対処するのにテヴィエにあるのはただ一つ、ユダヤの教えから得た知恵のみである。働く人間のオプチミズムと言えば、それこそオプチミズムに過ぎるだろうか。原作の各短編にはテヴィエの娘たちのエピソードが、ユダヤの娘たちの出会うであろう運命の見本の如く語られる。

長女は村一番の金持だが老人の肉屋との縁談をあやうく逃れて、相思相愛の貧しい仕立屋と結ばれる。次女は青年革命家と結ばれ、流刑地に送られる彼に従って永遠の別れを告げて出て行く。読書好きの三女は非ユダヤ人を愛し、ロシア正教会神父に庇護を求めたので、テヴィエは涙ながらに親子の縁を切るという工合である。

この芝居にはショーロム・アレイヘムの書いたもう一つのシリーズの主人公メナヘム・メンデルがテヴィエと対照的なキャラクターとして、終始この一家とからんで登場する。メナヘムは定職を持たず、遠い親戚というテヴィエにも迷惑をかける小っぽけな詐欺師だが、どことなく憎めない人物である。更にテヴィエの妻に好意を寄せて最後まで一家の面倒を見る隣家のロシア人が登場するが、これは原作にない人物のようだ。このテヴィエ一家に襲いかかる黒い運命として、ユダヤ迫害の勢力がある。第一幕終りには、つましい結婚祝いの宴席を打ち壊す一団となって現れ、第二幕のフィナーレには、悪名高い「五月法」――ユダヤ住民全員追放――実施のお達しとなって、テヴィエ一家が父祖の地から追い出される。

レンコム劇場は場数の多い舞台を、日常性を排した極めてシンボリックな装置と照明で処理した。また時に荘厳な正教会聖歌を、時に悲しくも陽気なユダヤ音楽を、また悲痛な鎮魂歌を舞台横パルコニーに配した合唱隊に歌わせて効果をあげた。

お人好しで賢いテヴィエ役にうってつけの俳優レオーノフは、こまやかな心理表現に加えてユーモア味を出していた。

さてここで思い出すのは、映画『コミッサール』でユダヤ人エフィムを演じたロラン・ブイコフである。

一九二〇年代国内戦の最中、身ごもった女性コミッサール（政治委員）を出産まで預るはめになったユダヤ人一家。小さな住居の一室をお偉いさんに明け渡して、一家八人はもう一つの部屋にぎゅう詰めになって寝る。貧しいブリキ工のエフィムは、砲火を避けた地下濠で脅える子どもたちの為に歌い踊る。父親のおどけた姿に子どもたちも和んでいく。その悲しくも明るい情景に、この民族のしなやかなヴァイタリティとでも言うべきものを感じた。あるいはこういう受取り方は誤っているかも知れないが、レオーノフとブイコフ二人の俳優には共通した表現がある。因みに『コミッサール』はユダヤ人を扱った為か、一九六七年に制作されながらオクラ入りになって、八七年解禁なった映画である。

長年タブー視されて来たユダヤ問題は、今日のソビエトでも大きい。ロシアの文化芸術界で幾多の功績あるユダヤ人は居たし、現に活躍している人が多い。然し差別意識を公然

と標榜する団体もあり、私の知人の中には「万一の場合に、ポグロム（集団虐殺あるいは暴行）の危険を感じる」という人もいる。その一方でこの『牛乳屋テヴィエ』などが評判を呼び、ユダヤ人画家シャガールの美術展がもてはやされる状況にもなっている。

モスクワにはもう一つ、ユダヤ問題を扱った為六十年間演劇史から消えていて、一九八八年復活上演された『夕焼け』がある。こちらもユダヤ人作家イサーク・バーベリ（一八九四―一九四一）がユダヤ人生活を描いたもの。革命前のオデッサが舞台で、馬具製造業者メンデル・クリークとその息子たちをめぐる商人社会を扱った年代記的作品、『テヴィエ』と好一対をなしている。バーベリはオデッサの商人の子として生まれたが、革命後は民衆の間に身を投じ、後に短編集『オデッサ物語』などに結実させた。一九二八年書いた『夕焼け』は第二モスクワ芸術座で上演されたが、時代の急転で歴史から消えた。作家自身もいわれなき迫害を受け、一九四一年強制収容所で亡くなった。マヤコーフスキイ劇場の『夕焼け』は回り舞台を活用し、愛欲・陰謀の渦巻く人間社会を映して、強烈な色彩を感じさせる芝居になっている。

『牛乳屋テヴィエの物語』
右がテヴィエ

レン・コム劇場
右端がテヴィエ

劇　評■

『雪やこんこん』雑感

――劇団「演劇街」の誕生――

仲　武司

山口県に誕生した劇団「演劇街」が5月に徳山・宇部・山口の三会場で華々しく旗揚げ公演をした。

昨年4月に劇団を創立。一年がかりの準備を経ての第一歩である。

これまで徳山で活動してきた「草の実」（岐阜の演劇フェスティバルにも出演）が、この数年、劇団員の減少で活動が停滞していたがこれを機会に新たな集団づくりを模索。代表者であった下村清一、元「はぐるま座」矢野弘、元「若者座」岡田和善らの参加で結成。劇団代表は矢野弘で、昨年8月全り演西会議に参加を決定した集団。

作品は、ご存知、井上ひさしの「雪やこんこん」。演出・下村。演出補・装置に矢野。舞台監督・岡田の組合せである。

話は、昭和20年代後半。北関東、湯の花温泉、湯の花劇場なる芝居小屋の楽屋が舞台で旅廻り中村梅子一座の悲喜こもごもの物語りである。

12月も半ばの吹雪の夜。かつては18名もいたが、今ではストリップ女剣劇に押された一座が、ようやくたどりついたのがこの小屋。座員のトンズラ、衣装の持ち逃げとご難つづきで、残るは座長他5名。その連中もすきあらば逃げ出す算段の毎日。そこで座長梅子の一計で、役者の経験もあり小金を持つ小屋のおかみ・和子とかたらい、和子が梅子の実の娘であったという筋立てで、涙の再会を演じて見せ、これで一座に金主ができたと、座員の動揺のくい止めを図る。

幕開き、古びたレコードが同じところを回転し、「嘘かマコトか、嘘かマコトか」と歌詞を繰り返すことで暗示する様に、話は一転二転、本当は和子を一座に加えるための狂言であったという、ややこしい仕立てが筋。

調子のよい七・五調の会話や即興的なセリフまわし。口立て芝居の稽古風景など、旅廻りの劇団特有の世界が楽しめる。

同時に、観客を嘘か真かの世界に引き込み、手玉にとり、異化をねらう井上作品ならではの話である。

一座をひきいる女座長中村梅子には、元はぐるま座の山口菊子。例のはぐるま座騒動の時、いわゆる中国派と闘い、追い出された女優さんで、20年ぶりの舞台とか。さすが昔とった杵づかで仲々の貫禄。この人あっての企画ともいえそう。終演後、目に涙した彼女をみて、改めて人間の歴史の片鱗にふれる思いであった。

この役と双璧で一座の頭取・勝次役を、これも元はぐるま座の正木真吾が演じている。勝次は座長の片腕として座を取仕切るが、役者上りの古風な人物という役柄。この前、宇部の合同公演「捲きやぐら」の時、私が「演劇会議」でその巧者ぶりを評した人。今回は本名で出演していたので、はじめは別人かとも思ったが、キャラクターに記憶があり、たしかめるとやはり同一人物だった。

今一人、同じく元役者で今は旅館の番頭を兼ねて、楽屋番から下足、ビラ貼りまでする庫之助の役に、元、草の実、弘中健児が演じている。

この三人が、各々役どころを押え、舞台をひきしめリードしていた。

他の登場人物に、国鉄労組出身で、女形の明石金吾（柳沢悟）。新派からの駆けこみ者で二枚目の秋月信夫（大城淳）。座長に憧れ女工より転身の娘役、三条ひろみ（木田育花）上野駅から一座について来たという、お囃子方とは名ばかりの効果係の光夫（広島友好）。そして小屋のおかみ、佐藤和子（小林美樹）は、五年ぶりの舞台参加とか。女中のおちよは日変り出演で（椎名奈々美）（天乃蓮華）が演じ、それぞれ役柄を心得て無難にこなしてはいたが、三人の座員はもっと芝居そのものを楽んでほしかった気がする。あるいはそこまでの余裕がなかったかも知れない。総じて若い女性陣のセリフが感情が先ばしり、早口になると不明瞭になるのは今後の課題であろう。

俗にいうドサ廻り劇団の世界だけに、口立て芝居の稽古で、その抑揚や所作のきまり方など特有の表出と、加えてベテラン役者と素人あがりの役者との落差を含め、稽古風景の面白さがあり、そのために計算された演技が必要であろう。

井上戯曲はこの数年、全り演でも多く上演されている。それほど秀れた作家であることにはもちろん異論はない。

彼が「新劇に批判が集る様になったので、逆に新劇にも継承すべきのが多いと言い立てる様になった」と何かで言っていたが、この辺が、まさに私たちが共感する土壌でもある。

たゞ、私の知る範囲で、戯曲の面白さにもたれ、時にはいわばナチュラルな手法の舞台が少なからずあり、気になっていた。

発想の奇抜さ、徹底した調査、その構成力に裏うちされた芝居の楽しさは、演じる側の計算された切れ味によって、井上作品の世界が見えてくるといった按配で、随所にあるどんでん返しや、次の展開の一瞬の、いわばかけ引きにも似た間など、観客を自由奔放にひきまわす強さが必要ともいえる。

〈雪やこんこん〉は、彼が例の一身上の問題に苦悩し、筆もすすまぬ状態から「私が演劇修業をはじめたストリップ芝居や地方廻りの大衆演劇に戻って、またやり直した」ところから生れた作品だともいっている。

劇中、沈滞する役者たちの前で、芝居見物の老婆に変装した梅子が「芝居を見せてくれ……一年かかって銭をためたのだ」「芝居をみるとシワがのびる、腰がのびる、寿命がのびる。いい芝居、みせてくれろ」と祝儀に小銭を撒き、和子らが心を打たれるシーンがあるが、まさに、老婆の口をかりた梅子の芝居えの思いが、そのまま井上の演劇観として、ずっしりと伝わる。観客の中には、梅子が老婆に扮しているのに気付かなかった人もいた様だが……。

三度笠を手に歌謡曲に合せた踊りの振付けなど、大いに笑えたのは、日舞の藤間出の若松金扇の指導に負うところが大きいのだろう。

ラストの、開幕直前の楽屋で、全員が客席に向う形で化粧前に座り、口立て稽古をしながら、顔の白ぬりをする手ぎわの良い早いテンポが秀逸で、脚本指定にないだけに演出か振付けの指示か聞きもらしたが、きわだって面白かった。

装置もさびれた小屋の楽屋を感じさせ、さすがベテランの矢野の仕事と、貴重な存在を再確認した次第。

効果など、まだ工夫のいる場面もあり、雪で小屋の木戸が倒れて公演不能となるあたり、緊張する一瞬が、効果音によってもたらされるだけに惜しかった。

劇評■

変えること、変わらないことなど

―中部ブロック、春～夏の上演より―

栗木英章

(1)

六月はじめ、東京に住み始めた子供のところへ行ったついでに、上野へ出かけた。新幹線の東京乗入れを前にして、アメ横の喧騒もどこかしら寂しい響きをもっていたが、偶然足を踏み入れた上野公園では様々なパフォーマンスが演じられていた。その中の一つ、外国の青年が顔を白く塗り、「私を動かして下さい」という小さな看板の横でじっと立ち続け、箱へお金を入れてもらうと、機械仕掛けの人形のようにパントマイムで動くのに魅せられた。無表情のようでいて、遠くを視る哀しさと、近くの幼児を看るやさしさに、いつの間にか一杯の人だかりができた。派手な音楽や踊りよりも、行きずりの人々の心を確実に捕えていたと言える。話は少しとぶが、このところ、身近な劇団から退団者が出たり、出ようとしてぶらさがっている例をよく見聞きする。双方の言い分があるだろうし、あれこれの推測は避けたいが、どうも狭い意味の己れにこだわったことが多すぎるように思えてならない。スタニスラフスキー「俳優と劇場の倫理」を持ち出すまでもなく、悪口、中傷、嫉妬……から生まれるものは憎しみ合いだけである。民主主義の根幹にかかわることならともかく、やめる、やめないの基本は個人的なことであろう。去るときは静かに、そしてあくまで去ったあとの創造で歴史の判断を仰ぎたいものである。些事にこだわる前に、公園に一人立ち、無言の語りかけをするといい。たいていは、恥ずかしい自分が透けてみえてくるだろう。もちろんかく言う私も例外でない。

さて、先号で紹介させていただいた丸子氏の事故後は奇跡的回復に向かい、あちこちの劇場で顔を合わせるようにもなったが、まだリハビリ中とのことで、もう一度代役をつとめさせていただく。

(2)

先号から間がないので、これから上演する劇団も多いが、とりあえず、締切日までの判明分は次の通り。

●劇団すがお『キネマの天地』4／13～14
作／井上ひさし　演出／若葉正則
於すがお稽古場

●岡崎演集『おれたちは天使じゃない』
6／1～2
作／矢代静一他　演出／浅井克彦
於岡崎市せきれいホール

●劇団演集『泰山木の木の下で』6／6～9
作／小山祐士　演出／浦はじめ
於名演小劇場

●劇団夜明け『龍の子太郎』
6／22～23・7／7
原作／松谷みよ子　脚色・演出／鈴木弘文
於中津川文化会館ほか

●劇団名芸『オズの魔法使い』7／6～7
脚本／栗木英章　演出／佐野秀明
於名芸平針小劇場

●劇団名古屋『思い出のブライトン・ビーチ』
7／12～14
原作／ニール・サイモン　訳／鳴海四郎
演出／久保田明　於名演小劇場

その他、もと劇団名古屋で東リ演の会議にもよく出席された地元俳優の舟木淳氏が、その教え子たちと共に『河』（土屋清・作）を久保田演出で上演し、好評を博したこと、はぐるまの新装ファミリー劇場『十一匹のネコ』が目前にあることなど心残りは多々あるが、今回はすがおと演集を重点にとりあげる。

(3)

なわ小劇場No.9には、フェスティバルの世話役などでお馴染みの、加藤代表が役者で出る話題も加わって、名古屋からも何人か駆けつけた。劇団名古屋の矢野、谷川両氏に感想を求めると、「全体に女優が印象的、面白くまとめてあった。しかし、ケイコ不足のところも多く、素にもどっているように見受けられる場面があったのは残念」とのことである。

〝蒲田のスター女優、松井チエ子が謎の死を遂げてから一年。築地の東京劇場に、事件に関係の深い四大スター女優が呼び出された。四人はそれぞれチエ子殺害の疑いが！〟とチラシにうたわれたこの『キネマの天地』を、若手はどう受けとめたのだろう。名芸の清水秀樹に感想文を寄せてもらった。

〈すがおのケイコ場を知っているので、狭い空間をどう使うのか、とても興味があった。客席も決して広いとは言えないが、何とか詰め込んで開幕。二階を楽屋にしていたのだろう、役者の出入りは全て階段のある上手側、少々観づらいときがあった。

小倉（加藤武夫）という映画監督が新作の打合せのため四人の女優を集める。この四人（山田五月、伊藤みえ、南口奈々絵、加藤直美）の登場ぶり、そして一人ふえる度にその立場（先輩、後輩、売れ具合）からくるしがらみというか、やりとりが大変楽しかった。しかし、女優たちの会話と、小倉監督、島田助監督（小林龍也）のやりとりがラップするところなど、切り替えが非常にあいまいで、ついため息が出そうになる。犯人を追求していく辺りも緊張感が欲しいのだが、加藤氏の素の人柄も災いしてか物足りない。

突然一人の刑事（石垣正司）が登場し、追求劇を演ずるが、実はこれが監督の仕組んだ女優教育講座。つまり先輩だから、売れてるからということで天狗になり、役者間の交流が深まらなくては困るので――というわけで

舞台全体の流れは、一転二転する嘘とマコトの切りかえのメリハリが少々不鮮明ではあるが、下村演出はよくこの大芝居をまとめていたのではないか。随所に観客の拍手もあり成功した舞台といえよう。

ともあれ、出演者を集めるのにオーデションも試み、遂に旗揚げ公演ができたその意気に喝采を送りたい。

山口・正木両ベテランが「セリフが覚えられなくて…」といいながら、存在感のある芝居で、改めて役者の年輪の大事さと同時に、まだまだ私たちの周辺にはかくれた人材が居ることを再認識した。

劇団代表の矢野弘は、一都市だけでなく、今後は山口県下を視野に劇団活動を考えたい、といっていたが、ややもすれば稽古場や小劇場にこもり、人が集まらない、劇団員がいないのなげき節の多い昨今、「演劇街」の新たな出発は刺激的であった。

ちなみに観客数は、徳山公演七〇〇名。宇部公演五〇〇名弱。山口公演五〇〇名。
（5月18日、山口教育会館の観劇）

ある。作品と舞台を通して、役者という仕事は男より女の方が向いているのかな、という思いがした。終幕後の合評会で、幕切れに話が集中した。刑事、つまり売れない尾上という役者が一人大芝居を続ける傍で、助監督は「次の映画に使ってやりましょう」と言うが監督は「駄目駄目」と去ってしまうのだが、多くの人は「使ってもらい、丸く納まるように見えた」と受けとめていた。私は演出意図通り「使ってもらえない物哀しさを出してほしかった」という哀切を感じた。しかし、全体に伝わらなかったのは、演出意図のみ先走りしていたのか、役者の力量不足か。そういえば合評会でケイコ不足と弁解していたが、それは少々さみしい話である。∨

と、まぁ他劇団のことは色々言えるわけだが、公演後「すがお」から御礼のハガキが届いた。ヤングがワープロでうった、そのさわやかな文面から、加藤氏譲りのやさしい気配りを感じ、「すがお」の集団性に心うたれた。次回を期待したい。

(4)

矢代静一作『桃花春』（「海燕」六月号）の最後に、戦争でつらい目にあった「姉」の痛切な「戦争はいやです」という言葉を受けて、次のような台詞がある。「姉さん、僕は戦争中、要領よく生きたように、いまも、日本のこのかりそめの平和の中で身勝手に生きています。恥かしいかぎりだ」

演集『泰山木……』の演出・浦はじめ氏にはこのような思いが、もしかしてあったかもしれない。民芸公演直後に、演集らしい姿勢で、この作品に再び挑戦したことへ敬意を表したい。先号本欄でも紹介させてもらった辛口評の地元作家、熊谷昭吾氏がすでに愛知民報紙上で次のように評を締めている。

「…悪条件とたたかいながら、被爆者の悲劇を、感傷に流れず、また単に歴史的過去としてでなく、現在形で観客にアピールする難題に取り組んだ。ハナ役の若尾はむしろ、明朗な童女のような役作りでチャーミングに大役をこなし、木下刑事役の沢田も控えめな〝受け〟の演技でまずまずのでき。さらに劇団がパワーアップして、反核反戦劇を連打してほしい」と。

また平和運動に長く関わってきた名芸の鈴木は、歴史的つながりの中で次のように論ずる。

「小山祐士が作品を発表したのが、一九六二年一月号「新劇」、六一年九月、政府、ソ連核実験再開決定に抗議。四日後米にも再開とりやめ要請。十月衆院・参院で核実験禁止を決議（ソ連の核実験を巡って社会・共産の評価分裂。原水協分裂のきっかけとなる）

六二年八月、原水禁世界大会、社会党系退場。翌年から分裂が固定化していく。

六二年十月キューバ危機。六三年、六四年民芸『泰山木…』を上演。

七二年五月、沖縄の施政権返還。同十二月第三十三回総選挙。（自民二七一、社会一一八、共産三八、公明二九、民社一九、無所属・諸派一六）　七二年、七三年、民芸上演。

演劇の鑑賞態度としては問題のあることかもしれないが、原爆、ヒロシマ、ナガサキをテーマにした芝居を見るとき、現実の政治と上演時点の国民の関心や意識がどんな状態にあるか考えてしまう。土屋清は『河』を、宮本研は『ザ・パイロット』を上演時点の状況に合うように何度も改作しょうと努力していたと聞く。『泰山木…』は緻密で反核の願いを静かに力強く訴えている作品であると思うが、少し前に湾岸戦争の進展をお茶の間で見守らざるをえなかった私達には届くものが少なかったのではないだろうか。」

この作品を、今上演したこと及びその成果

には賛否あるが、いざ批評しようと思うと難しい。その上、近し過ぎる人たちの舞台だ。下手なことを書くと、一緒に呑む機会も失いそうな不安（？）も感じるが、普段この欄を演集の丸子氏が担当しているせいもあって、老舗演集の舞台評がほとんどないので、敢えて論を進める。乱文はお許しいただきたい。

いつもながら折り目正しい舞台に大きな欠陥はなかった。奇をてらうことなく、戯曲の中味を伝えようとした姿勢から、反戦平和の祈りにも近いメッセージは客席に届いたとみえるが、しかしもう一つもどかしさを感じたのも確かだ。これは、民芸のパンフに作家の高井有一氏が寄せた随筆〝旧弊な観客の弁〟文中にある「一点のもどかしさ」と同種のものかも知れない。テンポというか、舞台のリズムが躍動していない。例えばおハナを演じた若尾（お降さん）が、セリフの一つひとつを吐く前に必ず口を結んで均一な間をとる繰り返し、あるいは好演した木下刑事（沢田）が、髪を垂らした女（ダブルキャストで私が観た日は越山）のケロイドに接吻して、どうしょうもない憤りと哀しさを切ないまでに描いた場も、結局演出の手の内と、明かりが消えるという舞台の決まりの前に行儀よくストップして、突き抜けていかない静止画なのである。小使（加納）も、いい役処なのだが単調で陰影が浮かばず、一連の楷書的演技の中で、逆に客演の出前持ちの青年（和田）の自由さ、器用さ等が妙に印象に残ってしまう。

かって演集の舞台は、何より幕の開いた瞬間の装置や照明、効果といったスタッフの豪華なハーモニーから舞台に引き込まれたものだが、簡素化された装置などからは、狭い舞台（名演小劇場）の制約は感じても、象徴化の鋭さは稀薄だ。

私は敬愛する演集の舞台を観つつ、その日働く工場の昼休みに繰り広げられた職場対抗のバレーボール試合の一シーンをふと思い出した。サッカーの補欠で球拾いしていた私と違い、かってエースアタッカーとして活躍したSのスパイクは、ことごとくネットに引掛かっていた。「こんなはずでは――」と首をかしげるS。あこがれつつ共に青春をすごした一人として、現場で物作りに汗油し続けた彼の歴史を思うとき、安手なヤジを飛ばす若手の横っ面を張り倒したい衝動をかろうじて抑えつつ、なぜか涙が止まらなかった。

別に、今回の舞台のプロセニアムアーチをバレーコートのネットに短絡させるつもりはない。でも、しかし、時の流れは残酷である。変わらぬつもりでも、時代の流れに対して、相対的に変わらざるを得なくなる創造者の宿命というものがあるのではないだろうか。

時代と共に呼吸するナイーブさと鋭さが、逆に変わる時代を照射する（変わらぬ）姿勢を支えるのではないか。

どうも〝もどかしさ〟に関連して、何か私は大きな思い違いをしているかも知れない。

しかし、はぐるまや京浜などと並んで、全リ演の先頭を走り続けてほしいと願う私たちの気持は、いつも演集に力強くしたたかな像を描いている。〝もっと、もっと〟と。感動ともどかしさが入り混って、ひとりよがりに勘違いしているかも知れない批評の検証は、次の舞台に求めたい。ペンの上すべりはご容赦を。

(5)

おわりに――ときて、依頼した劇評が仲々届かない愚痴を書き、特に文字を書かない若手に毒づく思いで締めくくろうとしたとき、速達便が届いた。兄弟劇団の公演をほとんど観ようとしない（傲慢なのか怠惰なのか忙しいのか?!）はぐるまの内田薫氏から、岡崎演集『おれたちは天使じゃない』の嬉しい感想

が届いた。原稿締切り前日なので、そのまま紹介させていただく。

「雨の中、岡崎せきれいホールへ向かった。ミュージカル『おれたちは天使じゃない』は、キャパ六百人程の会場に約四分の三の観客を集めて上演された。ご存知の方も多いだろうが、この芝居は、三人の脱獄囚が逃げ込んだ別荘で、自殺しょうとした親子を助け、成り行き上、この親子のために一肌ぬがなきゃならなくなる物語である。冷酷非情なワルが末娘に天使と思い込まれ、人助けをしなきゃならなくなるドタバタコメディである。そんな面倒さっさと振り切って逃げちゃえばいいものを、逃げられないのが人のよさなんだろう。

悪党は好きだ。芝居の中に出てくる悪党はどこか憎めなくて好きだ。一生懸命ワルぶっているドジでマヌケで気のいい小悪党はもっと好きだ。悪役ではなく悪党。で、このお話しの中に出てくる脱獄囚なのだが、残念ながら小悪党としての魅力があまり感じられなかった。〝人を殺している〟〝脱獄してきた〟というスゴミが感じられない。何が何でも逃げ切ってみせる！と言葉では言っているけれど、追われている者のせっぱ詰まった迫力が伝わって来ない。これが残念だった。〝自殺しかけている人間を見殺しにはできない〟という良心と、〝無駄なことには関わるな〟という本音の部分でもっと揺れ動いて欲しかった。〝逃げよう、でも助けたい〟と揺れ動く気持がこの物語の基本であり、そこでドタバタする面白みもあるのだが、全体にのんびりした印象だった。最初っから気のいい三人組で登場し、それはそれで演出なのかもしれないが、もっとスリリングな場面や怖さがあっても良いと思った。

コメディとしてはよく仕上がっていたと思う。例えば警官が別荘にやって来るところでは、右往左往する脱獄囚たちの動きの面白さがあったし、なんとかごまかしきろうと四苦八苦するのも楽しかった。」

西三河、岡崎の地で三十年余地道に活動し続けている岡崎演集の次回公演はぜひ観に出かけたいと思った次第。

さて、次号からまた丸子氏の労に頼ることになると思うが、それに甘んずることなく、どしどし劇評や感想が本誌やブロック毎の観劇評などに集中することを願って、二度の代役をひとまず降板したい。一読感謝。

〈大変おくれてきました〉

□劇団夜明け
「龍の子太郎」
原作・松谷みよ子
脚色・演出　鈴木弘文

劇評■

解釈力よりも想像力を！

―劇団大阪「エリアンの手記」の舞台づくりに触れて―

小松徹

山崎哲の作品を劇団大阪がとりあげるというのは、これまでのレパートリー系列からみると意外とも思われるが、そこまでレパートリーの枠を拡げて試行錯誤を重ねていこうとする快挙だと、私はむしろ拍手を送りたい。

しかも20周年企画No.1として提出されたこの作品を強力に推したのは、主として若い人達であったと聞いた。出演者も若い人達によって占められ、演出だけが経験豊かな堀江ひろゆきという、思いきった布陣であった。

「エリアンの手記―中野富士見中学校事件」という題からも分かるように、この作品は、担任教師を含めての《葬式ごっこ》を頂点とする、いじめによる中学生自殺事件として全国的にも大きな反響をよんだ、現実に起った事象を下敷に書かれた作品である。

マスコミ報道は当時、主として学校内部のいじめ、それを見逃すどころか加担してきた教師たちが引き起こしたという視点から、とりあげられたように記憶している。が、事柄はそう単純ではない。離婚一歩手前であがいている両親の生きざま、それと向かいあっている中学生、祖母に妹、それを見ている近所の人たち―いわば歪んだ地域の問題等々、一人の中学生を自殺にまで追いこんだ要因は、複雑に絡まっている。

当然作者はそのことに目を配り、広角度で捉えようとしているし、いじめる側、いじめられる者との関係も、単純な加害者被害者としてはもとより見ていない。最初と最後に宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の、ジョバンニがカムパネルラの入水を知らされる以降の部分を組みこむことによって、自殺した中学生を中心とする小宇宙を大宇宙に拡げ、観客にむかって、この事件が内包する**にんげん生活**が何によって成り立つかという問いかけをしているように、私には思われる。

登場人物はみな善意の人だ。それぞれに、むろん弱点は抱えながらだが、懸命に生きようとしている。が、歯車は噛み合わない。どころかそれぞれのずれが、軌道修正をしようとすればするほど、輻輳し、拡大、歪曲されていく。善意が他人を傷つけ、傷をいやそうとする行為がさらに傷口を拡げ、人間を鬼に変える。

そういったことを作者はしかし、必ずしも登場人物の心理を追って描いてはいかない。だからその要因となった事実を追っていく、つまり分析していくだけでは分からなくなってしまう。それがこの作品の欠陥だ―とは問違っても思わない方がいい。現実にまっとうに立ちむかいながら、迷いに迷って生きている人間なら、理窟化（？）しないでも共有出来る不安や欲求をもつ人間として、描きこまれているのだ。

そこで要求されるのは創りてたちの想像力だ。それが観客の想像力を挑発してくる。決して解釈力ではない。

そのことを実証してくれたのが、中心人物ともいうべき男1―ヒロフミを演じた平山現君の演技だ。抜群であった。

最初無言で登場して来るのだが、その瞬間からその〈異常〉な身振りが私を捉えた。しかしその〈異常〉さは、拵えものではなく、彼が抱える矛盾――というよりも、まっとうに生きようとする時に立ちはだかってくるもの、そのものと自分との間に起こる苦悩という苦悩を、あますところなく吸収しようと想像力のすべてを駆使し、拡げていった末につかみとった〈異常〉さであるが故に、観客の想像力を挑発し、触発するリアリティを持つのである。

作者の率いる『転位21』の舞台を私は観たことはない。が在関西の複数の劇団が演じた山崎作品による舞台（複数）の場合、いずれも内的なものを伴わないデフォルメで薄っぺらな固定した印象しか与えられなかった。

が、今回ヒロフミを演じた平山君の演技は、そんなものとはまるで違っていた。誠実さ故に自分自身を追いこみ、拡大深化していく自己矛盾の中で、懸命に生きようとすればするほど歪んでいく一人の中学生を、凄絶なまでに舞台空間に存在させていた。

演出の堀江君に聞いた話だが、彼の役への接近のしかたは実に具体的で、丹念であったという。ヒロフミが、どうしようとして何にぶつかり、それを越えようとして如何に考えをめぐらしどう動いたかを、戯曲に沿ってひとつひとつ当たっていったという。くり返し言うようだが、そこで働いたのは解釈力ではなく想像力であったはずだ。公演終了後平山君は、まさに「精も魂も尽きはてたようにがっくりと来ていた」とは、これまた堀江君の言である。

母親役を演じた中田小百合さんの演技も秀逸であった。自立する女性として生きようとする努力が、夫との間の矛盾を顕在化させ、息子との間に隙を生み、それを埋めようとする努力が、却ってまた息子だけでなく自分をも傷つけていくといった複雑な女を、やや単調な部分を残しながらも、演じきった。

この二人（だけではないのだが）と比較して、どうしても触れておかねばならないことがある。教師役を演じた上田啓輔君の演技についてである。

彼の演技に初め目を惹かれたのは、確か2年前であったと思う、ニール・サイモン「ブライトンビーチの思い出」のユジーン役だった。のびのびと達者な演技は好演で、大方の注目を浴びた。しかしその時私は、技術主義に走る危険性を感じ、堀江君たち数人の人に杞憂に終ればいいがと話したのだが――残念なことに今回の演技で、杞憂に終らず現実化してしまった。

彼はおそらく賢い人なのだと思う。細かく役を分析し、表現についても工夫し考えていることはよく分かるのだ。しかし舞台上で、接する他の人物――世界とその場で具体的にかかわらないのである。自分が解釈し、考えた内のりの中側だけの演技なのだ。巧（好ではない）演ではあるが、観客の胸につきささってはこない。惜しいなあと思う、才能が感じられるだけに。

これはもちろん、まず当人の問題ではあるのだが、劇団全体が、とくに演出にあたる人や先輩俳優の諸君が、先号の「島」の演技について私が触れ提起したこととも併せて、真剣に考えて欲しいことなのだ。そうしないと今度の舞台の成果を劇団全体のものとして、舞台の質を変化させ、たかめていくことにならない。それでは虚しいではないか。

祖母役の岡本徳代さんの演技も、想像力に欠ける。解釈をなぞってしかいない。導入部で彼女が孫娘――ヒロユキの妹に読み聞かせる「銀河鉄道の夜」のくだりが、一向に観客に届かないのはそのせいだ。岡本さん自身のアィデンティティと「銀河鉄道の夜」が殆どクロスしていないのだ。あれでは百万回稽古を積んだところで、観客ともクロスしない。

したがって、舞台は大宇宙へと拡がらなかった。

紙面があれば、登場したすべての人について触れたい。そんな気持を起こさせる、若い人たちの知的エネルギーが結集した舞台であった。アンケートの意見をあまさず集約したものを読ませてもらったが、能動的な意見が数多く集まっている――それがこの公演の成功の証拠だ。

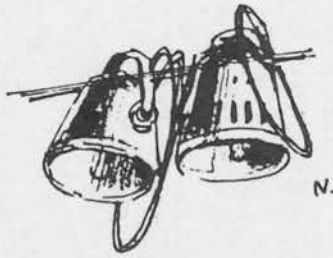
「歴史の長い劇団に老化現象が見られ、若い人が育たない」ということをよく聞かされて来たが、なかなかどうして、今まで述べて来たように、劇団大阪の今回の舞台が若手俳優輩出を実証している。

また劇団未来でも、昨年秋の「アディオス号」で、複数の若い俳優たちが、のびのびとした存在感のある演技を示し、可能性に胸を躍らせてくれた。

こうした若い人たちを、これまでの長い歴史を背負って来た人たちと力強くドッキングさせる可能性が見えてきたことは、実に嬉しいことではある。

すべての人にこの現象への注目を／今後に大きな期待を／と呼びかけたい。

（6月1日所見）



〈BOOK〉

中島陸郎著

『阿片とサフラン』

――演劇プロデューサーという仕事――

大阪の演劇界では通りすぎるほどの名前の人でも、遠くはなれていてはわからない。

著者の名前とその特異な文体に接したのは「演劇会議」七三号での、劇団京芸の「塩祝申そう」の劇評においてであった。これは一筋縄のひとではあるまいと思った。誰かに聞くということもせずにいたら、突然、「著書」がとどいた。B6判三百頁。

エッセーというよりも、オレンジルームを居城にしての、模索と挑戦、成功と失敗をくりかえす告白的自伝としてよませる。今や盛名を馳せている小劇場作家たちの若き日の姿も出てくるし、エピソードもふんだんだ。中島陸郎氏とは、藤沢薫、仲武司、熊本一、又川邦義といった皆さん、御存知の仲と思えるが、ついぞきいたことがない。

発行所　長征社　定価　三〇九〇円

神戸市中央区北長狭通五―八―六

〇七八―三七一―六四九一

劇評■

観劇雑感

―東京芸術座・アグア企画 青年座・東演・蒼生樹―

萩坂桃彦

「銀河鉄道の恋人たち」（東京芸術座）

この戯曲が初めて読者の前に現れたのは一九七一年四月号の『テアトロ』である。丁度今から二十年前になる。その前年の七〇年十一月二十五日には三島由紀夫の切腹というようなことがあったりで、世情は騒然としていた。八月の原爆記念日にむけての、原爆反対の平和運動も、原水協と原水禁の、別々の行動になったりした。

この作品にも当時の平和運動の様相が投影していて、単純でストレートな反原爆作品になっていない。かえって、そうした運動に出ている分裂や屈折、或は抗争を越えたところに作者の祈りがこめられたとみることができる。その止揚した思想、創造性が、二十年経った現在も、この作品を古くしていない原因になっている。

ストーリイはよく知られていると思うのでくどく書く必要はないが、その街（ヒロシマ）の中心地の一角に『銀河』という喫茶店がある。

その『銀河』で知り合うことになった若い一組の男女。五郎ととし江である。

五郎は印刷工であるが、「星観測」の趣味はほとんどキチガイにちかい。とし江はレコード・ショップの店員で、シューベルトやベートーベンの音楽が好きだ。店に来た少女の客が買いたくても買えないのをみて、自分でお金を出してやろうかと考えるような気持のやさしい子である。

五郎の友だちに太吉、とし江の友だちにふみ子というのがいて、このふたりがカップルになって、若い仲間たちをともなって『銀河』にあらわれる。このあたり、意識的に〝青春ドラマ〟になっている。

ドラマを進行させるのは『銀河』の主人。彼は五郎の就職のさいの身元引受人にもなったりしていて、五郎が幼時に、広島の原爆で両親を失い、孤児になった過去も見てきている。その五郎のからだが原爆症におかされてきていることも知っている、そして、五郎ととし江のはじめての恋、初めて人生の喜びを見出した幸わせを心から祝福したい気持とまちがいなくおとずれる五郎の死、による悲劇もわかっているという、複雑な心境である。

この〝主人〟は作者の気持の代弁者である。ナレーション、述懐、観察と、どこか喫茶店の主人をこえて哲学者めいているのが気になったが、この役の川副博敏は、よく、そのむつかしいところをつつみこんで、抑えた淡白さがよかった。

五郎（光井ひでひこ）ととし江（桜井秋子）は、その時代のもつ夢へのひたむきさがよく出ていた。五郎が星空を見上げて、無限大の宇宙の神秘を語る美しいひとコマは客席の心をつかむ。そして、彼が原爆症による自己の命数を知っていて、それでも人を愛する資格があるだろうか、と『銀河』の主人や病院長に迫るところは、さらに感動的である。

後半（第二部）は、五郎を失いたくない、いつまでも五郎と一緒にいたいというとし江が、五郎の死に遭って昏倒する、そのとし江の「夢」として構成される。

五郎ととし江を乗せた「銀河鉄道」の旅である。ただし、とし江の乗車券は、五郎と供に果ての果てまで行くことのできない周遊券で、第三次元（地球）に戻ることが条件になっている。つまり、五郎の死のためにもとし江はひとり生きる、五郎の悲劇の因を洗うためにも、その悲劇の根源とたたかうことで生きろ、と作品は結んでいる。

ぼくは二十年前の 劇団民芸の初演（たしか宇野重吉の主人、米倉斉加年の五郎、樫山文江のとし江だったはずだ）そっくりのものをここで期待する気持は毛頭ないが、ただあのとき味わった作者のやりきれない一種の悲しみ、それを基底とした怒りといったものが東京芸術座の舞台では、きれいに洗われていることに気がついたことだ。そういえば、広島における平和運動の混濁や、「銀河鉄道」の乗客となった被爆者などの描写にかはりカットされていたように思う。

キビキビした、パンチのきいた演出（杉本孝司）にも異存はないが、実は、五郎やとし江の語る言葉には深い祈りがあると思うのである。そのあたりでの宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」との関連を精しく語ることはできないけれど、セリフが語る自分に戻ってくるひびきのうすいのが気になった。

ともかく、この作品は、決して古くはならない、何回でも堀りおこされていい作品に思う。広島弁をイキイキとつかわせたのは大原榮子である。（4月14日　都市センターホール）

「かもめ」（アグア企画）

チェホフの戯曲をトコトン追いつめて何とか日本の芝居にできぬものだろうか、というちょっと変った趣向の演出（鈴木完一郎）である。

時代は明治もまだ浅い頃、場所を軽井沢あたりに擬したという記事をどこかで目にした。提灯のあかりで道を歩き、ろうそくの明りで読み書きするという生活である。それにしては、第一幕の、例のトレープレフの芝居でニーナの演ずる舞台のしかけは、それとは関係なく、時代ばなれして華麗だったりする。

凝っているのは、衣裳が和洋折ちゅう、変幻自在である。ソーリンが袴姿であったり、アルカージナが明治の女優髷で、着物姿で出て来たりする。裏方はハッピ姿の大工さんだ。

成程、それらの身支度が日本人に合うためか、ソーリン（湯浅実）がそっくり、日本人の老人であったり、ニーナがメリンスの着物姿であってもおかしくも見えず、むしろ所作に不自然さがなく、ストレートに内容にとりこまれてゆく。

会話をきいていると、まぎれもなくチェホフ戯曲そのものである。チェホフの時代がいかにも日本の明治の時代にはまったという気がする。しかし、この「かもめ」の物語が、明治初期の日本人の生活に、根源的に宿り得るかどうか。どうやら問題は別のようだ。

青年トレープレフの悩みは、華厳滝に身を投じた藤村操とはちがう気がするし、アルカージナに松井須磨子をあててみることも出来そうもない。アルカージナの情人トリゴーリン

のような女蕩しの小説家は、日本に居そうな気もするけれど、会話の質も話題もまるでちがう。

ソーリン家の御用人、シャムラーエフとポリーナという夫婦ものなども日本人の生活には滅多にない。

しかし、そうしたことでこの舞台をとやかく言うのではなく、「かもめ」をこんなかたちで見せてくれたたのしさがすべてで、チェホフを偲ぶにせよ、堀りおこすにせよ、当然のことながらチェホフ劇としての感銘はうすかったということだ。

アルカジーナの東恵美子は自在に演じて、しかもくずれない。流山児祥のトリゴーリンは意識しすぎる誇張が気になったが、あの役には説明を要するのであなるのである。ニーナ（入谷美幸）は一途な行動性はよく出ていたが、トレープレフから離れてトリゴーリンに気移りしてゆくところ、そして第四幕で敗残の姿であらわれあたりには、かなり仕足りなさがあった。

シャムラーエフ（池田一臣）は達者だ。ポリーナ（市川夏江）も見せ場を二つも三つもみせていた。マーシャ（天園祥子）は前半がよく、第四幕でメドベージェンコと世帯をもってからの変化した姿がもうひとつ欲しかった。ドールン医師（可知靖之）はらくにやっていた。

（4月21日　東京芸術劇場）

「亜矢子」（劇団青年座）

劇団青年座をこちらからすすんでみるということはない。つまり行動範囲の埒外なのだ。

「亜矢子」の公演が川崎市民劇場にまわってきて、偶然見ることが出来た。埒外といえば読む方でも何故か、岡部耕大をとばしている。「精霊流し」一本でたじろいたらしい。

ところが、この「亜矢子」を観て、横面を張られるほどの衝撃をうけた。実に申分のないリアリズムである。

観ている読者も多いと思うので、ストーリィはかんたんに書く。

所は、岡部耕大の書きなれた肥前松浦。もと郷士といわれた旧家北浦家の三男清三郎のもとに嫁いできたのが、亜矢子である。昭和十七年一月八日。戦勝にわく大詔奉戴日である。（昭和十六年十二月八日の開戦詔勅を記念して、以後毎月、八日を大詔奉戴日とした）この一幕二場の、亜矢子が登場するまでの北浦家の描写がおもしろい。

当主の北浦大膳は見事に妻の操に抑えられている。操は士族の出で、小学校の教員の経験もあるらしく、口八丁、手八丁である。おもしろいのは、その構図もさることながら、大膳の、ひそかに負けてはいない、不断の抵抗を見せる会話のやりとりである。

清三郎は嫁が来るというので、庭の、千年桜の古木によじのぼって待ち焦れている。亜矢子は、村では男出入りで何かと評判の女である。

姑となる操は、亜矢子の風聞も知っていて完膚なきまでにうちのめしてやろうと待ちかまえている。

じつにダイナミックな構図だ。亜矢子が言葉すくなく、白無垢姿で清三郎とならんで坐る。そこへ郵便局員の桜井が、清三郎の召集令状を持ってきた。

これでこの幕が送られるが、ここに書ききれないほどの雑件、登場人物があって北浦家一党の風景をおもしろく見せたりするのも、この幕である。

次の場面は昭和二十年八月十五日、一番長い暑い夏の日。

亜矢子は、物置小屋で二人の男、郵便局員の桜井と萬屋の徳というやくざを、つづけて、無聊の面持で受け入れるというシーンを見せる。三歳の男の児をかかえ、老父母をかかえた生活が亜矢子をしてそうさせるのだ。身持ちのふしだらなどでは片づけられない。みじんもくずれない亜矢子の姿が、そこにある。

開戦時の勝利のさわぎも、敗戦時の無残さも亜矢子に翳を落とすことはできない。崩れてゆくのは、突っ張っていた気位高の操であり、落魄した大膳の天皇制軍国主義である。これらの花は散るが、母となった亜矢子の母桜の花は散らない。

終幕では、戦地で清三郎の死を見とどけたという戦友大山巌と名のる男が登場している。男手不足につけこんで、はいりこんでいる。とり持っているのが操だからおもしろい。戦後のくらしの方便を如実に見せる。

すっかり羽振りのよくなった闇市のボス、萬屋の徳があらわれる。このやくざに、聖戦のまやかし、戦後民主主義のいい加減さを、いやというほど喋らせるのは作者の好みか。

その徳が、死んだはずの清三郎をともなってあらわれる。これも重層したドラマになった。

感心したのは演出（越光照文）の、確実に押してくる線のたしかさと、大膳（森塚敏）、操（今井和子）の絶妙の人物形象である。主役の亜矢子（土田ユミ）も褒めたいが景を追うごとに、身体の変化をぐいぐいと見せるようなダイナミズムが、役が役だけにほしくなったりして点がからくなった。

（6月15日　川崎市幸文化センター）

「孤　雁」（劇団東演）

戦後の自立演劇で必ずといっていい程上演された作品に、木下順二の「夕鶴」や「彦市ばなし」、そして眞船豊の「寒鴨」「水泥棒」などがあった。当時、ぼくは黄色い嘴で「眞船豊」の名をさかんに口にしたりしていたが、何ひとつ、わかってのことではなかった。そのあと「鼬」「鉈」「裸の町」「見知らぬ人」「遁走譜」「山参道」あたりまでは蹤いていったが、それだって、何ひとつ、この作家について知っていたのではなかった。

だから、「孤雁」などという作品については、一から教わるしかなかった。勉強のつもりで出かけた。演出が眞船戯曲にかけてはこの人しかいない、千田是也ということもあった。

「孤雁」は一九三九年（昭和一四）の作である。千田さんは上演パンフレットの「演出雑感」の中で、「稽古にはいって見て、こいつはなかなか厄介なことになりそうだといささか当惑した。なにせ出演者の大部分がこの脚本がつくられた時代についても、そこに書かれている出来事についても、ほとんど御存知ないわけである。この芝居を見に来てくださるお客さん方にしても同じことがいえよう」と書いて見えるが、しかし、そこで当惑して行きづまったということでは勿論、ない。

ぼくは昭和十四年には二十五歳になっていたから、その頃に「人民戦線」の検挙があったり、ノモンハンの大敗北が秘匿されていたり、中国に汪政権が樹立されたりしたということはおぼえている。

つまり、国を挙げての戦時体制で、石川達三の「生きている兵隊」が筆禍をあび、中野重治が辛うじて「歌のわかれ」を書いていたような時代であった、日本軍は満州に侵略し、そこを「王道楽土」と称して、日本内地の貧農とその子弟を狩りたてたのであった。

そんな時代のなかで「孤雁」を書いた眞船豊は、そこで何を言いたかったのかは、当時はあきらかにされようもないし、今だからそれができるということで、千田是也は当惑しながらも「なにやら面白くてしようがない」となる。

ざっと荒筋を書くと、こんな芝居である。

有光影樹は人間愛をモットーとする著名な芸術家だ。夫人幸子は四十年間一度も夫に笑顔をみせたことのないという、冷厳な切れ味で夫を操縦している。

長男の高樹は満州で、政・官・実業界で羽振りをきかしており、文弱一辺倒の有光一族を嗤っている。長女茂野は有名歌人亡夫の死を悔んでなげいている。次男の信成は音楽家。

第一幕は、その信成の妻愛子の通夜の夜。弔問客が去ったあとの有光一家の、とげとげしいやりとり。

有光家に寄食している二家族がある。有光影樹の言うままになって、人生を誤ったと考えはじめた寺坂伴作。病弱な妻と従軍看護婦にあこがれている娘桂子の三人家族である。

もう一組は、関本定助と房子の夫婦。こちらの方は幸子夫人にとりいって、さながら後官に仕える女官の地位だ。定助は酒好きでだらしないが、房子はそれをおさえ込んでいる。

さらに画室まで与えられている三流画家の志津田布南。彼は有光を敬慕して彼の前に拝跪してきたのだが、どうやら、ここへきて有光の人格に疑問を持ちかけたようだ。

この邸宅の中でもっとも実在感のあるのが女中頭のおはなである。目下の関心事は産業戦士の息子の嫁だ。おはなの下ではたらく、夢見る年頃のお清に目をつけている。

この規模は誰しもチエホフの「桜の園」を想像するにちがいない。ストーリイも「桜の園」と同様、日常におきた突発事件が中心になっている。

それは寺坂伴作が主人の有光影樹から、目障りだ、目の前から消えろといわれて、つもる怨みが爆発し、ピストルで狙撃するが失敗、警察にとらえられるという事件である。これを警察に電話で通報したのが画家の志津田である。有光に不信感がおきてきてから志津田は後悔する。

この事件を契機として、有光家は崩壊のきざしをおびてくる。音楽家の信成は酒に浸りはじめる。妻の愛子は母親幸子にいびり殺されたのだなどと言い出す。溺愛していた信成からそれを言われて　幸子は悲歎にくれる。

影樹は自分がピストルで狙われるほど寺坂伴作の恨みを買っているとは知らなかったと人間愛の破綻をなげく。「ぼくは孤独だ、まるで孤雁だ」というのが、この作品のタイトルである。

茂野は志津田に言い寄っているが、逃げられる。寺坂伴作の裁判で有光は被告に有利な証言をする。寺坂に、私への殺意があったとは思えない、という、赦してやまない人間愛への、有光の孤独な夢として描かれる。これはすでに喜劇である。

終幕は、寺坂の保釈出所を待つ、有光邸の乱痴気さわぎである。

千田さんはこのあたりを次のように説明してくれている。

「また〝孤雁〟という芝居のもうひとつの特徴は、どの登場人物のせりふにも、〝私が私が〟〝妾が妾が〟〝俺が俺が〟と言い訳がましくやたらに主語が出て来ることであろう。これはそのどれもこれもが、行動を失った意久地のない負け犬にすぎないからであろう。ときには理屈をこねたり、負け惜しみを言ったり、怒り狂ったり、嘆き苦しんだりはするが、肝腎の自分というものがしかと見えないでいるので、いたずらにその名を呼んでいるのに過ぎないのであろう。」

つまり、昭和十四年、眞船豊は劇作家としての視座をそのようにおいていたということだ。戦争一色の国策のなかで、十重、二十重に鎧った眞船の姿をそこに見ることができるとおもう。

役どころでは、画家志津田布南役の相沢治夫が自在にこなしてみせ、寺坂伴作役の大宮悌二に与えられ演出の設定がおもしろかった。

有光幸子（山田珠真子）、茂野（板倉加代子）、寺坂とみ（溝口順子）、関本房子（腰越夏水）、おはな（矢野泰子）と東演の女優たちが、いかにも眞船戯曲にふさわしく見えたのだが、何故なのか、わからない。

（6月29日　東演パラータ）

「わが町」（劇団蒼生樹）

ソートン・ワイルダーの有名な戯曲である。初演は一九三八年の記録がある。

〈日常生活〉〈恋と結婚〉〈死と人生の意味〉というタイトルをもつ三幕の構成で、裸舞台で進行係ですすめるという手法がよろこばれて、それなりの役者が揃えばどこでも触手の動く本である。隣同士の、町医者と新聞編集者という平凡な家庭の日常生活を追いながら、これを、広大な宇宙や神とつながる人間の営みとして見せるという、ある意味での象徴劇だ。

ワイルダーの「わが町」はアメリカのグロバーズ・コーナーズと呼ばれた地方の町だが、これを日本のどこかの町にしてみるという試みの、おそらく、その最初が、長岡輝子の『わが町溝の口』であった。

これはぼくも観たがおもしろかった。。溝の口、という街道筋の古臭い、大正の頃の町の人情や生活や言葉が、墨絵のようににじみ出てくる風情があった。「わが町」というからには、その町を見せなくてはすまないという側面を、この戯曲は持つ。

長岡輝子と親しい岐阜の劇団はぐるまの、こばやしひろしが『岐阜わが町』を上演した。これもぼくは観た。公演のカーテンコールには長岡さんも来ていて「よかったわよ」と花を添えた。

『岐阜わが町』では、岐阜の町の地誌、歴史を洗い、あの若い二人の結婚後の生活をリアルに追求するといった、こばやしひろしならではのオリジナル色が濃厚であった。しかしどうあれワイルダーの構成はくずせない。第三幕の格調の高さは、これをなぞるしかない。

以上の様な雑知識をもって、劇団蒼生樹の「わが町」を観るわけである。あまり有難い客とはいえない。

ところで劇団蒼生樹の梨地四郎版（脚本・演出）「わが町」は、関東地方の南西部のある町という設定である。正直これはかなり苦しい。湘南の藤沢あたりを考えてみたりするが、どこか無理が出てくる。

第一、この「わが町」には、長岡輝子の「溝の口」のように、あるいはこばやしひろしの「岐阜」のようには、梨地四郎は、町を伝えることに心を砕いていない。むしろ彼の意をもちいたのは、時代の設定と社会的背景である。大正の終りから昭和十三年にかけての日中戦争や国内での治安、思想弾圧、労働者の統制、小林多喜二の小説「一九二八年三月十五日」などの話も出てくる。この暗い時代のことを平成三年の観客にもつたえたいという情熱は、すでに彼の創作劇「その前夜」

でも濃厚であった。

それはそれでひとつの演出者の姿勢であり、ぼくも必ずしも不賛成ではないが、ただそれが、ワイルダーの「わが町」にセッティングした場合、進行係のナレーションの手直しだけではすまないことが出てくる。つまり、ここに登場してくる人物たちは、〝戦時下日本の民衆〟という視点では書かれていないからである。ワイルダーの初演した一九三八年は日本の年号で昭和十三年で、時代は同じであっても民衆の日常生活はまるでちがう。演出者の意図を完全にするためには、細部にわたって書き直しが必要になってくる。それほどまでにして「わが町」をやることはあるまいというところまでいってしまう。だから、木に竹をついだ折衷作品ということになる。

これは貶して言っているのではない。むしろ、今日的意味を加味した「わが町」の演出意図には興味もあったし、ソートン・ワイルダーの宗教的な人生感に対置して、人類が現在当面している地球汚染の命頭でしめくくったなどは、卓見かもしれぬと感心もしたのだ。

舞台の進行は、この劇の〝舞台監督〟という役割で助手（女性）をともなってすすめていたが、北原良彦という、面立ちも声も歯切れも良いということでは見易かったが、ソートン・ワイルダーが基本的に産み出した解説役とはちがっていたようだ。人間のいとなみや時の流れを天界からじっと瞶めるような、やさしさとかなしみが、ワイルダーのそれには感じられたが、北原良彦は手練の司会者の域をそんなに出ていない。

医師の木村家の主人夫婦（中村俊夫・浜田絹子）も弁護士（雑誌編集者ではなく）の植田夫婦（河住靖一・勝碕若子）もこなれたしぐさではこんでいたが、手持の演技力以上のものではない。むしろ、せりふではウケ上手の勝碕のアクセントが浮いていたりして、気になった。随所に破綻をみせた無対象行動の雑加減も言いたくないがひっかかった。

〈恋愛と結婚〉で登場する木村孝司（新井武広）と植田恵美子（清水泰子）の結ばれるまでのはこびのうまさは梨地演出の得意とするところで、もりあげてみせる。

やはり、第三幕の墓地の場面がいい。恵美子が大きくクローズアップされて、作品をしめくくった。清水泰子は少女役の可憐さのつくろいをとりはらって、かの女本来の大型女優を発揮して、この舞台を大きくしたと思った。

（7月7日　横浜社会教育文化ホール）

〈記録文集〉
『さよならデベさん』
―淡野修追悼記録集―

劇団コーロの代表・制作者だった淡野修氏は一九九〇年一〇月二九日、悪性リンパ腫による呼吸不全で永眠。享年五二歳。劇団葬は一九九〇年十一月二十三日でした。

●追悼のことば
村上嘉利、副島昭彦、さねとうあきら、多田徹、道井直次、大岡欽治、三好康夫、田川洋子、松本則子

●思い出
阿部好一、海老一郎、戎一郎、駒来慎、坂手日登美、阪本芽伸、田中理、松本昇、南くにお、宮階延男、山田善靖、吉岡敏晴、渡辺博

●淡野修の足跡

●写真でみるデベさん

●淡野語録

●劇団葬式次第

●劇団員のことば

発行　劇団コーロ
546　大阪市東住吉区今川八―五―九
〇六―七〇五―二八〇五

不断煩悩得涅槃
―宝暦騒動聞書―

こばやし・ひろし

場所の指定は別にしない。出演者の年令も一切演出にまかせる、

〈とおして、**およし**のひとり語りである〉

なに円うなったって。円うもなるよ、わしも年じゃもの。けどなあ、円うなってもやはり凡夫。松や、およよは許しとらんぞ。相変わらず許しとらん、これが煩悩具足の凡夫じゃとほんとに思う。人間ちうものはなあ、ことば一つで一生傷つくもんじゃ、一生忘れられん。傷がぐさっと刺さる。それがあの騒動、なかなか円うなれんもんよ。それがなあ、この前、獄門野郎の藤吉に会ってまってなあ、いや、あの世でよ、あの世で。あの世ってむろんお前、夢でだよ。夢でなかったらどうして会える。いや、わしもなあ、あの世の夢見るなんて初めてでなあ。あれからかなあ、少しは円うなったの。おとよがおじぎせや、おじぎして返してやるようになったで。おとよびっくりしとったぞよ。そりゃそうよ、お早ようといおうが、いいお天気でのしといおうが口きいたことがなかったからな。向こうはわしを遠くで見付けたらさけて通る。わしはさけたことはなかったぞよ。さける理由何もない。それが突然ひょこんと会うとあわてて口をきくのよ、およよの奴。わしは知らん顔して通して来た。わしゃあいつらに何も悪いことしとらん。悪いことしたのはあいつらの方よ。第一あいつらを立百姓というのが気にくわんわい。獄門野郎の一味徒党が立百姓、何ぬかす。ま、しかしわしも円うなった。いやわしもあの世の夢見てしまったんじゃ、夢ちぅのは、してきたことしか見んちゅうが、行ってもおらんあの世の夢、見たんじゃからわしも近いわい。近い近いと思っとったで見てまったんじゃがなあ。それがその因果なことにそこで獄門野郎の藤吉に会ってまったんじゃ、藤吉に。死んでも藤吉だけは許しちゃらんと思っとったで先手を取らにゃと「やいやい藤吉。わが家わやくやにしてくれた恨みは死んでも忘れんでのう。いいか、覚悟してくされよ」と会うなりどなりまくってやった

んじゃ。ところがのう、藤吉の野郎びっくりするかと思ったら、なんとニコニコしやがって返事もしくさらん。

「何をえへらえへらしやがる 今さらおべんちゃら抜かしたって許しはせんからなあ」と言ったら、「およしさ、もうこの世じゃ、この世」とぬかしやがる。

「この世もあの世もあるかい」

「いや、この世じゃこの世。仏様の下におるんじゃ、仏様の下に」

わしはびっくりした。

「仏様?」

はじめてあの世に来たことに気付いて

「仏様ちうと、このなにかい、袈裟じゃのうて、あのあの、あの世かい」

「そう、あの世から見たらこの世じゃ」

「この世?この世ちうと、あの世から見たらもうここはこの世か、この世…」

「涅槃の世じゃ、涅槃の」

「涅槃…」

「そう、仮の世を過ごさして頂いて涅槃の世にたどりついたんじゃ。ようようたどり着いたんじゃ。一切の煩悩から解脱させていただけたんじゃ、およしさ、ありがたいことじゃぞ。ナマンダブナマンダブ」

「何んじゃと」

「およしさ、一切善悪凡夫人、聞信如来弘誓願というじゃろが、阿弥陀様のお慈悲に包まれて、この世じゃ一切の凡夫が、善人も悪人も平等のお救いにあづかるのじゃ」

「平等?」

「そう、すべてがお救いにあづかる。立百姓も寝百姓もない、お殿さまもお侍もない。みんな仮の世で過ごさせて頂いたが、ここではみ仏の下に一切平等のお扶けにあづかる。一切平等のお救いに。ええか、みーんな凡夫なんじゃ、煩悩具足の凡夫。およしさ、わしらいろんな皮かぶって来た、いろんな袴着て来た。そして恨み、そねみ、ねたみ、おれがおれがといって苦しんで来た。苦しんで来たが、ここじゃもう、みーんなその皮ぬいでまって何の苦もないんじゃ。およしさ、おれらあの世からこの世へ来る時にお悔やみ申しますっていわれるじゃろ、俺は、あっもすうもない、打ち首でちょんじゃったが。あのお悔やみというのはなあ、苦が止む、あの世の苦が一切なくなるということじゃ。あの世は苦、苦ばかり、苦の世界、その苦が臨終と共に一切なくなる。なくなるんじゃ。およしさ、安心せい。もう何の苦もない、この世にきさせて頂いたんじゃから」

「そ、そ、そんな馬鹿な」

「そんなもあんなもない」

「何ぬかす!」

とどなるやわしは目がさめた。屋根裏のねずみが走ったと思ったらチュチュチュチュと激しく鳴いた。雄と雌がからんどるにちがいない。あとはしーんとして谷川の音にまじってふくろうの声が聞こえてくるだけ。小便がしとなったので外に出た。お月さまがきれいに山をくぎっていた。袈裟じゃ、まんだ袈裟におる。わしゃほっとしたけど、それからはさっぱり眠れんかった。あの世へ行ったら何もかも一切平等ちう、そ、そ、そんな馬鹿なと思ったが、考えてみりゃ金も田んぼも何もあの世へもってけるわけじゃない。およよも藤吉もわしも。となると今まで許すまい、あいつらだけは絶対許すまいと言い切って生きて来たわしは…。いや、それからは朝までねずみのチュウチュウも気付かんまま一睡も出来なんだ。

わしが父っつあまの又右衛門さの所へ嫁いできたのは十六の年じゃった。まんだ又右衛門と襲名しとらんので父っつあまは仁吉といっとった。左衛門とか右衛門ちう名の付く人は

村でも庄屋筋でないと付けられんことになっとる。村方三役は大方これがついとった。親父さまの又右衛門さんはまんだ元気に庄屋を勤めてじゃった。姑のきよのさはそりゃあきつい人でなあ。婆さまのおたつまが可愛がってくれたから辛抱できたちうもんじゃが、むろんわしの父っつあまの仁吉つあは優しかったぞえ。気の弱いとこが欠点といや欠点じゃが、そりゃ所帯まかされてからはわしが補ったで(大きく笑う)いや、ほんとにいい人じゃった。

嫁三十まで口いらん、ちうはよう云ったもんじゃぞ。母さまから云われるまま。「風呂沸いたか」へえ、「水汲んでこい」へえ、「草刈りにいけ」へえ、「肥汲め」へえ、「飯くえ」へえ、「糞こけ」へえへえ云うばかりで、それ以外のことは何も云うことはないわい。

庄屋ちうと人の出入りが多うてのう。そこの嫁ちうのは辛いことはわかっとったが、これほどとは思わなんだぞよ。朝暗い内に一番早よう起きてかまどに火たきつけるんじゃが、冬なんかたまらんぞ。馬と人の朝飯のまわしんならん。雪が深い郡上の山奥じゃ、氷とつららでパキパキ。そして朝から晩まで人の出入りが多い。夜になって風呂沸かしゃもらい風呂で両隣の嘉平次や辰吉どこがみーんな来る。「お加減どうですな」「お加減どうですな」と風呂かげん聞き聞き、暇を見つけて明日の飯の支度の臼挽きじゃ。みんなが風呂へ入ったあとの白く濁ったしまい風呂に入って湯を落として寝ると、もうくたくた、むろんわしの父っつあまも昼の仕事に疲れてぐーすかぐーすか寝てござる。いつも父っつあまの体が温かいのがせめてもの救いじゃった。たまに思い出したように抱きしめて「寝よ寝よ、何もしんから、わしの胸に顔うめて」と云ってくれると、何ちうかなあ、涙が頬を伝うんじゃ。ほんとに優しい人じゃった。

いや、伊助が生まれて、翌年つねが生まれた。二人をいずみに入れて仕事しとると腹すかしてギャーギャー泣く、わし、ほっとしてなあ。「チビ泣いとるで」と云って家にかけこみ乳をやるんじゃが、その時だけは誰にも遠慮せずに体休めることできるんじゃ。乳やったままうとうとと眠るんじゃぞ。乳かまれてびっくりして目覚ますんじゃ。(思い出して涙ぐむ)それがな、婆さまのおたつまに泣いとるチビを「あ、よしよし、婆さまが抱っこしてあげるでな」と先に取り上げられるとがっかりしたもんじゃ、いらん世話やいてと思って。

庄屋ちうても百姓は百姓じゃわい。あかり障子から襖畳まで小物成ちうて金森様は税を取り上げさっしゃるが、そんなもの八幡の町家の商人か、庄屋でも大庄屋様ぐらいのもので、わしらのような那比の山奥の庄屋は畳どころか板張りの床の上にわら敷いて莚敷くだけ、板戸がありゃいい方で折り戸か下ろし戸。どこも板壁、土壁で透き間だらけ、冬になりゃ朝方には雪が枕元に一尺は糸のように吹き込んで、いや、もう肩は冷とうなっとる。手で肩暖めて、その手がまた冷えてなかなか起き上がれん。

冬が過ぎりゃ三月から田起こしが始まるんじゃ。四月になりゃ山の口開け、山の口開けちうと山の草刈って堆肥をつくるんじゃが、これがまた百姓にとって大仕事でなあ。堆肥をどーんと入れにゃお米が獲れんのじゃ。一日一〇〇把刈りゃ一人前じゃが、あそこの嫁は八二把しか刈れんとか、あそこの嫁は一〇六把刈ったとか、もう糞!負けるかちうことになる。それに帰りにゃわらびやふき採ってこんならん。いや、参るぞよ。

わしゃこども五人生んで二人死なかいたが、

最後の娘ちよが死んで十日ほどして親父さまの又右衛門さが亡くなりゃしゃった。葬式も大へんじゃったが、ま、そんなこたええわい。父っつあまが親父さまの跡を受けて庄屋となり、又右衛門と襲名さっしゃった。三一じゃった。

いや、実は庄屋さまになってからが大へんじゃったんじゃ。それ、その宝暦騒動が始まったんじゃ。考えてみりゃ親父さまはええ時になくならしたと思う、ええ時になくなりゃしゃった。

宝暦騒動というと、美濃の人はみーんなわかっとるが、わしらの郡上金森藩ちうのは峠越しゃ飛騨にはいる美濃の山奥なんじゃ。小さな段々畑がいっぱい続いて上田で三俵取れりゃええとこ、下田じゃ苦労して一俵。あとは焼き畑作ったり稗、粟、黍、蕎麦、栃の実から栗からなんでも食べて生きて来た。

ところがお殿様の金森頼錦様が江戸で奏者番とか、何やる役か知らんが、えらーい人にならっしゃったと聞いた時、何かいやーな気がしたが、案の定、検見取ちう御達しが申し渡された。

けみとり。検見取ちうのはのう、毎年決まっただけ出しゃええ定免取とちがって毎年毎年坪刈りして調べお年貢をお決めになるんじゃ。そりゃそれでお年貢が低うなりゃええぞ、お上のさっしゃることに低うなることはないわい。それだけじゃない。隠し田といって山の田んぼを少しでも切り広げて作る帳面にない田んぼがどこもあるんじゃ。それまでみーんな帳面に載ることになる。お年貢だしたら何も残らん百姓にとってはそれだけが頼りじゃ。隠し田だけが頼りなんじゃ。いや、それだけで生きとるといってええ。

さあ大へんじゃ、郡内の庄屋衆が集まった。村中の百姓も集まった。むろん父っつあまは毎日毎日その集いに行った。夜中まで、いや朝方に帰ってくることはざらじゃった。村方三役の中に百姓代として藤吉がいた。三役ちうのは庄屋、組頭、百姓代じゃが、評判の悪い組頭の伊左衛門は当てにせず、父っつあまは藤吉だけを頼りにしてじゃった。

こうして宝暦四年七月二六日、庄屋衆は郡中惣百姓すべての願いと御蔵会所に検見取御容赦を申し出たんじゃ。ところがなんとそのお答え「受けなければ領内には置けない。どこへなりと立ち退くがよい」という。「立ち退くがよい」さあ、それを聞いた百姓は蜂の巣をつついたようになった。

「じゃ、そうしてもらおうじゃないか」

「おー、そうしてもらおう。郡上から百姓がみーんな立ち退いたらどういうことになるか。お上にそう申し上げるんじゃ」

「直訴じゃ、直訴」

こうして郡内の各村の百姓んたは石高一〇〇石あたり八人ずつの割合で御城下に集まることになった。直訴となりゃ、お上も百姓も強気と強気のぶつかり合いじゃ。

「お上にうんと言わせにゃだちかんぞ」

「根くらべじゃ、根くらべじゃぞ」

みーんな朝早う三日分の握り飯作って、夏じゃから梅干入れて焼いてなあ、御城下の八幡へ出ていった。三日目にはもう腐っとったちうが当り前じゃ。腐った飯食ってがんばったちうわい。けどなあ、三日たっても五日たってもらちかん。もうそうなると村に残った者は御城下のことが心配で心配で、仕事も手が付かん。いてもたってもたまらんのじゃ。こうなりゃ割り当てもへっちゃくれもないわい。われもわれもと八幡の御城下に集まり二〇〇〇人とも三〇〇〇人ともいうから大へんな強訴になった。これにはさすがのお上も怖じ気づいたか、もうお侍衆の慌てようたらなかったそうじゃ。

そうしてとうとう検見取御赦免の百姓の願書に三人の御家老が判を押さっしゃった。根くらべに勝った、勝った。お墨付きをもらったんじゃ、御家老様のお墨付きを。さあ百姓衆は躍り上がって喜んだ。むろん村もその知らせを聞いてわしら桶たたく鍋たたく、もう気が狂ったように喜んだ。そりゃそうよ、五日も六日もどうなるどうなると男衆のいない村で怯えながら御城下の成行きを見守っとんじゃから。あの日の喜びようは今でも忘れんわい。

「けど、みんなの力ってなあ。それに事がこんなに大きうなるとは思っても見なんだぞ」と母さまも上機嫌。

「そりゃもう検見は先代の井上様の時でこりとるで。わしも藤吉がおったで助かった。庄屋になったと思ったら、この騒動やろ、身が縮んだぞ」

「およし、藤吉はなあ祖父さまの妹の孫に当るんじゃが、およねさといってなあ、なかなかの器量よしじゃったぞ。血がつながっとるちうことは、こういう時力強いわい」

そんな話は前にも聞いたが、母さまは藤吉がお気に入りらしい、役立つ、役立つ云って。変な話じゃが、藤吉の話になるとなるたけ入らんようにしとる自分に気付くことがあるんじゃ。人間てな面白いもんと思う。わしの一生になぜか藤吉が付いて回るんじゃから。

ところでのう。検見御赦免の喜びもつかの間でなあ。一年たった翌年の宝暦五年七月、なんと思わぬところからお呼出しがあったじゃ。思わぬところから。笠松の代官所。笠松の代官所じゃ。郡中庄屋衆の総代三六人へのお呼出し。……わしんたは笠松代官所が出ておいでるなんて夢にも考えておらんかった。郡中一三〇ケ村は凍ったように静まりかえった。なにしろ笠松代官所ちうのは幕府御公儀の代官所なんじゃ。江戸と背中見て死にたいというが、幕府御公儀ちうは金森様のお殿様とはわけが違うわい。その上の上の雲の上じゃ。むろん、いやおうもない。いや、わしゃそう、うもう行くもんじゃないと思った、思ったよ。総代三六人は縮む思いで笠松へ出て行かれたんじゃが、郡中の惣百姓はみーんな固唾をのんで見守った。郡上の山々は水を打ったように静まりかえり鳥も鳴かなんだわい。

ところがなんとこんどは、去年御家老から頂いた検見御赦免のお墨付きを持って、すべての庄屋共に出頭せよちう御達しなんじゃ。さあ、大騒動。話によれば検見を受けよとのきついきついお申し渡しじゃちう。それを先に行った総代だけではお受けできんちうので庄屋全部の出頭となったんじゃ。しかもお墨付きを持って。そんなお前、御家老様のお墨付きを差し出いたいら、もうおしまいじゃ。絶対に出せん、出せん出せん。どんなことがあっても出せん。出せんが、かといって、それを代官様に聞いて頂けるかとなると、誰も「うん」ちう者はおらなんだ。そんな甘いもんじゃない。相手は御公儀の笠松の代官様じゃ、ちうことがわかっとってもお前「はい、そうですか」かと持って行けるか。もうそれで毎日毎日村中が集まった。集まったが相手が御公儀からのお申し渡しじゃからどこの村も堂々巡りじゃわい。しかし、去年頂いた検見御赦免のお墨付きを仰せのとおり庄屋様が笠松へ持って行けるなんて、とてもとても、そんなもんじゃなかった。そんなことをすりゃ血を見たにちがいない。結局どうしょうもないので庄屋様んたは手ぶらで行くことになった。なったがそれでみんなが逆に一層怯えた。そう、怯えたんじゃ。

家の父っつあまがいよいよ笠松へ発たにゃならんちう前の晩も、村中がみんな集まってきた。誰が声かけるちうこともなく集まって

きたんじゃ。つぎつぎと入ってくるが黙って座るだけで声もなかった。ただ黙って頭かかえるか、天井にらむだけ、お互いに目があっても悲しそうに目をそらすだけ。わしゃお茶を配って回ったが手にする者もいないんじゃ。しばらくして長作がうめくように云った。

「俺どんなことがあっても検見だけは御免じゃ、お墨付きは絶対にわたさんぞ。渡せるか。わかっとるな、庄屋様」

「……わかっとる」

家の父っつあまも他の村の庄屋衆と同じように明日お墨付きなしで手ぶらで行くことの恐ろしさに怯えてござるようじゃった。父っつあまの気持ち、わしにはようわかった

「もうちょっと自信もって云ってくれ、庄屋様」

「いや、わかっとる。どこの庄屋衆も同じじゃ、同じ」

「そんなものどんだけ念押したってだちかんわい、相手は代官様じゃ、庄屋様じゃない」

と太郎吉がどなった。

「けど庄屋様がふんばっ てくれな」

「ここでふんばったってどうにもならんわい」

「そりゃどういうこっちゃ」

「庄屋様に対して失礼やぞ！」

とあっちこっちから声が出た。

「もういい、いうな！」

嘉平次がどなった。また、みんな黙りこくった。云ってもどうにもならんのだが、そうかと云って、庄屋様の家から去る気持にもなれん重いものが部屋中につまっとった。その重さに父っつあまは耐えてのようじゃった

しばらくして松平が独り言のようにぽそぽそと云った。けど云うことはみんな分かった。

「庄屋様、どうぞ笠松でお願いします、笠松で。わしは検見お断りできるんじゃったらどんなことでもします、どんなことでも。おらの親父はもうこんで三年中気じゃ。死んでくれりゃええが死んでもくれん。どうすりゃええんじゃ、どうすりゃ。いや、庄屋様にいっとるんじゃない。代官様に殺いてまいたいんじゃ、いっそのこと笠松の代官様に殺いてまいたい。家の親父を笠松へつれてってくれ。庄屋様、笠松へ親父つれてってくれ」しまいには涙声になっとった。

そしてまただんまりが続いた。もう夜も更けて丑三つを過ぎた頃じゃと思う、それまで一言も口をきかなんだ藤吉が立った。

「もう、寝よまいか。明日庄屋様はお発ちじゃ。もう土壇場じゃ、庄屋様、わしらの気持ちはこのとおりじゃ、庄屋様について行く、みんなどこまでもついて行く。庄屋様あっての百姓じゃ。安心していってくりょ。なあ、庄屋様。さあ、もういい、みんな寝よまいか」

一瞬しーんとした。

「さあ、帰るぞ」と藤吉にうながされて、嘉平次が立った。つづいて長作も立った、太郎吉も立った。そしてつぎつぎ立って行った。ひとり松平だけが残った。

「松平さ、寝よまいか、みんな帰らしたで」とわしが云うと、わしにゆっくりおじぎして松平も帰って行った。

それから父っつあまは囲炉裏に来て茶をゆっくり飲ましたが、そのままじっと座ってじゃった。わしが跡かたずけしても台所へもどっても座ってじゃった。

「もうお休みにならんと」というと、

「うん」といわっしゃるだけ。ひとり床に入っても、わしもなかなか寝つかれなんだ。何でも苦にする質の人じゃから次から次へと案じることばかりじゃと思う。御蔵会所へのお呼出しでも気にする人が……、あれやこれや考えとる中に疲れでか、うとうととした。気付いたらもう鶏の声が聞こえた。あわてて起きたが、…相変わらず父っつあまは囲炉裏におられた。

「なるようにしかならんで少しでも休まにゃ」

……ちらっとわしに何かいいたそうやったが、黙って部屋に入ってかした。朝飯には呼びもしんのに出てござったから、一睡もしやっせなんだと思う。

こうして父っつあまは上之保の庄屋衆と東乙原で落ち合い、笠松へと発たしゃったんじゃ。いや、もうその日からわしゃ仕事は手につかなんだ。今頃笠松で何考えてござるか、そう思うだけで。「おらんた庄屋様について行く。おらんたどこまでもついて行く。庄屋様あっての百姓じゃ」といった藤吉の言葉が浮かぶんじゃ。父っつあまの辛い立場が分かるんじゃ、みーんな手にとるように。そうなると、もうわしゃ落着けん。下手すると、そう思うだけで村中の者の顔がつぎつぎ浮かんで来る。なかなか夜は寝つかれん。昼は仕事しとっても何か宙に浮いとるようでなあ。何したか、何しとるか、自分でもわからん有様じゃ。いつもきびしい母さまもわしと同じ思いなのか、浮かん顔して仕事の手も休めてすくんでござる。そうかと云ってわしら毎日何していいかわからんのじゃ。

ただ、ぼうとしとるだけ。

笠松へ発たしゃって五日目じゃ。村中がえろう騒がしいと思ったら、やっぱり案じていたとおり、笠松から飛脚が来て隠しておったお墨付きを出せとの厳しい御達し。それがお墨付きは小野村の半十郎さが預かってたそうじゃ。いや、お墨付を誰が持って、どこにあるのか、誰にもわからなんだから、さあ、みんながびっくりした。どうして半十郎さが持っとることがお上にわかったか。その話でもちきりじゃった。それを聞いてわしらは嫌なものを感じた。

「お墨付きが取られた」ちう半十郎さの知らせで百姓んたは気が狂ったように飛脚を追った。そして郡境の母野で飛脚から奪い返したんじゃが……。

もうこうなると金森様だけじゃない、御公儀が相手じゃ。それからはわやくや。郡内にゃ庄屋衆は誰もいないから百姓だけ、百姓だけが走り回った。

「庄屋様はもう当てにできんぞ！代官様の申し渡しにぬかずかれたんじゃ」ちう声が村中に、いや郡内に行き渡った。どの百姓の目も血走しっとるが、わしらには目をそらすだけじゃない。口を利いても妙にそらぞらしうになり、村の者が何しとるか、何しようとしとるのかも分からんようなった。むろん、家への出入りものうなった。村八分にあったようなもんじゃ。庄屋が村八分、それも郡内一三〇ケ村の庄屋の殆どが。考えれんことが起きたんじゃ、考えれんことが。それだけじゃない。お墨付きのあり場所を吐いたのは笠松へ行った庄屋衆の誰かにちがいないちうことになった。もう、わしらは仕事にも出れなんだ。

「村のことは何にもわからんようになったが、藤吉や太郎吉が中心になっとるようじゃった。ただ、父っつあまが笠松へ行かしてから藤吉が全く来んようになったことが苦になった。母さまも同じじゃった。

「およし、いっぺん藤吉んどこへ行ってみてくれんか。こういう時に力になってくれにゃ」

といわれ、嫌じゃとは云えん。夕ぐれじゃったが藤吉んどこへ行ったら、おみつがおるだけ。

「上之保へ行ってじゃが」ちう。

「いつ帰ってござる」

「さあ、今夜帰ってござると思うが、もう、この頃家開けっ放しじゃで」

「帰ってござったら家に来てまってくれ」と云って帰ってきた。けど、その晩遅うまで待っとったが顔出さなんだ。あくる日も出さなん

かったから、なんとなく心は騒いだ。この騒ぎでみんな米や味噌を出いとるちうことは聞いとったから、そのまわしはしたった。母さまとわしが出た。「ごくろうさんじゃなあ、父っつあまがああいうふうで、何もできんで申し訳ないが、ほんの少しここにまわしとといたで」と土間に下りたが太郎吉の口はなかなか重かった。

「へえ」というだけ。

「実はこりょうさ、お願いがあってきたんじゃ。御存じやと思うが、庄屋様んたが笠松で頭下げやした。そんでもう、わしんた頼るもんは何にもない。あとは江戸へ直訴するほかないちうことになったんじゃ」

「直訴！」

「へえ、直に江戸のお殿様に」

「そうなりゃ路銀からいろいろ入用がいりますで」

「それで」

「なんとか一両お願いしたいんじゃ」

「一両！」

「へえ、この村じゃ左助が行きます。そんで村で出し口を割当てましたんじゃ。小前の者もそれなりに出いとりますで」

一両と聞いて思わず息をのんだ。一両てや米一石分じゃが、一年かかって一反に一石取れやええ方。

こうして太郎吉んたは金だけじゃのうて、まわしといた米や味噌もみーんな持ってった。無理矢理出し口を取られたのはこれが最初じゃった。

もうそれからはわしんた村じゃ小そうなって生きとった。女ばっかで子供が一番かわいそうじゃった。親が八分に怯えておるんじゃから分からんはずがないわい。喧嘩となりゃすぐいじめられるんじゃ。

「いじめられたらすぐ逃げてこい、すぐ」と泣きじゃくる子供をだきしめてやる他なかった。

父っつあまが帰ってござったのは宗門改帳を出さにゃならん秋になってからじゃ。絶対庄屋衆を郡内に入れんちうとった百姓んたも幕府御公儀で決められた宗門改帳を出さんわけにいかん。それには庄屋の判がいる。そんでようよう郡内に入れたんじゃ。父っつあまはこうして三か月ぶりに帰ってこられた。何もよう聞かなんだが向こうで苦労されたんじゃろう、やつれた姿で帰ってこられた。

わしゃもう何にも考えず一生懸命働いた。何か陰口いっとるなと思ってもくそっと歯

だ。母さまは、

「くそ！藤吉の奴、来る気がないな。こんどの事で家の敷居が高なりゃがったんじゃ」

と吐き出すようにいわしたが、藤吉のことでこんなことは始めてじゃった。

そのあくる日やったと思う。突然村が騒がしうなった。勘助んどこのおとよに

「何が起きたんじゃ」と聞いたら

「庄屋様が帰ってござる」ちう

「父っつあまが」わしゃびっくりした。

「代官様に丸めこまれたんじゃ、代官様に」と吐き捨てるようにいって去った。

それから数日、炊き出しはする、幕旗や竹槍は作って走る、そりゃ大変な騒ぎが続いた。かといって何が起きたか付いて行くわけにも行かず、心は騒ぐが家におるよりしやなかった。婆さまも母さまもわしといっしょじゃ。ただただ、父っつあまが無事帰ってござるか、それだけ。隣の嘉平次に聞くわけにも行かず、じっと一日一日待った。やっぱり郡境までこられたが石は投げられる、悪態はつかれる、とても郡内に入れたもんじゃなかったちう。御城下もたいへんな騒ぎちうこっちゃ。

そんなある日太郎吉が源三らといっしょに家へやってきた。ここ長らく人の出入りがなしりかんで働いた。もう、江戸へ誰が行ったか、それがどうなったか、もうどうでもいい。秋の取入れに一生懸命になった。一両は取りもどさにゃ、いや、笑い事じゃないぞえ。一両てや大変な物入りじゃ。

けど父っつあまは帰ってこられてから、もう気が抜けたような、いや、人が変ったようにならっしゃったんじゃ。口数の少ない人じゃったが、口もきかれんようになった。噂ではえらーい拷問に掛けられた人もあったちうが、わしゃ父っつあまに聞く勇気もなかった。

直訴ちうことで江戸には大勢行ったそうじゃ。暑い暑い夏何十人も。それがのう、一月たっても二月たっても、江戸からは着いたともお殿様にお会いできたとも、何の音沙汰もないんじゃ。その中にどうやらみんな牢屋に入れられたちう。なにしろ幕府御公儀が後盾にならしゃったのじゃから、お上は強気にならっせるわい。

その頃から、去年の騒動で主だった者んたがどんどんお縄を頂戴するようになった。真っ先に郡中の惣百姓に呼び掛けられた剣村の庄屋善左衛門さや小野村の半十郎さんたが牢には入らっしゃった。もう、そりゃ戸閉ちうてなあ、家の戸は釘づけされ、親さまや子供んたまでお縄を掛けられたそうじゃ。それだけじゃのうて、その他の主だった者にもお縄が回りはじめた。そして毎日のように引っ立てられた。

さあ、そうなるとどの村も、去年の勢いはむろんのこと、江戸出訴の勢いはのうなった。それだけならええが庄屋にはお上から度々のお呼出し。そして年貢の督促と検見取承諾を百姓どもに説得するように強く強く迫られる。組頭の伊左衛門と二人で頭を抱えるだけ。藤吉は呼んでも来てくれなんだ。村の三役が集まれんのじゃから、村の者にそんなこと言い出せるわけがない。

上之保筋はお年貢をお米で出いとるで絶対退けなんだが、お蚕でお金の入る下川筋はお上の切り崩しにはじめて崩れ始めた、始めたんじゃ。さあ、郡内は騒然としてきた。「裏切り者奴！」「お上に土下座する気か！」「恥を知れ、恥を！」

ところが同じ下川でもお蚕のないわしんたの村の那比だけは上之保筋と同じゃった。誰もお上に頭を下げなんだ。

こうして検見をうけるのを寝百姓といい、どうしても検見お断りを貫く者を立百姓というようになった。誰が言い出いたか、お上に盾突いた者が言い出いたにちがいないが、わしらを寝百姓、何ぬかすいい気になりゃがって。それからは村の者んたと口もきかなんだ。

ある日馬の世話をしとって、ひょいと顔を上げると藤吉がおった。わしゃびっくりして、「なに」と思わず云ってしまった。藤吉は丁寧に、

「ごりょうさ、ご無礼ばっかで。庄屋様は」ちう。わしゃ思わず顔がほてった。

「父っつあま」と当てもなしに家に入り「藤吉つあじゃ」と妙にうわずって云った。父っつあまは黙って出てござった。藤吉は「庄屋様、ちょっとお話したいんじゃが」ちうので、父っつあまは囲炉裏に座ろうとしやしたが、

「できたら裏山で」ちう。しやないで父っつあまは藤吉について裏山に上ってかした。わしに隠さんならん話にちがいない。わしはなんとなく落ちつかなんだ。しばらくして父っつあまは一人で下りてござったが、ものも言わず奥へ入ってまって出てござらん。どうしてやと奥をのぞいたら、なんと父っつあまは仏壇の前でじーと考えてじゃった。何かあったにちがいないと思ったが、わしゃ聞く勇気もなかった。

それから父っつあまは度々出てかっせるようになった。どこへ出てかっせるか気がかり

になったで聞いたら、なんと師匠寺（旦那寺）の相生の照明寺にお参りしとるといわっせる。わしゃびっくりした。まんだ三三じゃに。

ところが、ようやく秋の取入れもすんだある晩（戸を叩く音）

「だれじゃ」

「……」

「だれ？」

返事がない。

「だれじゃい」

といいながら土間に下りた。それでも返事がない。わしゃ急に胸騒ぎがした。

父っつあまはいろりでお茶を飲んでじゃったが、村の者に違いないと思ってか奥へ入ってしまやした。戸を開けたら太郎吉がおった。その後に勘助んたもおった。

「……何の用で」とぶっきらぼうに云うと、

「庄屋様は」ちう。

「……」

「庄屋様にお願いがあって」

「……どういう」

「直にお話ししたいで」お前らに用はないわいと云いたかったが、しゃないで父っつあまを呼んだ。父っつあまはしぶしぶ出てござった。

「庄屋様、こんな夜遅う申し訳ありません。庄屋様もご承知のとおり、お上も強気で四人五人集ってもすぐお縄じゃそうで」

「……」

父っつあまは何もいわっしゃらなんだ。しばらくは用もない話でわしゃいらいらしてきた。

「そんで何の用なんじゃ」ちうと、

「ご無心に……」ちう、やっぱり。

「そんでどんだけ欲しい」

「欲しいって何じゃ、みんなも出いとるんじゃぞ」と勘助がどなった。

「何いう、出いとるってなあ、見込のないこといつまでもやるから金が要るんじゃわい」

「見込のない！見込のないように誰がした。誰がしたんじゃ」

「ま、ま、ま」と太郎吉が止めたが、わしゃ納まらなんだ。

「おい、勘助、ぬしゃ誰に向かって云っとるんじゃ。誰に向かって云っとるんじゃ。わしゃ庄屋の女房じゃぞ。又右衛門さの前でよう云ったなあ」

「勘助！ま、ま、ごりょうさ、気しずめて、気。みーんな気がたっとるんじゃで」

「気がたっとることはええが、何で藤吉が家に来れんのじゃ」と母さまがいわした。

「……ええ、藤吉つあいろいろ走りまわっとりますで」

「そういうこた聞いとるが、こんな時挨拶に来るのが村の三役の一人として藤吉の立場じゃないか」

「……」

「藤吉呼んで来とくりょ」

「……」

「藤吉呼んで来るんじゃ」

「へえ、ところがおりませんので」

「嘘こけ！」

「ほんとで」

こんなことがあって数日たつや、雪の降る中江戸で、老中酒井左衛門尉様の御登城を待ちかまえて百姓総代が駕篭訴したちう話が伝わった。直に幕府御公儀に。その駕篭訴衆の中になんと藤吉も入っとるちう、村中はもう大騒動じゃ。むろん駕篭訴は御法度じゃから、命は覚悟の上。

「藤吉、藤吉が……」

わしゃ胸が熱うなると同時に、何か嫌な予感がした。

その予感は当たった。駕篭訴が御公儀に取り上げられたちうだけで百姓んたは暴れまくった。上之保から下川まで。

（はげしく戸を叩く音）

「又右衛門起きんか」

（はげしく戸を叩く音）

戸を叩きこわす勢いにわしら思わず息をのんだ。「こりゃ何するかわからん。裏山へ」と思ったら、もう裏へ回ったらしく声がする。

「引きずり出せ。引きずり出すんじゃ！」

「寝百姓なんかに遠慮するこたないぞ」

勘助の声、辰吉の声、みんな手に取るようにわかる。「くそ！」と思ったら、戸は叩きこわされ、どやどやと土足で上がり込んできた。うーもすーもない。父っつあまは寝巻のまま首筋もって引きずり出された。頭株の太郎吉が云った。

「庄屋様、もうご承知じゃろうが、この前庄屋様んどこへようこなんだ藤吉つあが江戸へご挨拶に行かっせた、命がけでなあ」

「おい、顔上げんかい！」勘助がいきなり父っつあまの髷を握りひっぱった。

「庄屋様、こういうことになったのもみーんなお前さんのためじゃぞ。笠松で代官様に頭擦りつけ、お墨付きのありかまでしゃべったのは誰じゃ。話によりゃ庄屋様ちうもっぱらの噂じゃ」

「太郎吉つあの顔みんか！」

「違うんか」

「おい、どうなんじゃ！」

「ごりょうさ、手つけ頭下げえ！」

頭下げりゃ上げえといい、もう云いたい放題。悪口雑言の限りをつくしやがるんじゃ。

こうして父っつあまは詫び状文を書かされた。

郡上惣百姓に御詫び申し上げ候。宝暦四年七月、検見取り御達しよりこの方、惣百姓申し合せ検見取廃止の御願いにおよび申し候処、固い心底固め盟約仕り候。しかるに……

太郎吉の云うままに書かされた。そしていつの間にか引きずり出されとった組頭の伊左衛門とともに土下座をさせられた。

「はっきり云え、はっきり」

「みなさまに御迷惑御掛けし申し訳ございません」

「声が小さい！」

つばを叩き掛けられ、許しをこうた。もうわしゃくやしうてくやしうて、腹煮えくり返るんじゃが頭すりつける他なかったんじゃ。いつも組頭面して上からものをいっとった伊左衛門もどうしょうもないわい。

こうして翌々年の一月。雪の降る中、藤吉を始め五人の駕篭訴衆がいよいよ郡上に帰ってくることになった。

この時も二年前と同じじゃ、われもわれもと郡境に集まり、駕篭訴衆を待ち構えた。もう、みんな血が上ったように興奮しとる。勘助んどこのおとよも辰吉んどこのお松も天下をとったような顔しやがって、「ええなあ、ごりょうさ、手ついてしっかり謝るんじゃぞ。今日はわしんた百姓にじゃない、駕篭訴様に直にじゃ」とぬかしゃがる。こうしてわしんた村の者にこずかれながら冷たい雪の上に座らされて藤吉んたを待った。

「駕篭訴様じゃぞ」という声がしたと思ったら、百姓んたの間から

「南無定次郎大明神」

「南無藤吉大明神」ちう念仏の声が巻き起こり、涙声になり、そりゃもう狂ったようなあり様じゃった。

いよいよ近ずく気配がした。見まいと思ったが、何人かがとおり、藤吉が近付いたのじゃろう「南無藤吉大明神」の声がうわずったように高まり、泣き声にすらなった。思わず顔を上げたら、藤吉じゃった。火責め水責め石抱きの拷問にあったのじゃろう、髪はぼうぼうで人が変ったようにやつれはて、

ただ目だけが涙で光っとった。生きて郡上の衆に会えたうれしさにちがいない、食い入るようにしてみんなの一人一人の顔を見回すんじゃ。わしゃ思わず頭下げた。あとはじっと唐丸籠の去るのを待った。

それからわしの家はわやくやになった。帰ってきた駕籠訴衆がみーんな村預けになったんじゃ。村預けちうと庄屋預けちうこっちゃ。家の納屋に藤吉が押し込められ、足軽が二人付いた。それから三度三度はわしの仕事。村の者んたが、

「何食わしとる」ちう、

「わしら食っとるもん食わしとるわい」

「粗末にしたら承知せんぞ」

「藤吉つあがなあ、命かけやしたのもお前んた寝百姓のためやぞ。それ忘れるな！」

もうとってもかなわなんだ。「寝百姓のためじゃ」「恥知らずの寝百姓のためじゃ」

村の者んたの云いたい放題は防ぎようがなかった。父っつあまは塞ぎ込むばかり。飯を持ってった時にわしはこっそり聞いた。

「そりゃほんとか。おんしがそのために命かけたちうは」

藤吉は足軽の方へ目をやりながら、首を振るだけじゃった。

「どうなんじゃ」

「誰のためでもない、俺のためじゃ、俺の」

格好つけやがって、

「思ったことを云ってくれ、わしに思ったことを」

「ほんとじゃ、ごりょうさ」

「どうしてわしにほんとのことが云えんのじゃ。わしらが憎いんか、わしらが。わしらが村でどんな目にあっとるか！」

「いや、申し訳ない、ほんとに申し訳ない。庄屋様もたいへんじゃ、たいへんじゃったんじゃ。俺、庄屋様を責めようなんて思っとらん」と云って涙を流すんじゃ、藤吉が。

「もしほんとにそう思うなら村の者んたに云ってくれ、村の者んたに！」

藤吉は大きくうなづいてくれた。

わしもなぜか泣いていた。泣けて泣けてしやなかった。しかし、村の者んたはますます冷とうなるばかりじゃった。

いや、悪いことがあると悪いことが続くわい。藤吉を預かって十日もしたら父っつあまが寝込んでしまわれたんじゃ。むろん、つもりつもった疲れからじゃわい。よってたかってつつかれこつかれ誰じゃってまいるぞ。まして気のやさしい父っつあまのこと、わしゃこうなることを一番恐れとったんじゃ。

いや、わしの一生に藤吉がおらなんだらとたびたび思うことがあるわい。人間ってどうしてこんなに業が深いんじゃろなあ。

こんなこた恥じかき話で誰にもいえんが、実は父っつあまに嫁ぐ前に藤吉と会ったことがあるんじゃ。ことがあるなんちうと妙な話じゃが、いや何度も会ったんじゃ。（大きく笑い）いや、娘心を高ぶらせたんじゃわい。

わしの実家は西乙原でなあ。藤吉とは草刈りに行って山で会ったんじゃ。最初はチラチラとわしの方を見る、見とるなとわしも思うだけじゃった。それが盆踊りの晩、盆踊りの晩は無礼講じゃ。藤吉の奴、わしんたの村に来て踊り、わしの前になり後ろになり、わしゃ声かけてくるなと思ったし、かけてきたらどうしょうかいと思っとったがその時いきなり「およしさ」ちうて名前で呼ぶんじゃ、もうわしは声にならんなんだ。そしてニコッと笑ったが、笑っただけ、後は何にも。わしゃなんとのう、もの足りなんだが、それが手なんじゃわい。藤吉ちう名前は誰からとものう耳に入ってきたから、それだけ目立ったんじゃろなあ。実はもうその頃、父っつあまとの話は進んどった。進んどったが、まんだ父っつあまに会

てもおらんから妙に藤吉だけがわしの心に残ったんじゃ。

また草刈りに出たら藤吉にばったり会った。

「およしさ」と声かけてきたので、わしゃ真っ赤になって蚊の泣くような声で「はい」ちうと、「この草もって行かれえ」ちう。その日は月のものがあって思うように刈れなんだ。

「いや、遠慮せいで」ちうて、ニコニコしながら行っちまいやがった。

いや、にくい奴ちゃ、わしゃその後ろ姿いつまでも見とったぞよ。見えんようになるまで、ポーと。それから草刈りに出る度に今日は会えるか、今日は会えるかと思うようになった。そして会えば自然に話し合うようになったんじゃ。

そんなある日、突然、

「およしさ、好きや、俺好きや」ちう、わしゃうれしかった。うれしかったがどうしていいか分からんのじゃ。そしたらいきなり抱き付いて「好き好きおよしさ」

藤吉の熱い息をわしは首や顔に感じた。そんなこたわしゃはじめて、もう無我夢中で「いやいや、止めて」ともがきふりほどいて転がるように逃げた。それがますます藤吉の気持ちを高ぶらせたんじゃろう、わしに追いすがり抱き締めるんじゃ。わしは身を縮めたが、藤吉は興奮し、わしの胸に手を入れた。

「止めて、止めて！いやいや」と絶叫したが、山の林の中に消えてゆくだけ。そしてわしの声はかすれ、消えて行った。どれだけじっと抱き合っとったか知らんが、藤吉の手がわしの身体をまさぐり始めた。

拒んどるんじゃがもう声にもならんわい、わしの声は何かを訴えとるだけ。と思ったら、藤吉はいきなりたっつけの紐をとき、そしてふんどしをほどき始めた。その時や、熊笹の上になっとったわしがずり出したのは、あっという間に十五間もある谷に向かって落ち始めたんじゃ。「キャー」後は何が何だかわからなんだ。岩にぶつかり、熊笹で手を切り、気づいたら谷川の淵に逆さに頭から突っ込んだんじゃ。たいした傷じゃなかったが痛みよりわしゃまったく気が転倒した。

藤吉はふんどしほどいて四つんばいになったと思ったら、わしが谷底にいるので驚いた驚いた。ふんどししなおして谷底にきた時、わしはもう逃げるように走り去っとったんじゃ。

わしはそれからもう草刈りには行かなんだ。それが行きたいんじゃ、行きたい行きたいと思っていつも山の方を見る。見ても何にも見えん。見えんが見るんじゃ、ぼうーと、そして何考えるともう、もの思いにふけるんじゃ。いや、人間ちうのは業が深いわい。

父っつあまのところへ嫁いで輿入した初夜もそれで固うなって身を縮めた。藤吉のことが頭に浮かんで怖かったんじゃ。それを父っつあまはわしがうぶやからと思ってか諦めさっしゃった。翌日も翌々日も、父っつあまはじっとこらえて暖ったためてくれた。背を向けて身体を固うしとるわしを。やさしい父っつあまに涙が出たぞ。

夫婦になったのは十日もたってからじゃろうか。気の短い人なら帰されとるとこじゃが、わしゃ「ごめん、ごめん」ちうて涙にぬれた。父っつあまは、「いや、まんだ十六じゃもん」とやさしく抱いてくだれた。

藤吉が父っつあまとまた従兄弟ちうのは、むろん嫁いでからじゃ。わしゃびっくりしたぞ。びっくりしただけならええが、こうした藤吉との出会いが、呪われたように、わしの一生について廻るなんて考えもしなんだ。

父っつあまは寝込んだと思ったら、十日もして逝ってしまわれた。悪いことは続くもので母さまもすぐ後を追わした。照明寺の御院住にこんなに早うお世話になるなんて、まん

だこの騒動が起きる前にゃ考えてもおらなんだぞ。父っつあまは三四じゃもん。

むろん、藤吉は江戸に戻され、きつい御詮議の上、これも打ち首。しかしなあ、打ち首になっても藤吉はわしについて廻るんじゃ。業は深いわい。ただ、どう考えてもふに落ちんのは、藤吉が父っつあまと裏山で何話いたかちうこっちゃ。わしも父っつあまにしつこく聞いたがいわっせん。笠松の代官所でゲロ吐いたちう噂はほんとかと云っても、首ふらっせるだけ。そりゃ責められゲロ吐かしたかもしれん。しれんが、たとえそうやとしても、わしのためにも父っつあまをかばうのが藤吉の立場やとわしゃ思った。それを藤吉に確かめたが、むろんこれも首を振るだけ。

「じゃあ、裏山で何を話した」と聞きぇ、

「何にも」

「何にもちうはずがない」

「とんでもない、そんな話はしとりません、絶対しとりません」ちうだけ……。

どっちにして、父っつあまの命縮めたは村の者と藤吉じゃ。……藤吉、藤吉。いや、そう考えるとわしゃつくづく呪われた一生やと思うぞ。藤吉に会っとらなんだら……。なんだらちう話は意味ないわなあ。

宝暦九年の正月には、前谷の定次郎、歩岐島の四郎左衛門んた四人が殻見野で獄門になった。なったが三万八〇〇〇石の金森様もお取り潰し、一番迷惑したのが、この金森様のご家中の方じゃと思う。みーんなこの騒動で御浪人になられたのじゃから。獄門台につばでも引っ掛けても腹納まらんわい、ところが獄門台には大勢の百姓がお通夜のようにうずくまって、毎日のように何十人何百人の正信偈。

(正信偈の合唱)明日からどこへ行っていいかわからん家中の方は頭に来たにちがいない。それが何日も続いたんじゃ。

ところがそういう騒ぎも納まって一月もしたら、村の者んた、藤吉の菩提を弔うためちうて金を集め始めた。墓を建てるちうんじゃ。しかも石碑を。石碑なんてお前、お殿様かご家老様ぐらいでお侍衆でも少ないんじゃぞ。いわんやど百姓が。百姓はなあ、庄屋でも土饅頭でそこに墓柱を立てるだけ、墓柱というから白木の棒に坊さまに法名を書いてもらうだけじゃ。むろん、わしはチャリも出したらなんだぞ。出したらなんだが、それがりっぱに建てやがってなあ。坊さま呼んで法要じゃちうて村中お祭り騒ぎじゃ。

それ聞いて頭に来たのは、御浪人になられた金森様のご家中の方々じゃ。数人のお侍衆が新しく庄屋になった伊左衛門のところへ来られ、

「何を考えておるか、お上の大罪人ちうのに。それで庄屋が勤まると思うか」

むろん、伊左衛門、

「いや、もう私も腹に据えかねとるんですが」

「じゃ、叩きこわせ。拙者らも手伝ってやる。すぐこわせ」

藤吉の墓をこわす、それ聞いてわしすっ飛んでったぞ。もうれしてうれして、こんな面白いことはないわい。わし頭へ来るんじゃが、藤吉の墓には線香を立てる、花供える。父っつあまの墓にはお前、つばひっかけたることがあるんじゃぞ。なにか仕返ししてやらにゃと思っとったから、もう血湧き肉躍った(気持ちよく無気味に笑い)肉躍ったわい。

いや、わしみたいに喜んで集まって来た奴がまた居るんじゃ、下川にゃ。みーんな立百姓に痛め付けられて来た奴ばっかじゃで。ところが藤吉の墓ひっくりかやいて大きなげんので叩くんじゃが欠けるだけでなかなか割れんのじゃ。(墓石を叩く音。みんなの騒ぐ音)

「しぶとい奴じゃ」「思いっきり叩くんじゃ、思いっきり」

(墓石を叩く音がだんだん大きくなり、小さくなる。そして藤吉の声が聞こえる

「誰のためでもない。俺のためじゃ、俺の」「何ぬかす!格好つけやがって」

「俺のためじゃ、俺の」「俺のためじゃ、俺の」墓石を叩く声がまただんだん大きくなる。およし異常な笑いとなり、突如狂ったように大きく笑いだす)

「よし、性抜いたる、性抜いたる、わしが藤吉の性を抜いたる。抜いたらすぐ割れるわい」

「性抜く?どうして抜くんじゃ」

「女の腰巻き巻いたら墓の性が抜けるとむかしから云うわい」

「腰巻き」

「さあ、みんなあっち向いとれ、見るなよ。父っつあまの仇を討ったる、討ったるんじゃ」

(うしろを向き腰巻きを脱ぐ、そして墓に巻く)

「藤吉!満足じゃろう、わしの腰巻き巻いてもらって、こんでお浄土へ行けるぞ、お浄土へ。ざま見やがれ!(大きく笑い)さあ、こんでええ、叩き割れ!叩き割るんじゃ。わしの腰巻きで性は抜けた。(大きく笑い)藤吉の奴、興奮してびっくりして、目ばちくりしとるわい。何をぼっと見とる。割らんか、割るんじゃ」(墓を叩き割る音)

「力入れよ、力。墓じゃない、性のないただの石ころじゃぞ。力ふりしぼらんか!」

「あっ割れた、割れたぞ!」(大きな歓声)

「割れた、割れた。ほんとに割れた!」

(大きく笑う、無気味に笑う)

「藤吉が真っ二つに割れた!」

「川へ叩き込め!叩き込むんじゃ」

こうしてな、藤吉の墓石はな、那比川の谷底に真っ逆様にバシャーンと放りこまれた。放りこまれた。放りこまれた……。

この話はなあ、すぐ郡上中に広がったわい。立百姓の恨みは買ったが、庄屋衆んたは手を叩いて喜んだに。わしゃ気がすうとした。すうとしたぞよ。藤吉が真っ二つ、藤吉が真っ二つ、藤吉が真っ二つ。

(およし異常な笑いとともに徘徊し始める。寺の鐘が鳴る。鳥の大群の鳴き声。長い間)

そうしたらよう、照明寺の御院住がこられた、照明寺の御院住が。会うなり、

「およしさ、困ったことをしてくれたなあ)といわっせる。わしゃ待ってましたとばかり藤吉のこと、村の者んたのしたこと洗いざらい話ちゃった。わしがどんなに苦労したか。今ここに生きてよう立っとるもんじゃちうたら。御院住がいうんじゃ。

「いつも又右衛門さんが家においでじゃったからおよしさのご苦労もいろいろ聞きました。聞きましたがなあ、又右衛門さんが何より苦じゃったのはお墨付きのことじゃったぞ。わしだけには話さずにはおれなんだんじゃろう。藤吉からも笠松であったことは一切口にしては困ると釘をさされとったようじゃ。噂だけならええが事実と分かったら百姓んたが何する分からんからじゃ。裏山での話ちうのもそれじゃろう」

「そりゃほんとか」

「ほんとじゃ。藤吉も苦労したんじゃ。むろん、又右衛門さんだけじゃない、だけじゃないが、責められて庄屋衆の誰かが、お墨付きのありかを話したことも事実じゃと思う。そうでなかったら半十郎さのとこへ笠松から来るはずがない」

「そんで御院さんはわしに藤吉を許せちうんですか。」

「いや、許せといっとるんじゃない、こうい

うのが人間の業なんじゃ。こういう悪い時、庄屋の家に生まれた又右衛門さんも、庄屋に嫁いだ、それもよりによって那比の庄屋の嫁に嫁いだおよしさも与えられた宿業なんじゃ」

「宿業かなんか知らんが、そんで藤吉は神様で、父っつあまは鼻糞ですかい。宿業、（笑い）鼻糞で神様になれなんだひがみかもしれませんが、わたしゃどんなことがあっても藤吉は許せませんでなあ。あー許せん」

「許さんでええ、ええ、憎うてええ。ただなあ御開山聖人も不断煩悩得涅槃といわっしゃった。煩悩を絶たずして涅槃を得るとおっしゃるんじゃ。わしら煩悩の固まりじゃちうこと忘れたらいかんぞ。そうすると知らん中に自分が見えてくる。わかるか。見えてくるんじゃ。せめて煩悩の固まりちうことを知るこっちゃ、固まりちうことを知ることで必ず光明が見える、ええな」

煩悩、煩悩。たしかにわしゃ煩悩から抜けられんわい。抜けられん。そんでも照明寺の御院住の話し聞いて苦になったか、翌日朝早うから那比川の谷底を何度も見て回ったが、もう墓石らしいものはどこにも転がっとらなんだ。（無気味に笑い）どこにも見えん、どこにも……？

しばらく経ったある朝じゃ、まんだ暗いのに（戸を叩く音）

こんな早うと思って出て見たが雪がこっこっと降っとるだけで誰もおらん。そんで寝床に入ったら、また（戸を叩く音）……もう一度起きて見たら新しい雪に帰ってゆく足跡。びくっとして戸を見たら血糊の手あとが。わしゃ転がるように寝床に飛び込んだが背筋が凍り、ガタガタ震えた。そして脳味噌に錐が刺さったようになり気が遠うなった。朝になっても熱気があって震えが止まらなんだ。止まらなんだが、わしゃその日が十二月二六日ちうことに気付いた、気付いたんじゃ。そんで無理して起きて戸をおそるおそる見たら、もう血糊の手の跡はなかった。跡形もなかった。十二月二六日ちうは打ち首になって一周忌に当たる日。打ち首になったのは、ちょうど同じ明け方前じゃったという。

藤吉の煩悩か、わしの煩悩か。わしの煩悩か、藤吉の煩悩か。けど、けどけど、藤吉がにくい。（大きく悲しく笑い）いつまでもいつまでもこうしてついて廻る藤吉が。憎い！憎いんじゃ。（泣く）

（長い長い間、どこからともなく「げんげんばらばら」が聞こえてくる）

それからずーとわしゃ生きとる。死なずに生きとる。そして今年は父っつあまの三十三回忌じゃ。まんだ煩悩は抜けん、抜けんのじゃ、抜けんままあの世へ逝くんじゃろう。

〈幕〉

（脱稿　一九九一・四・二七）

七八号後記

◇相変らず原稿不足である。大上段式に構えた論文なども、絶えて久しい。別にいまそれがほしいわけではないが、書けるひとが見当らぬのが淋しい。経験も能力も十分に持ちながら、毎日の忙しさに消耗している。作って、こわして、跡形もなくなるのが芝居であるとはいえ、かけらのひとつ位は残しておこうではないか。この「演劇会議」はそのためにあるのではないのか。

◇劇団通信と上演写真が賑わっている。性格も情報交換誌に変りつつあるようだ。それはそれでよろこばしい。劇作家は自作の無断上演を発見する。劇団はレパートリィさがしに役に立つ。新しい知り合いになって文通もありそうだ。ただここのところ、相互批判のエネルギィがきわだって失せた感じがしてならない。自分を許すためには相手を許すということになるのか。相手にきびしくあるためにも自分にもきびしく、の方が芝居では役に立ちそうだ。

◇本号では東会議の「作家会議」の報告、京浜のフランスへの太鼓公演のレポートが、読めると思う。土屋清さんがあの世から叱ってくれたのか、仲武司、梶武史のおふたりが揃って書いてくれた。ぼくの心づもりでは、ほかに演集和歌山の創作劇「操縦不能」（作・楠本幸男）の上演評がほしかった。この作品は話題にできると思ったのである。

◇これを書く直前に、中島陸郎氏から『阿片とサフラン』という、B6判三百頁に及ぶエッセイ集の贈呈をうけた。中島さんは「演劇会議」七三号に劇団京芸の「塩祝申そう」の劇評を寄せられ、初めてその名前と文体を知った人である。二日間かかって完読。どうしてこれだけの人を、ケンカするにせよ、大阪のリアリズム派は関わり得なかったのか、と長大息した。リアリズムも前衛のつもりでいるといつのまにか最後衛になっているということはありうる事だ。

◇桜井郁子さんから〈モスクワ・レポート・8〉がとどく。『屋根の上のヴァイオリン弾き』のとっときの話である。戯曲では『郡上の立百姓』をリアリズムの手法で裏返して読ませるひとり芝居。書けないを連発していたこばやしさんが、書けるこばやしひろしに変ってきた。全リ演の作者たち、あとへつづけ。

◇七七号の大橋喜一さんの編集子の喜寿によせられた文章は心をうった読みものとなって反響が返ってきた。感激であった。（もも）

演劇会議　七八号
一九九一年八月二十五日発行
定価　五〇〇円（送料二一〇円）
編集委員　萩坂桃彦・こばやしひろし
丸子礼二・仲武司・藤沢薫
梶武史・栗原省
発行所　演劇会議発行所
〒210川崎市川崎区渡田四－一一－三
はぎ書房内
電話　〇四四（三三三）〇七七五
誌代振込は
川崎信用金庫小田支店一三三五二七
又は郵便振替　横浜〇・一七二二七